

192
52

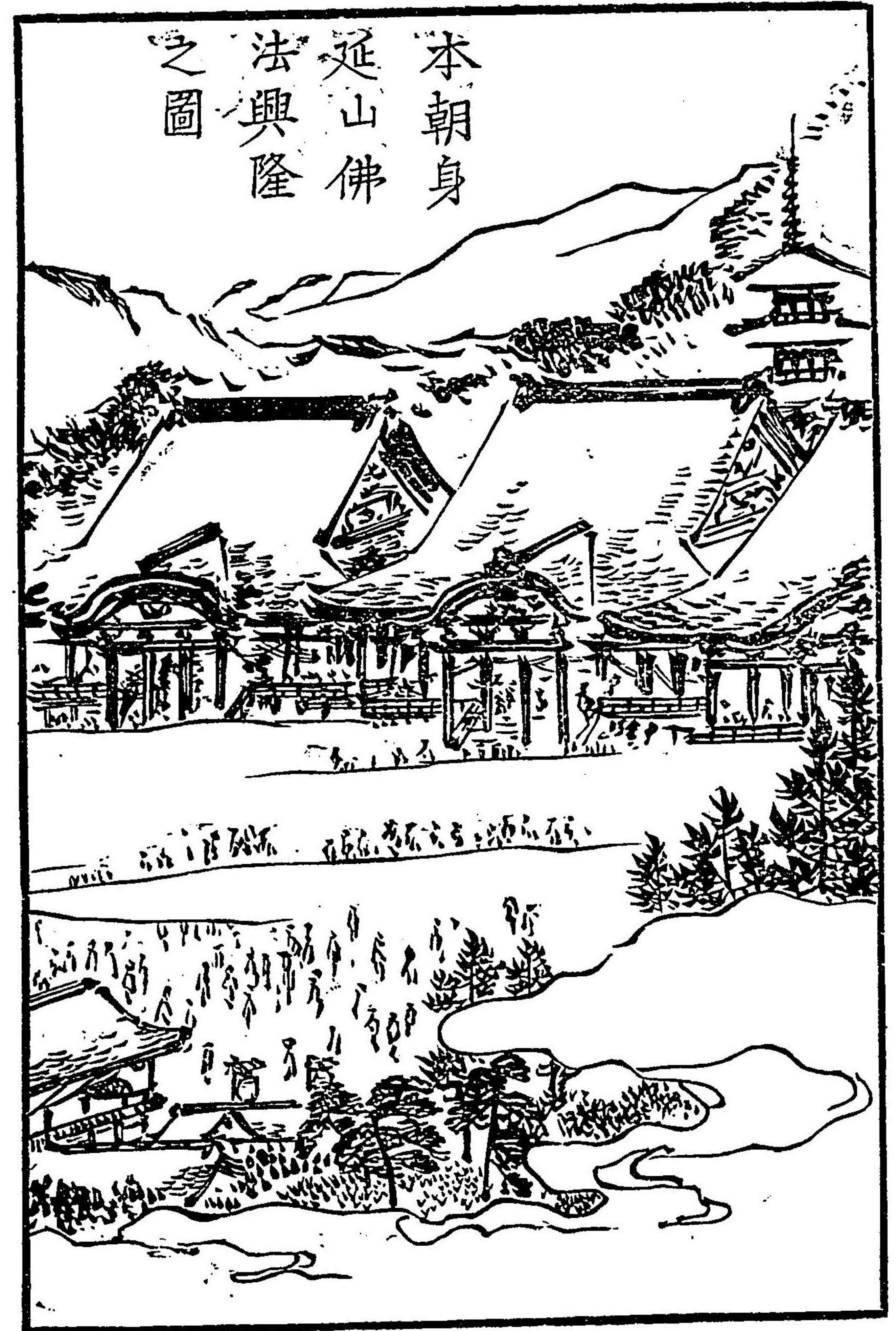
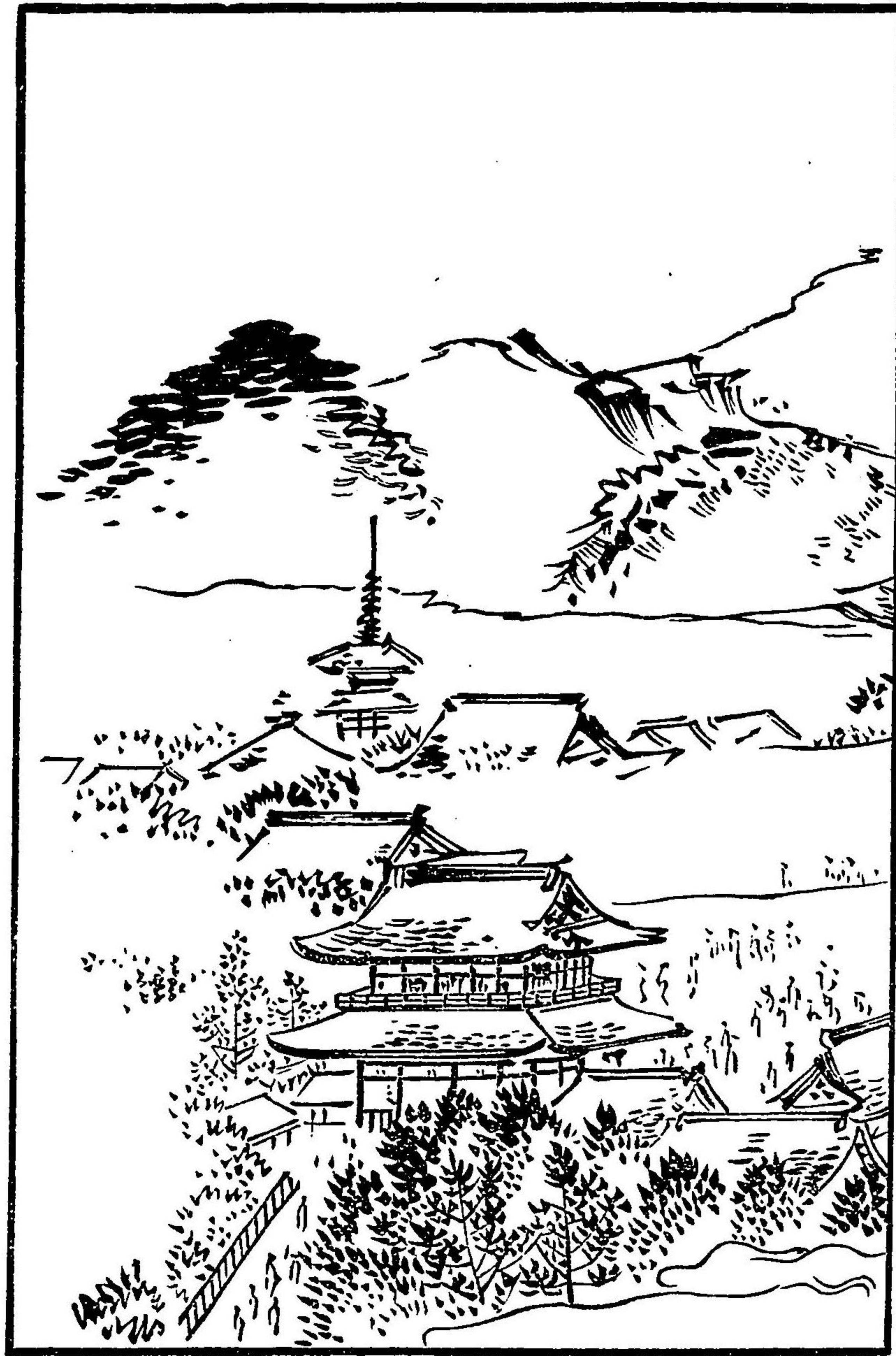
大正集

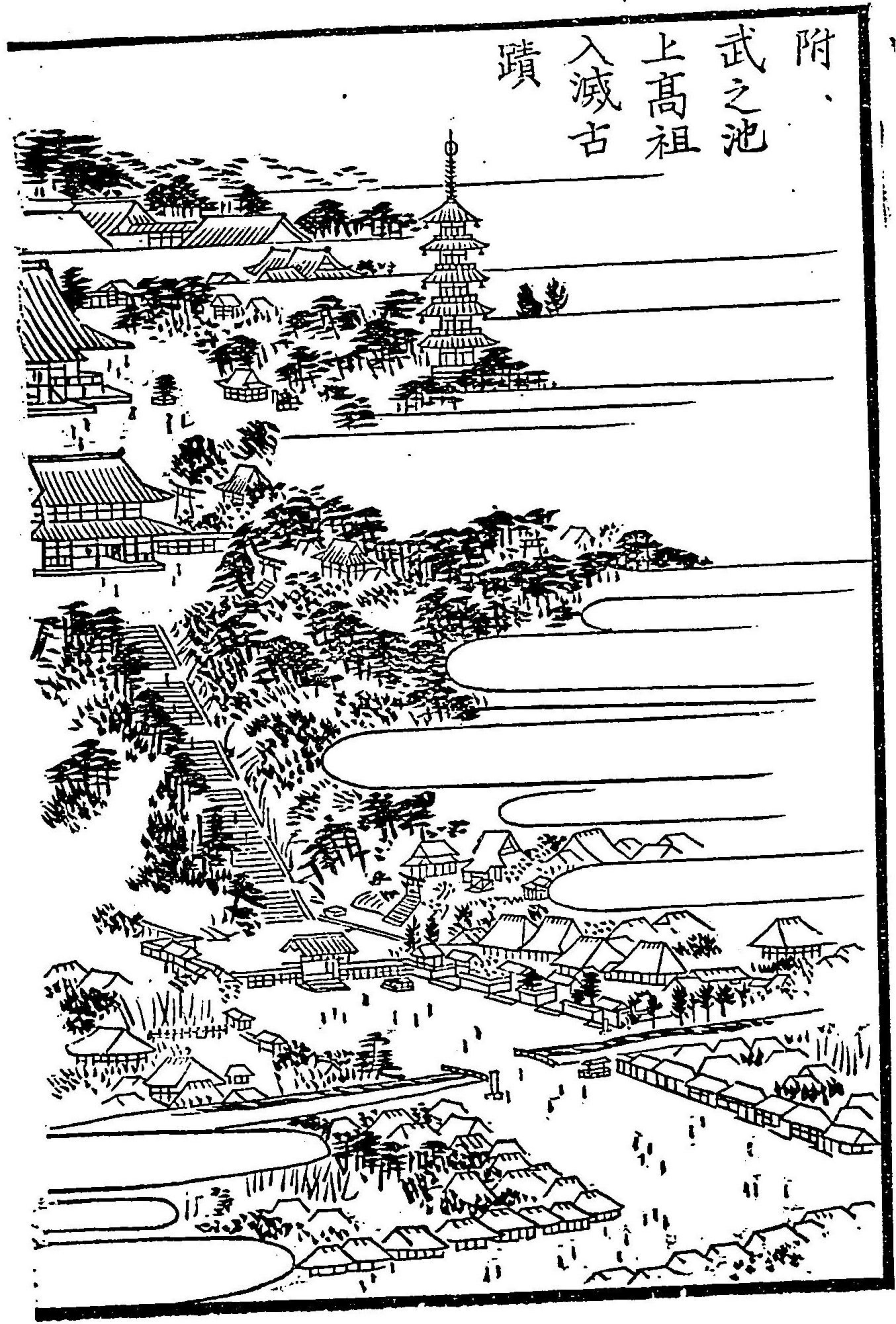
萬物各有王月天之於衆星蒼海之於江河梅檀之於林木蓮華之於草葩皆類也出於其類拔乎其萃所以王之爲王蓋牟尼聖經八萬四千亦唯有經王法華摠持群典森々萬類十界之依正無不因此經力然則法華經者國家之柱石群生之命脈不待言也其大法所現之道場膳部洲中有三初金仙從在竺土靈鷲峰而開矣之支那之智顛將護于天合之扶桑之蓮師祖述于身延嶺此三國三山者誠大千界之神秀而其俊極之狀旁磚之態玲瓏之美瑰奇之勝皆是金輪涌出黃金之所成三聖者衆生之棟梁而三嶽者千界之靈域也三聖在三嶽扶揚此經王猶三光照三才尊之又尊高之又高可仰而信俯而尊運念於彼凝心於此祥福多々遂合十指爪掌曰南謨三山三身如來本結大緣寂光爲土諦觀法王法法王法如斯

維時萬延元年龍舍庚申仲夏日

小川 泰 堂







凡例

日蓮大士一代の事蹟は行學院日朝聖人の化導記。圓妙澄師の註書讀。また日省師の高祖傳。六牙潮師の別頭統紀。健立玄得二公の高祖年譜。これらに至て善盡し美をつくすといへども。其文高く其旨遠くして。在家の不暇にはその善美讀解がたし。又御傳記。御一代記。紀年録等の假名書あり。其は讀易けれども。事實に委しからず。今此書は古往今來。その御一代にかゝはるべき書類を博く考へ集めて。本化垂迹のはじめより。宗門弘通の脉相。五百年前を今日こゝに見るが如く綴りなし。婦女童幼までも。この書を看此文を讀で。隨喜の心を發し。信心増進の梯となさんとす。その見處文言淺く。輕薄に似たれども。條理と義意とは。統て逸々に祖書ならびに。諸先哲の確説に根づき。漢文和語の諸傳記に考合たれば。讀者鹿忽の念を爲べからず

一 宗教宗教の法門は一宗門の大事にして茲に盡すべきにあらす。五百年來我が宗。英傑の諸師。かはるぐ世に出て。棟をさへ牛に汗する書類。法理宛然として四海に超く。元來御傳記は。大士御一生の起居動靜を。記すべき書なれば。宗法の理論を立てるにあ

らず。然はわれど人法も一致なるが故に。梅檀の餘薫。處に觸てこれを述る事あり。讀者その嚴毅を厭ふ事なけれ。又數か所問答法論は。これぞ弘經の骨髓。微細をつくすべき事なれども。一二の宗論に滯て。御傳の意の疎薄にならん事をれもひ。唯その論條を録して。委曲なるとは其問答の記録にゆづる。又御一代の中に小室に法力を競べ。普門の伊豆に訪。日輪の中に不動を拜み給ふなど。正法もどより不思議なりといへども。其奇怪變態に過て。宗門の法則に合ざる事は置て論せず。漏たるにあらす載ざるなり。又卷中假名づかひは古へ振に違ふべからずといへども。古言舌に馴す。兒女に便ならざるゆゑ。俗通に従ふ處あり。書も亦しかり。古代の風姿眞格の書法のみにては。觀者眼に飽ん事を察し。趣きを當世に寫すあり。識者領會すべし

一 大士の徒弟。六老僧又中老十八師等。その餘の末師。歸依の男女。又は一時結縁の輩など。此等を單に本文に書なさば。讀譯がたきをもつて其本傳より。一段低くこれを別記して。其名跡靈場まで本文に混せざるやう明辨す。しかはわれど本化の聖者。垂迹の顛末。大法流布の基元なれば。一紙半葉の上にあらかじめこれを盡すこと難し。願くは我

○凡例

が愚見のいたらざる所は。佛乘に宿志あらん士。誠信の臂力を添。その鹿漏たるを増補
 しその冗長を虧て。卒に全備となし。勸信の堤。竊す崩れず。法水を萬々年に湛へもて
 末法毒惡の旱魃にわれたる。衆生の心田を潤さば。これまた祖恩報酬の一分ならんか
 し

日蓮大士眞實傳總卷大綱

壹之卷

自貞應元年 壬午至 建長二年 庚戌 高祖初歲より二十九

二之卷

自建長三年 辛亥至 康元元年 丙辰 春秋三十より三十五

三之卷

自正嘉元年 丁巳至 文永四年 丁卯 年齡三十六より四十六

四之卷

自文永五年 戊辰至 文永十年 癸酉 壽齡四十七より五十二

五之卷

自文永十一年 戊戌至 弘安五年 壬午 壽算五十三より六十一

日蓮大士眞實傳一之卷

目錄

- 貫名家系伊谷明神奇瑞の事
- 貫名次郎重忠房州小湊へ配流の事
- 梅菊女靈夢を感じて懷胎の事
- 善日啓誕生祥瑞不測の事
- 善日磨村里の頑童に無益の殺生を誡る事
- 六月雪霜を降せ又礫石を雨す事
- 善日磨清澄に登山して藥王と改名の事
- 梅菊女藥王磨を清澄に訪給ふ事
- 藥王磨剃髮名を蓮長と改むる事
- 智慧を虚空藏に祈て一切經を讀給ふ事
- 鎌倉に出て大阿然阿に淨土宗を聽給ふ事
- 餘海に伴れて比叡山に登給ふ事
- 慈覺大師の義を不審の事

- 泉涌寺に入て大覺禪師に參する事
- 三井の學室に智證の跡を尋給ふ事
- 善證に値て鎌倉の凶變を聽給ふ事
- 三浦泰村鎌倉に謀叛法華堂にて自害の事
- 蓮長師南都の六宗遊學の事
- 江川吉久に値遇の事
- 高野山に登て眞言の秘法を學び給ふ事
- 聖德太子の御墓山に詣給ふ事

二之卷 目錄

- 蓮長師比企能本と儒佛の離合を論談し給ふ事
- 冷泉家を訪て敷島の道を聽給ふ事
- 眞廣法印に交て東寺御室の學室に入給ふ事
- 法華守護の番神叡山に示現の事
- 淨本夫妻の厚情に依て京都越年の事
- 伊勢の神廟に靈瑞の事

郷里に歸て両親を慰め給ふ事
 道善御坊喜で蓮長師を饗應の事
 旭日に向て撃て妙法を唱へ宗旨建立の事
 東條景信の怒を避て華房に隠れ給ふ事
 日蓮と改名して両親に大戒を授給ふ事
 故國を去て鎌倉に趣き給ふ事
 相州三浦米が濱着船の事
 名越松葉が谷に菴室經營の事
 成辨叡山より來て徒弟となり日昭と改名の事
 四條頼基蓮祖の教導を受る事
 蓮祖善春途中に同傘して蓮祖に歸伏の事
 印東有國の一子を法弟として名を日朗と召事
 蓮祖剃髮以來富木殿資財を見繼たる事
 鎌倉十字の辻に立て折伏弘通の事
 荏原池上南部等歸依隨從の事

三之卷 目錄

鎌倉大地震大雷の事
 高祖駿州巖本實相寺の經藏に入給ふ事
 天下大飢饉疫病流行人多く死亡の事
 立正安國論を作て鎌倉殿を諫る事
 最明寺時頼公高祖に對顔の事
 松葉が谷御菴室燒討乱妨の事
 高祖中山に在て百座說法教化の事
 吉田兼益より神道傳達の事
 高祖伊豆國伊東に御流罪の事
 漁者彌三郎篠見が浦に高社の危難を救ふ事
 高祖伊東朝高の重病を祈治す事
 閻浮第一釋尊高祖感得の事
 北條重時逝去子息長時屢惡夢に墮る事
 高祖赦免を得て鎌倉に歸り給ふ事

神妙の經力高祖の母堂蘇生延壽の事
 道善御房に華房に會して教化の事
 小松原横難法子檀越討死の事
 市が坂の雪中老婆綿冑子を供養の事
 野州宇都宮遊化の事
 長七十餘度の大慧星一天に亘る事
 高祖富木の館に越年して鎌倉に歸る事

四之卷目錄

大元蒙古の賊軍日本に逼る濫觴の事
 高祖十一通の書を方々に贈て法論を促給ふ事
 甲駿に遊化して富士山に登給ふ事
 大早魁良觀上人雨晴不覺の事
 高祖田邊が淵に雨を祈り給ふ事
 諸宗より高祖を譏奏して其罪死刑に極る事
 松葉が谷に高祖を召捕て町々を引渡事

鶴が岡八幡を諫曉して正法の威力を示し給ふ事
 老婆胡麻の餅を捧げて今生の面別を歎事
 龍の口に法華經の利險を顯給ふ事
 明星依智に降て高祖を擁護する事
 高祖依智を發て佐渡國に趣給ふ事
 難風角田の岸に着船して不圖毒蛇を度し給ふ事
 海上の激浪に題目を書て龍神感應の事
 佐渡國の配所御艱難の事
 六箇國の僧塚原に來て問答の事
 本間六郎重連歸依の心を發す事
 北條家一門京鎌倉合戦の事
 高祖一之谷に移りて化導愈々盛なる事
 嚴島辨財天示現して本尊を請給ふ事
 高祖十界勸請の大曼陀羅を顯して本地を示す事

五之卷目錄

執權時宗靈夢に感じて大士を救免の事
 日朗赦免状を持って佐渡に渡海の事
 大士佐渡を發て鎌倉に歸り給ふ事
 鎌倉殿大士を館に召て懇勸に應接の事
 法華宗門弘通の免状を賜はる事
 大士甲斐國波木井實長の方へ赴き給ふ事
 八代山梨兩郡より信州葛木まで遊化の事
 石和川に鶴飼の幽靈を濟度の事
 身延山に幽栖閑居の事
 日朗平賀忠晴の一子を將て登山す大士名を經一と賜ふ事
 小室の善智大士を毒殺せんと謀る事
 大士上野殿に大橋太郎の因縁を語り給ふ事
 日進鎌倉桑が谷に龍象坊と問答の事
 四條頼基王家の勘氣を蒙る事
 七面大明神示現影向の事

蒙古退治儀曼荼羅現證利驗の事
 大士發病預じめ死期を知召て池上に趣き給ふ事
 經一磨に京都弘通を御遺言の事
 高祖大士池上に在いて御入滅の事
 御遺狀に任て御廟を身延山に築く事
 御願満足妙法一天に光耀の事

本化の肉身宗祖薩埵の聖跡をしるしたる書世にいと多かれとそのふかきはつるへ繩の短くて汲によしなく又山の井の淺きは細ふにあかぬ心地そしはへる今此いつまきの書は意は深くもわれ詞やすらに尋常の人の見やすき程につより成したればその巻々をひらけは大士の本地垂迹てふ事より初めその弘通のありさま途に罵られ磯にうたれ氷なす又に身を劈かれつゝその慈悲終に四海にあふれしすかたまでいにしへを見るかごとくありけるをかしこみすみやかにさくら木にちりはめ世にねはやけにすこは語りつき言つくにもまして事は數ならねどもその功德はかさりあらぬにやと五百とせのむかしの春のいと柳くりかへしれもふものから鬼の毛の筆にいさゝかそのこゝろさしを述ることしかり

安政なつこのとしかのぬさるささらさ中の六日

藤掛 亥淵
根本 明甫

特 12
461

日蓮大士眞實傳壹之卷

東海相模州 小川泰堂編述

一天雲盡て日月淨く。四海風收つて萬邦寧からぬ例はあらじ。こゝにかしこくも本地四八の妙相を籍し。日本國東海に應生し。末法萬年の闇を照し給ふ。日蓮大士。俗姓の先蹟を遠く考がふれば。天津兒屋根の神裔にして。皇極帝の御時。入鹿父子の惡逆を伐て。天下の靜謐を奏したる。正二位内大臣鎌足より十二代の正嫡。備中守共資。正暦の元年夏の頃京都を去て。遠江國村橋といへる里に住居せしに其軀男子なご事を歎き神にその傳統の冥助を祈ること久し。寛弘七年庚戌の正月元日。同國引佐郡井谷明神に參詣し神前に祈誓を凝しける時。祠の前瑞垣のはどりに稚兒の啼聲す。共資あやしみて立出見るに盧橘の樹のもと。筒井のはどりに綾の衣につゝみたる。いと美しき嬰兒あり。抱き揚てこれを觀るに氣高き男子にて。眼の光初空の旭日にかゝやき。尋常ならぬ稚兒にありければ。共資はこれぞ神の賜ならんと。懷き歸て我が子として。此をいつくしみ養けるが生長にしたがひ

○日蓮大士眞實傳一之卷

雄力猛く智慧亦萬人に優れたり。共資我が女を配合て。備中大夫共保と呼。初て姓を井
 伊と名乗。彼の神前の奇瑞を以て井桁に盧橋を家の紋所と定めけり。かくて共保の子備中
 次郎共家其子九郎共直。その子新太夫惟直。惟直の子を赤佐太郎盛直といふ。盛直に三人
 の子あり。嫡子は次郎良直次は三郎俊直。次は貫名四郎政直同國山名郡貫名に領居するゆ
 る。貫名をもつて姓とす。これ日蓮大士の祖先也。この四郎政直に二人の子あり。長男は
 四郎行直。次は六郎直友なり。行直の子重實。重實の子又二人ありて。一男は早世し。次
 男は次郎重忠といふ重忠に五人の子あり。嫡子は藤太重政次は早世す。次は仲三重仲。次
 は日蓮大士。末子を藤平重友と號し。此子孫藤平を姓として。今猶上總國大野の郷に存在
 せり。一切の江河海に入て。皆一味の鹹となるが如く。在家の四姓沙門と成て後に姓なし
 こゝをもつて其委悉をつくさず但その來歴をしるすになんわりける。此時に當て。右兵衛
 佐源頼朝卿は。平家を西海に追落し。相州鎌倉に都を立。四夷八蠻を伐鎮め。武威を天
 下にかゝりやかす折から貫名次郎重忠も。政直以來。遠州山名郡に在て。鎌倉に參勤し我が
 領地の民を憐み。文を講じ武を磨き。舊き家名を落さじと朝暮勵む時しもわれ。當時源家



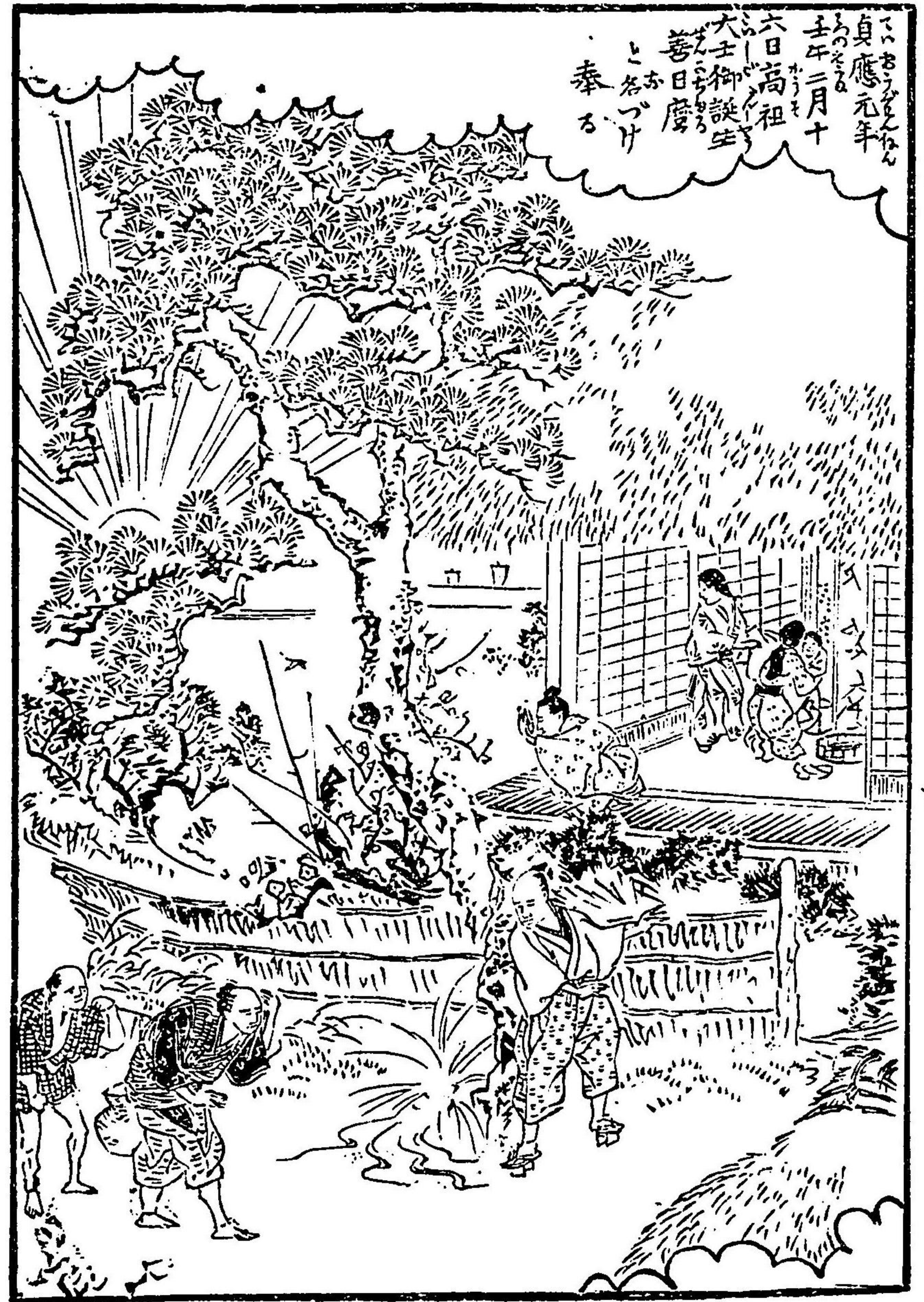
藤原共資
 正月元且
 井谷明神
 參詣
 子孫
 いのる

の執權職。北條四郎時政。ひそかに諸國へ人を馳せ。二心ある武家を探り。これを誅して天下の愁ひを除くこと。恰も秀を抜て五穀を養ふが如し。貫名重忠は性質忠直にして諂ふ色なく。武備を逞しうして其職を勤む。大孝は孝に似ず。大忠は不忠に混じ。平家の殘黨に志を通ずるやのよしあやしみに預り。鎌倉に召寄。糺明をも遂す罪なくして所領を沒收し安房國長狹郡に流罪となりしは。建仁三年五月七日の事なりき。其栖へき方とては。東條市河の郷小湊といへる海濱にて。浦山近く。松の嵐の吹あれて。寢覺の床に夢も結はず。昨日まで賑ひ暮したる。男女の影もどめす所領なければ粟飯だに炊くべきもあらず。斯て果べき世の住家ならねば。舊きゆかりを求め。下總國路野邊なる大野吉清が女梅菊女を迎へて妻となしぬ。此は清原氏にして。舍人親王十世の孫裔世に賤しからぬ身にわれど。夫婿の罪なくして。配所の月に憔悴たまひし面影をいたはり。磯が根に甘海苔を搔て日の暮るをいとはず夜は麻を績。綱をついて。宵の更るを知らず。夫婿の次郎も沖の小舟に命をまかせ。釣する海士の群に入りて漁獵を事とし妻も夫も腹に馴ぬ。暇が仕業も恒となり其いとまには郷の童等に筆握術などを教るにぞ。在しむかしの思はれて。物辨へぬ磯村の伏

屋のうちにも敬れ。富としもなければ。物不足なく暮しける。梅菊女はいとけなきより。神に佛に能念し事へけるが。此小湊の浦は。日本の東海にして。朝暾に遮る島山もなし。梅菊女は朝なく。窓の戸しらむ曉天には明る開通しと起出つ。身を淨らにし香を焚。夫の行末両親の延壽。いのらぬ日とてはなかりける斯て承久三年夏の初梅菊女は夫婿の次郎に語るやう。今宵不測の夢こそ見つれ。常にかはらず。日天子を拜みつ。見仰れば。日輪の光明いやまさり。八葉の金蓮華に乗給ひ海上はるかに飛來。妾が懐に入と見て。驚きさめてはべるかし。婦女の愚なる心より。正なき夢を見つるよと。叱りたまふなどありければ。次郎重忠も愕然としてねどろき。我も日永の疲にて。まどろむ中に。いと尊き白髪の老翁が玉の如き稚兒を掌の上に居たれば汝に授るぞ能養て出家にせよと。再應再三ねんぞろに。さし示し給ひぬ此は不測なる夢想かなと。互ひに語り合給ひける。夫より梅菊女は懷妊身となり給ひ。糖の柏に秋告て。海原くらき時雨雲夜半の霞に鑑さねて。いつしか氷る笕水の音もどたへし冬の空。今年も夢と暮にけり明れば貞應元年壬午の春。時に人皇八十五代後堀河帝萬機の政事を攝て。四海を撫育成給ふ。又鎌倉には四代の將軍。

藤原頼經公なり。此は右大將頼朝卿の血縁なるをもつて。後室二位尼政子の方のはからひによりて。二歳の時鎌倉に請迎へ。當年五歳に渡らせ給ふを。將軍と仰奉り二位政子の方。玉籠の中に。將軍を護り。武門の仕置。天下の成敗。公家の進退まで。皆これ政子の方にて。殊に舍弟北條義時は常時の執權たり。保元平治の國乱も。さのふの噂と消はてし。今は言の葉にかけて。いひ出る人もなく鎌倉山の星月夜日本の大小名。弓箭とる身も取ぬ身も。心を鎌倉に寄ざるはなく。諸侯の邸宅雲をさへ。神社佛閣霞と棚曳。街をひらき衢を分け。朝市夕店の繁昌は。谷七郷に賑ひて。新玉の春いく萬代の立かへり。盡せぬ聖代の壽きは。其頃中納言元綱卿の歌に

吾妻路のあまた郡の中にかて鎌倉さかへ初けん。と詠給ひしにも。其繁昌は知られけり。かくて房州小港の浦に。奇異の事こそあれ。此里近き磯村に。誰が植れさし種もなき。蓮の若葉の生出て。立葉巻葉の茂り合ひやがて白蓮華の咲出たるに華葩大いにしてその色白銀の如く。旭日に輝き。いと美麗く見ゆければ。此遠近の心なき浦人も。あな不審。夏ならでは咲ぬとさし此華の。未風さゆる雪霜に。かく珍らしく咲たるは。此浦に



貞應元年
壬午二月十
六日高祖
大士御誕生
善日慶
と答つけ
奉る

めでたき事のありもやすらと。いと驚く見物す。この吉瑞のあとよめて遠華淵とて今に猶其名所の残りける。さても去つとし。こゝに配流たる賞名次郎重忠その妻梅菊は。この二月の十六日。曉天より。産の氣つき給ひ。此日さらさの空いと長閑に風も風。紅旭潮にさらめさわたりさしいる庭の柴垣に。今を盛の梅の宿けふも來馴し黄鳥の法々華經のこゑいさぎよく。次郎重忠は身を清め日天子を拜し。妻の安産を禱りける。産舎の内には。得ならぬ妙香のかをり高く。午の刻ばかりに。玉の如き男子出生なしたまひけり。此浦人の我もくと昔信て。悦いふ者ひさもさらす。中にも齡高ねとなびて。望陀木綿の布子さへ。折目の見ゆる村長が。門口より次郎の主よこれ見たまへ。かゝる不測の事ありと。呼立られ。次郎立いで見てあれば齊花さく前裁に。忽ち泉の涌出で。高く浮濁滔々と珠を飛ばして潔よく流るゝにぞ。俾ひこの清泉を汲で産湯となせり。彼といひ此と言夢の奇瑞も夢ならず此兒の生前いかならんと。人には言ね二親の心のうちぞ頼もしき。母梅菊もやすうに肥立。この稚兒の面貌を見るに。額廣く眉高く鼻正しくして色いと白かり。口の氣息香ばしく。其容儀凡ならねば。日天子の吉瑞に因て善日磨とこれを名付日にそい月を重つと。

蝶を追花を摘でいと壯健に生立給ひける。實に末法五濁の颯浪をしのぎ。經王法華の利益を三千界に被らしめ給ひし。日蓮大士は此稚兒に在しけりされば此年をもて。ひかしを逆算れば。大聖釋迦牟尼世尊月氏國。雙林に在いて。入滅ましくける其年より正法千年。像法千年すき終て末法に入て百七十一年。如來の滅後すでに二千百七十一年に相當る彼の月氏の釋迦如來は。西天の國王と生れて。本果妙の功德を三界に施し今この日本の日蓮は東海の下賤に生れて。本因妙の利益を。閻浮提にかゝりやかし給ふ彼は西天の月氏。此は東海の日本なり。彼の入滅は二月十五日。此誕生は二月十六日。天竺の法華經は。西より東に傳へ弘まりて。正像二千の雲を拂ひ。今日本の題目は東に發り反て西に進み弘つて。末法萬年の冥を照す。先聖後聖誠に符節を合たるが如し。佛法修行せん輩はかゝる大因縁を辨へ知て。茲に悟入せずば。無量億劫にも。得脱の道あるべからずとぞ思はれける。實にや栴檀の二葉。頻伽の卵殼。善日磨は日にまじ智慧づきて父を慕ひ母に這賣る頃より。人に愛憐ふかく。唯假初に懷抱せらせし人も。長くこれをいとれしみ。磨も亦いとたび學打愛したるをば日を歴てよく遺れたまはず。慈母の懷を汚さず。乳を不吐。三四歳の頃よ

り。世の七八歳の小兒の動靜ありて。いとれとなしく。常に家に在て母のために塵を拂ひ。席を淨むるの手を扶け。父の側に事へては。墨を摺あるは茶をまゐらせ。萬態に心を配ること。いとも不測に思はれけり。今宵も浦の夕月に。里の頑童の三四人。友達がほに音信て。燈火の影に居倚きのふは彼所の磯に榮螺拾ひぬ。今朝しも背戸の楊に糶として。雀をあまた捕たるはと。郵風たる片言もて。己が様々語るをさし。善日磨は頭掉していやとよ磨はさいつ頃慈父の寝物語にさしはべりぬ。程近き事なるが京都に山陰中納言とかいへる人ありて或日桂川といふ河原に往かゝり給ひし茲に鶴飼を樂とするいやしの。老爺ありて。大きな泥龜をとらへて殺さんとせしを。山陰の卿いと憐み。身に添給し衣服。ひとつを其料に取らせ。龜を放ちて遣たまひぬ。其後山陰殿は太宰の少貳といへる官に成て。家の男女を引具して。船にうちのり。筑紫をさして下給ふ此卿に若君ありき。母は繼親にて有ければ。深く心に悪み居て。折こそよけれと過ちのやうに。此兒を舩より投落したりしが不思議や此兒波の上にありて沈給はず。能く見てありければ。數百の龜の甲。海にうかび。其兒を捧載て衣服さへ濡ざりしを。其儘取揚。妻をば路より京都に追遣給ひし。そ



山陰中納言
龜をたぎけて
かめ又公達の
溺死を
すゑふ

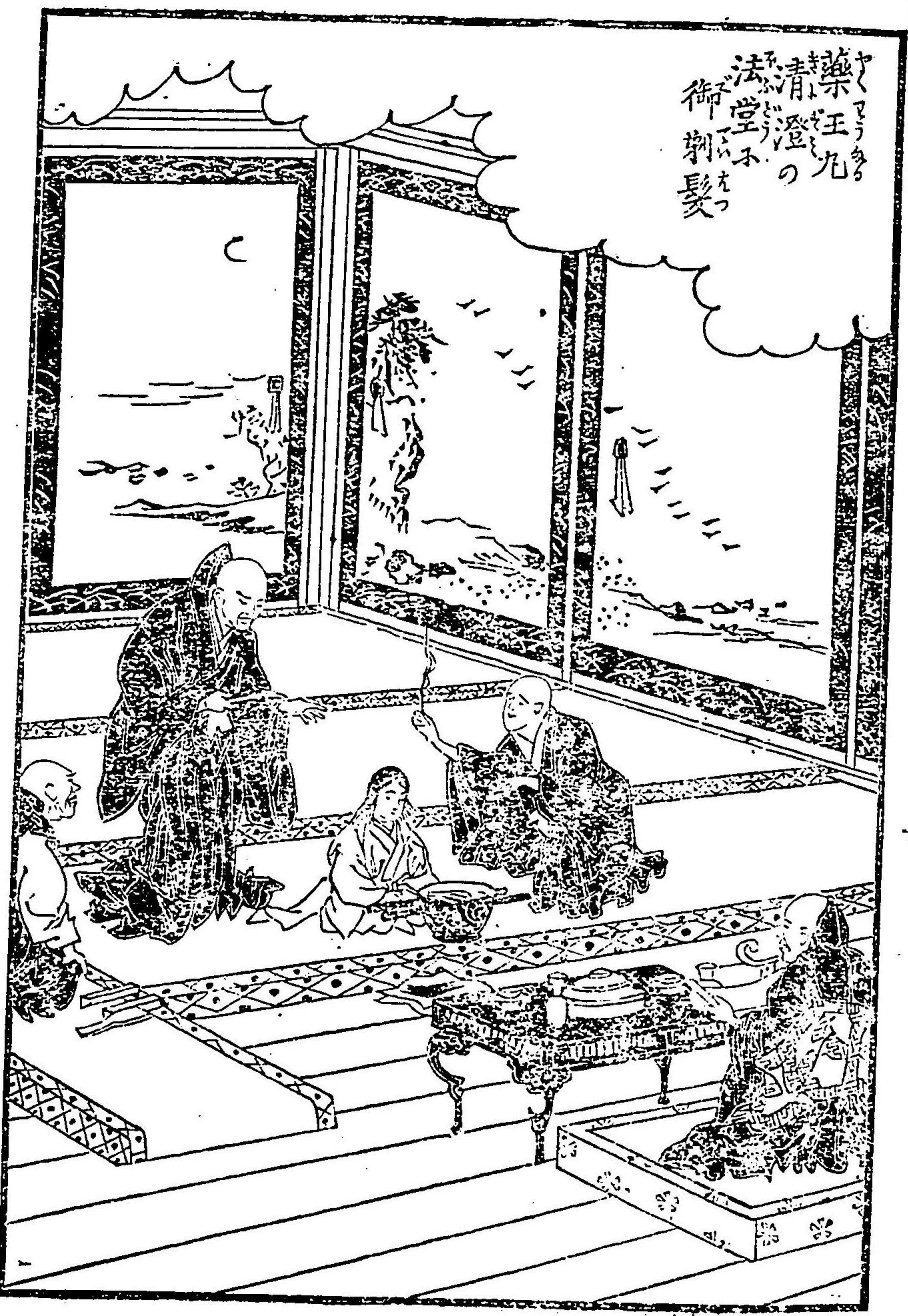
の若君後に出家して。如無僧都とて道徳たかき聖僧になり給ひぬ此事内裏へきこゆければ
 後白河の帝より。三年の間。諸國に殺生を禁たまひしとき、生あるもの、誰か命の悲し
 からざるべき。其身等も今に人とし生立ば浦の朝網夕習に數限りなき命を取。世の稼業の
 あさましく。取るゝ命も取人も。俱に逃れぬ悪業なれば。せめて幼き其うちにも。無益の
 遊びに殺生せずば。同じ報ひも薄かるべしと。まはらぬ舌にかたりたまへば。理も非も譯
 ぬ賤の兒が。あくび伸して目を擦り板金剛に蕪履に。かい探しつゝ歸りけり。かくて次郎
 夫婦も。善日磨が心つくしの孝行に。年月の憂を忘れてくらしけるが。嘉祿二年戌の秋。
 鎌倉にては二位の尼。政子の方世を去給ひ。將軍御齡わづかに九歳にねはしまして。世の
 人浮雲の思ひをなす折柄。六月九日辰の刻。美濃國時田の莊には。大雪降りてつもること
 一尺餘。夏の日影に窓を閉。爐を開き酒を飲て。漸く寒さを凌ぐよし同十六日鎌倉に註進
 す。又武藏金子の郷には。雪交の雨降出後には大霞となり。禽獸を多く打殺したりとぞ
 。其上鎌倉にも大路小路に霜のふるごと雪の如く。六月中雨のみ降つゝ。晴る空なく風
 と寒くして。手足も冷凍けり。同く七月初。奥州には小礫を降すこと。雨よりもしげ

く。廂を碎き扉を破り。人の傷つけるもいと多かりとぞ。これに依て今年十二月十一日敗
 元ありて。明れば安貞二年。善日磨七歳。この年京鎌倉洪水にして。人馬の死滅大かたな
 らず。此よりうちつゝ。五穀登らず。諸國に疫癘多く又辛の卯四月廿八日。鎌倉の御所
 に佐さ鳥。數千飛群り。其形鳩の如くにして色黒く。啼て不吉の音をこたへ。しばしとて
 何地ともなく飛去けり。鎌倉の僧俗その鳥を見知たるものだにあらねば。況て其名を識た
 る人もなし何なる凶變の懸瑞にやと思うち。八月大風洪水田畑山林を荒し。翌年にいたり
 天下大飢饉。時の執權北條泰時。五十條の憲法を立て。國政を勵めども四海の困窮こゝに
 究り。衣食なき民に仁義は教へがたしかまる京鎌倉のありさまを。風の便にさくにつけ。
 次郎重忠は妻の梅菊に物語やう善日磨もはや十歳を超ぬれど。里の友達と物諍ひせしこと
 もなく。走狂はず殺生せず。魚鳥の肉を啖ことを好まず。誰をしへねど。神に謹み佛を敬
 ひ親の機嫌を伺ひつ。山に登せ學問さして給はれや。出家さして給ひねと聞事ごとに胸潰
 れ彼どいひ此どいひ。思ひ合すは十せのむかし御身磨を懷妊せし折。出家にせよと靈夢の
 告。我も五十路を越ながら。頼む方なき片海の此小湊の浦遠く。罪なき罪に身を沈め。深

ふ時なき宿世の因縁。せめて磨を出家とせば。先祖の追福。身も我も後の世の。深き功德のなからずやと。夫婿の語れば妻も悦び。善日磨にしかくの緒いひ諭し善師もがなと思うち。其年も暮天福元年。已癸四條天皇御諱は秀仁。後堀河帝の皇子にして。去年の冬。八十六代の王位を踐給ひ。今歳しづけき四方の春。人の心も世の沙汰も。やゝ穩に成にけり。こゝに小湊より北に當り。程遠からず清澄といふ山寺あり。眞言密宗の鑿山にして寶龜二年の開基なり。此頃の住職道善密師といへるは道德も高きよし聞傳へ次郎重忠は磨をひらき吉日を撰び善日磨を携て清澄に登り。諸佛坊に在します道善師にまみわわけ。此磨を徒弟になして給はれど。慇懃に頼みけるに道善師もいと快よく受肯つ。善日磨が容貌の優美にして逞しきを見て且感且歡び。項髪をかい撫つ。賢き兒ぞけふよりは薬王磨と改名せよとて。其儘此山にとめたるは。天福元年五月十二日。磨が齡十二歳の時なりけり。此より道善の御坊ふかくいたはり。手習ふ事を教給ふに。二字三字ならずして。筆法書跡を書なすこと。年來修練の人の如し當山より南一里餘に。二間寺といふあり。此坊は道善とて。道善の俗縁の兄なりけるが。けふ茲に在して。薬王磨が凡人ならぬ

を見て。斯兒は往く我が宗風をも。輝やかすべきぞ。能いつくしみて教たまへと舌を巻て語ける。それより小學を始め。論語などいふ書より。すべて忠孝仁義を諭したる。儒道の書類を教へ讀しむるに。一を聞て萬を知り。二遍三遍を過すして。暗誦するをさくに算簡の水の逆飛が如し。普漢土の天台大師をさなかりし時。父に伴れて山寺に遊ぶ。その寺の住僧さし招き。兒に尊き御經を教て取せんと普門品三行ばかり。口づから教たるに。苦もなく誦給ふゆる。和尚も不測に思ひ。一品を殘らず教へたるに。唯一度にしてこれを誦し覺はたるは。天台御年七歳の時なりしとさく。今薬王が手習ふ事といひ物語振の庸ならず東夷東條かたうみの。漢を対海士の職が家に。かゝる愛度兒の出生したるは。いかなる事と道善も。心のうちに驚きつ。又此山に修學する。所化兒達も並ならぬ立振舞の薬王やど。いはぬ者こそなかりけれ茲に母梅菊は去つ頃そのいとし兒を山に登せ其後たゞて信もせず。道法らかき清澄も海山隔つ心地して。彼方の天をうち詠め。人里離し山寺に手習ふ業と讀書の數々多き僧達に。あられなくもてなされ。我父戀し母床しど。泣もやすと思ひわび。彼山深く尋んど。幾度も。こゝにあまりて言出るを夫次郎に窘められ。訪ことかたき清

澄の。山のはたてを我が子ぞと霧に霞にかこちつ。憂年月を送られけるが。窄き婦女の心には。思立矢もどめ兼夫婿に託てけふの日を。優曇華のさく心地して。磨が好る岩梨に種々の物取そへつ。飾磨の裾の袷衣。赤取染の肌衣まで。僕の男に持つ。清澄にねもひきて。山に登れどいかにせん。女人禁制の寺なれば五障の雲に遮られて。入事かたき密嚴淨土。心の月もいや曇り側の石に腰うち掛しばし憶ひに伏沈たまひしに。枯木を高く背負たる。寺の奴僕の山路より歸るを見かけ。喃々と呼とめ。此山の諸佛坊に學問せる藥王に母が参りぬ疾出て。無事なる顔を見させよと。坊の庫裏まで言傳て給ひねと詞せはしく頼みたまへば。寺の男はうなづきて。杉の木間森の下。茅もて葺るは裏門にや。彼方をさして喘ぎつ。いとも重軀に入にける。藥王はかくとさし賢母には似氣もなし。出家をさしにねこしたる。磨が安否を訪給ふは。投し磔を尋る迷ひ。値まじものと幾度か。思ひかへせどしかすかに。思愛ふかさ悲母を。逢で此まゝ歸しなば。不孝の罪の深かるべし。昔唐土に曾参といふ孝子あり。他にありける日其母曾参が歸りの遅さを待ひて指を嚙給ひければ。其心胸に應へ。いそぎて家に歸りしとぞ。曾子が母の嚙指の其子の胸に通じた



薬王丸の清澄の法堂不御剃髪

るは。親子はひとつ血肉にて冥合所感の不測なりと思ひかへして師の坊にかくと告、寺門を出て悲母に。値給ひしに。梅菊はそれと見より走倚。薬王が手を取て。此年月戀し煩ひはべるほど。喜の涙せきあへず。道理にこそと思はれける。薬王は禮を正し。磨もさつ年。慈父に伴はれまゐらせて。此山に入し頃は。さすがに里の戀しくて。時鳥なく梅雨月。心の雲も晴やらず。漏ぬ軒端に袖のみぬれて。いと悲しくありければ師の御坊の情深く。年月ながき教の窓に書を讀。唐土の日本の古事をさへ。此彼と思合て此程は。心長開き彌生空。嶺いと高き松杉の。黒きに交る山櫻。さくかど見れば入相の鐘の音に散花ふいさ。花より脆き夢の世にいめを重て猶さめぬ。悪業の因縁に繋れて。或時は地獄に泣。又ある時は天界に樂み。又畜生に身之苦しめ。偶人間に生れては。生老病死の四苦八苦。百年久しき胡蝶の夢。さめずばかりる凡身の。いつか出離の期あらん。誠に百年の榮耀は風前の灯火。一念の發心は命後の礎どかさへはへる。磨も頼て出家して。かゝれとてしも垂乳根の撫給ひけん斯黒髮を剃落し佛の法弟の數に入。三寶國土の恩を報ひ。一切衆生を助る身とも成はべらば先父母を救まゐらせん。御經にも四恩のうち。父母の恩第一とこそ

佛も定させ給ふなれ。今生一世の恩愛は。水のあわれの跡もなし。未來永く父母の。御側さらぬ大縁を。結ぶ誓ひの剃髮染衣。それをも思し釋られず。悲母の御歎き猶ふかくば。磨が菩提の障りぞかし。此上は安否を問せ給はぬを。悲母の厚情と喜ふべし。さすがに長き春の日も稍傾たり。木立の茂る洞陰は。里よりはやく暮るになん山路の程も心もどなくはべるほど。いと懇に急がせば。悲母も頻りに歎息し。しばし見ぬ間に。薬王が長者たる。菩提の月に心の闇も明けく。噎すべき子に噎されて。嬉泪に胸ふたがり。誰呼子鳥路わけて。泣々家路に歸り給ふ。此梅菊が涙を濡たまひたるを涕淚石とて今に猶。清澄の山路に残りこゝに詣する人々の。其むかしを思ひ出て。ともに涙をそぐになん有ける。光陰は弦を離るゝ箭よりもはやく。春と明秋と暮て。今年嘉禎三年丁酉の冬。薬王磨も十六歳にありければ道善密師道場を淨め。一山の衆衆を聚め。十月八日剃髮の規式嚴重に誦經梵唄みづから導師となり。薬王磨は御聲いとさよよく。業恩入無爲。眞實報恩者の文を。三遍まで唱揚。翠の黒髮を剃落し。紅白の袂も。墨染の袖とあらためたまひたる。此ぞむかし天竺國。淨飯大王の御子。悉達太子。御齡十九歳にして王宮を忍び出。玉の冠錦の

御衣を御記念にとりめ。麻の衣を玉躰に纏ひ。檀特山に分登給ひけん。昔の則の忍ばれて
 哀にも尊くぞ思はれける。此より御名を是生坊蓮長と呼改め。諸事を撥棄専一佛理に心
 をゆだね。眞言瑜伽の奥藏を學び給ひ。教相には眞言三部及び諸論等。事相には求聞持等
 の印契を相承し。法兄淨顯義淨の二人は。所化僧多きその中にも。蓮長師をふかく憐み。
 學問の志をたすくるゆる。それかれと力を得て此程は一代藏經にとりかゝり。晝夜肺肝を
 碎き聞給ひしが。一日心に思すやう。佛法といへば。釋迦一代の法なるを。今八宗十宗に
 立別れ。己が隨意弘る法を。我こそ佛の本意を得たれとおもひ。彼をそしりこれを讀。さ
 らに一轍なきに似たり。抑我が本師釋尊は。いづれの宗旨ぞ。眞言宗か華嚴宗かまた教外
 別傳の禪宗なるか。今御經を案ずるに。決して諸宗兼學にあらず。大海の湖に二の味なく
 。如來の教法さだめて二の道はあらじ。其會釋を知らんには。智者とならでは協ふべから
 ず。伴ひ當山の本尊虚空藏菩薩は東方莊嚴世界の大菩薩にして。一切衆生に智慧を授けん
 どの誓ひありしこと。大集經に見えたり。其上法堂に安置の尊像は。寶龜の開闢以來稍五
 百有餘年。利益多かる尊像とさけば茲に祈願を籠ばやと。湯水を絶。食を斷じ。御堂に籠



蓮長師 智慧を
 虚空藏に祈りて
 その冥應を得玉ふ

明星の池の
 竹を生きて
 帝の石が血
 竹今猶生ずと
 云是皆同日
 のこと思ふ

て持念する事三七日。願くは佛智を得て。如來の本懷をさとりわすねく諸宗の是非を明め
 佛燈を一時に揚て。末世五濁の闇を照べし。願くは衆生利益の大願をわはれみ。日本第
 一の智者と成て給はれど。丹心骨を削りて祈ける。此御堂の側に清水を湛へし池あり。此
 池水に晝も猶明星の星影赫々として浮びたるは。いとも嬉しき奇瑞かなど。いよく丹
 誠祈念ありしに。その願滿する曉天に。夢現の境もねはぬす。朦朧たる其中に。白髮銀の
 如くにて。御眼の光冷凄き異人。影向ありて右の御手に光明まばゆき。大寶珠ともいひつ
 べき玉を持。汝が祈る智慧を與んずとて。斯を渡し給ふ。運長師右の手にこれを受て。左
 りの袂に入収給ふ。嶺の嵐の音をひて。身に降かゝる露しぐれ。佛前高く見仰れば。本尊
 の寶龕にかけし關籬の。これと脱て金扉は。八字に開けてありければ。大願すでに満足
 しぬと。心中の喜悅たどへを取に物なく。此曉來の禮讚に。ふかく佛恩を報じ。本坊へか
 へらんと。御堂の階砌三四級。下立給ふ其折柄。俄に胸膈氣運り。夥しく血を吐て。その
 儘氣絶し倒れ臥給ひけり。同寮の所化これを見出し。坊に擔ひ歸り介保せしに。忽夢の醒
 たる如く。聊御身に勞を覺ぬす。刺へこれより境智格外にひらけ。雲霧を拂て天の三光を

見るが如く。萬法方に浮ばずといふ事なく。辯舌また明了にして。電光の如く。一言の
 もとに衆理を決す。これ全く凡牀不潔の血を吐つくし。暗に六根淨を證得なし給ひたる。
 利驗の程こそ尊とけれ

清澄寺は千光山と號す。寶龜二年不思議律師の開基にして慈覺大師これが中興たり。
 いま寺祿八十石。東寺流の眞言に属す。本尊虚空藏菩薩は開山律師の靈作なりとぞ。
 此山は宗祖大士。初發心の靈地にして。此寺に修學ありし事七年に及ぶ。悲母梅菊が
 愛別の涙をそゝぎし涕淚石。普光天子の影を宿したる明星が池あり。凡牀の血を灑
 たる處には。その地に生ずる笹の葉に。血の染たる班あり。今に凡血の笹といひ傳ふ
 。まことに當山は大法基元の靈地とぞ思はれける
 かくて曆仁三年 戊戌の春にいたり。運長師はいよく勤學いとまなく。木を越の如く丸
 く削なして枕とし。御身つかれを覺ゆる時は。此枕に肘を倚てしばし氣を休給ふ。もし眠
 氣付ぬれば。轉傾くゆる快く睡につきがたし。これは唐土にて圓枕とて。學問に心寄なる
 人の。造り初めたる物とぞさく。願に細をかけ。股に錐を刺て睡を防ぎしも。同じ心の學

びの願。それは經學一世の教。これは内典八萬四千。釋迦如來の説給ひし。一切經とさこ
 ぬしは。七千三百九十九卷なり。されば大聖釋迦如來。十九歳にして出家ましく御齡三
 十成道あつて。檀特の峯を出。寂滅道場において。十支六相の理を説給ふこと三七日。こ
 れを華嚴經といふ。これ釋尊説法の最初なり。これより阿含十二年。方等十六年。般若十
 四年。以上四十二年。佛壽七十二歳の御時。鷲の靈山の嶺に。法座を移させ給ひ。法華本
 迹二門を説て。如來出世の本懷を述べたまふ事こゝに八年。これを法華經といふ。華嚴。阿
 含。方等般若法華この五時を説了らせ給ひ。御とし滿八十にして。跋提河。純陀が家に入
 て。一晝夜涅槃經。これを遺誡に残して。二月十五日涅槃の雲にかくれ給ひし。此一代の
 説相を。一切經とは名づけたり。蓮長師は此頃漸く一切經を関つくし。今宵更関かたはれ
 月。さし入窓に涅槃經を讀給ひしに。此御經の中に依法不依人といふ金言あり。文の意は
 世の季にいたれば。我が道を學ぶ者。詞を巧み我意をのべ。種々の宗旨出來すべし。これ
 に依て我が入滅の後。いかに智慧かしく。其位貴くとも。人師の詞は用ふべからず
 我が説置經文に依て佛法は判すべしと。末代の規を定め給ひし最期の御遺言なり。蓮長師

は此御經を拜し。夜學の燈燭も濕ばかりに。御涙に咽ひ給ひ。自餘の宗旨は未だこれを知
 ず。我因縁ありて。眞言密宗の山に出家を遂當宗の流義を學ぶに。大日如來より密法綿々
 として。今に傳へたれども。金剛智。不空等の説を本とし。日本にては弘法慈覺兩大師。
 私の下簡を加へたる事のみ多く。眞言一宗既に佛の法にわらずして。凡夫の法なり。亦
 同じ御經に釋尊ひとつの譬喩を揚給ふ。こゝに巨なる象一頭を繋ぐ。盲人多く聚りて探り
 見る。後に一處に會合し。一人の盲目がいふ。象は漆に塗たる桶の如し。一人はいやとに
 我が見たる象は掃帚の如しと。又一人は太鼓の胴の如しと。又一人は箕の如しと。衆の盲
 人争て止す。されば其耳を捉へし者は箕の如くもひ。腹を撫し者は太鼓の如くといひ
 。尾を撚りし者は掃帚のごとしといひ。脚を抱へしものは塗桶に似たりといはん。皆これ
 れのれが探り見たる處を知のみにて。全き象の形を辨へざるなりと説たまへり。我身不肖
 なれども。八宗十宗の人師。塗桶よ掃帚よと。己が得意立たる諸宗門を。十方無礙の降子
 をひらき。彼の全き大象を一睨に見定べし。父母養育の恩を棄。此無爲の教に身を任する
 もの何ぞ凡僧傳來の教を守て。如來の金言を慕はざらんや今は此山の書籍もよみつくしぬ

問べき師なく。語るべき友なし。いかんして我志願をはたさん。此磯村山の片邊土にむなしく心を焦すこといかに惜き月日なり。いでや鎌倉に趣て。其宗々の明師に問ひあらしむる和漢の書を讀ば。智解をたすくる道徑ならん。今年秋の初つた。師の御坊にしばしの暇をこひ清澄をうち立て。上總より下總にかへり。武藏なる隅田河原に着給ひけり。これぞ名にれふ武藏野や。郡はひろく十郡にわたる。西は雨降山。秩父が嶽。南は多磨川。北に荒川。この隅田川は東の境にして。郊原四方何百里。旅人のゆく方々に陥分て。蜘蛛手に迷ふ途多く。むかし業平の朝臣。水禽を見て。都こひしと詠れたる。其名所もればつかなく。渡守の男に問へば。彼方の山は待乳山。れもかげにたつ婿の森鶴の群たる千代が岡。春にあらねど霞が關。かゝる果なき野原にも名所は多くはべるかしと。穗末波よる枯蘆を。分つゝ片舟さしよする。水榭の下に驚きて。立鳥よりも旅人をれどろかしたる秋の風。野寺の鐘を吹さそひ。日はくるれども虫の音に心なぐさむ花野路。入山の端の遠くして。月さへ影を宿したる。千草の露に裾うち濡り。夜も稍初更に垂たるころ。海近けれども船よする。浦なきゆゑに名づけたる。帷子の里にたどりつきの。宿りを求めばやと思せと

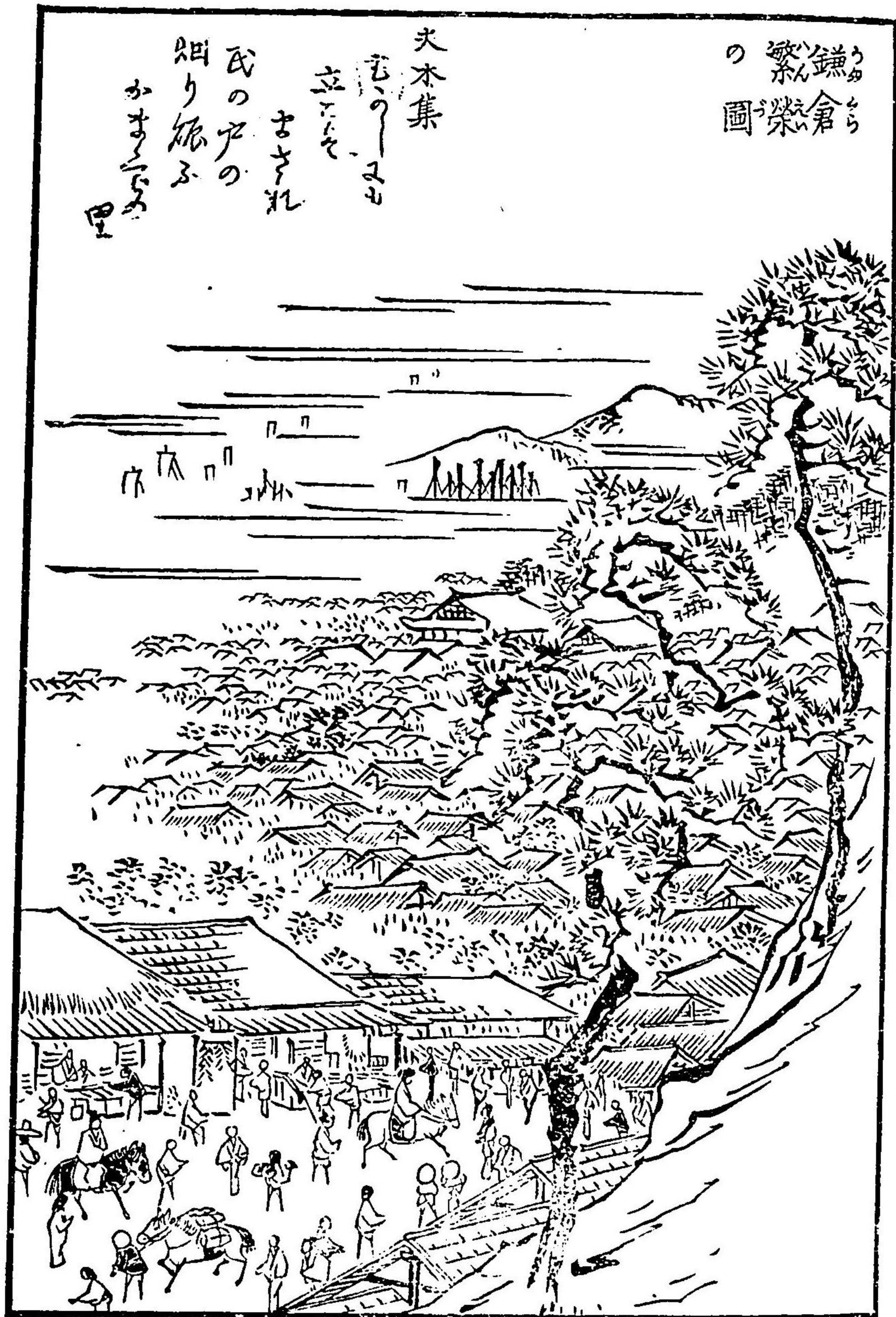
も賤が穢居の舎のみなれば。人宿すべき方もなく。困じ果給ひたる折。しげる。木樺の生垣を。一國なる門口より。旅の御僧よやどしまゐらせんとありければ。逆長師はいと喜び。茲に一夜のめぐみをうけ給ひ。圍爐の端にさしよりて。折焚柴に袖を乾かし。ねはせしに。家の主は持佛に向ひ。念佛してありけるが。稱名はてゝ茲に居倚。種々の物語にうち混て。逆長師の尋給ふやう。今宵こゝに止宿をめぐまれて。やどりて見ればいかにぞや。幼稚者の弄器獅子の頭に狗張紙土もて造る偶人の數の雜器にうち交て。佛像こそわれあやしみて。手に取見ばこはいかに。本師釋尊の立像にて。押たる金も村剣て御手に鼻に闕損じ。いと勿体なしたぞましと。思ふにも似ぬ念佛三昧我さへこゝに宿したる。佛法歸依の此家に似氣なき事と意も解ずはべるほど。難じ給へば。主はうち笑。竹の火筋に灰掻なでつ。さてとよ不審は道理至極。我も初めは佛といへば同じ佛。經といへば同じ經。神も佛も別なしと思ふてありしに。近頃所用の事ありて。久しく鎌倉にありしに當時念佛の生如来。大阿彌陀佛とて尊き聖者のねはすとさきて。其處に受戒しまゐらせて。念佛安心の要路をさきて。一代聖經。八萬四千。其數多くはべれども。末代の我等が修行には。念佛

三時に如はなし。統て釋迦にも藥師にも。心うつして拜をば。禮拜難行とて。その修行の穢ゆへたとへ念佛稱名するとも千中無一とて。千にひとつも往生は遂がたし唯諸佛諸神を振棄て一向に念佛せば。よしや五逆のあればとて。弘き誓に漏やはする。斯は彌陀尊の本願にて。その御經に明白なりと。法然上人の選擇集とかいふ書を講釋して。いとありがたく説たまふ。かゝる事の實なればこそ。當時京鎌倉はいふもさらなり。上臈も下臈も物識たるも知らざるも念佛する人は濱の砂の數多し。天台眞言諸宗の名僧智識さへ。今はとなへぬ人もなし。かゝる聲き教をきよ。家にかへりてこれまでの。持佛の釋迦を捨るも惜ど。雜具の中にうち入て。納戸の隙にさし置たるを。いつの程にか。小童等が持出て。笛に太鼓にうち交て。獅子と釋迦とを躍らせて。遊ぶものから打割て。風爐を焚には増らめど。其儘にさしれきつ。と語るをきよて運長師は且あきれ且悲み。法衣の袖に涙をれさへ。我は房州小湊とて。浦崎ちかき山寺の僧なるが。齡今二十に超ねども。つらく佛經を見るに今此三界は釋迦一佛の有縁なり彌陀稱名をすゝむるとて。木佛釋迦を禮拜するを難行とて誠めたるはいかにぞや。背の黄色さ我口に。言はいはぬに増れども。一夜の宿に

しのぐ。惠みに報ひはべるぞよ。昔天竺伽毘羅衛城に五百の猿猴あり。折しも秋の最中ころ。月いと冴る溪河に。うつりし影を臨見てわれこそ採らめと争へども。さすがに深き潤河に猿の智慧の淺ましく。ひとつの猿が松の下枝に取つけば。又ひとつの猿その下の手に釣さがり。かくしつゝ五百の猿は五百尋の綱をさげたる如くして。漸く水に手をさし入鏡と光る月影を蔭よ藤よ蔓よと蔓もて。纏ひからげて採ともはてす。斯夜もすがらなすうちに。松の木垂の枝折て。五百の猿は残りなく。水に溺れて死けるとぞ。本佛釋迦の月を觀す迹佛彌陀の月影を一向專修の蔭蔓につなぎ取らんと思ふうち命の松の枝折て。奈落の底に沈みやせんと。いと惡に説諭したまひけるに。若きには似ぬ發明の御僧かな。夜もいたく更たるは。納戸に入て寝まり給へ翌日またさかんと。欠伸に佛念囀ませて。主も其處に臥にけり。運長師は明の朝こゝをうち立。先鎌倉に入なば。昨夜主の物語にきよつる。大阿がもとに尋ゆき。當時諸宗に秀たる念佛に心を寄。淨土の安心を聞ばやと。心いそげ道はかゆかず。漸く其日の未の牌。その地にたどりつき。車小路といふ所に。いさゝか縁故を尋ね。こゝに暫時と枕かる。鎌倉の繁昌は。聞しにる増賑ひと。往來せはしき市人に。旅

の心を慰めつ。しばらく勞れを休め給ひけり。當時鎌倉の執權職。北條武藏守平の泰時は去る元仁元年六月十四日。父義時は逝去わり嫡子なれば其跡を繼で執政たり。泰時は賢良温順にして。仁君の譽たかく。廉讓節義を。心に存し。專天下の政道に預り。記録所の門に鐘を掛置。不時の訟を開給。毎月十日廿日晦日を決斷の日と定め。頭人。評定衆を聚め。訟の理非を決す。其政務嚴重にして。しかも慈愛ふかく。常に側の人に教て宣やう人として足ることを知らざるは。人間一生の禍なり。足ことを知らずは。百萬の財寶を積ても。安き心なく。無理も非道もこれより起るなど。いふよしを語りて人の爲世の爲直なる道を諭給ふ故。君の御側に伺候する人々は麻に交る蓬の如く。曲ころはわらざりけり。時しも彌生十六日。評定所より退出の處。庭の一木の櫻花。そよふく風にさのふけふ。稍淋しく散ければ。泰時しばしうち詠め。天下の政務にいとまなく。誠に花人を待す。今年の春の色香にも飽で別るゝかなしさよと。筆を染て

事しげき世のならひこそ物愛けれ花のちりなん春もしられす。と和歌を詠じたまひき。かゝる優美にして明察なる泰時。晝夜心を政事に盡し給ふゆる。諸國穩にして。鎌倉も



鎌倉の繁榮圖

大木集

立てて
おさされ
氏の戸の
畑り給ふ
かすく

年々に賑ひ増り。鶴が岡の赤橋の前には常に騎馬の供待多く。長谷觀音の大略には。嬌馳代參の女乘興ひきもさらす。大藏の薬師。供養終れば窟小路の不動に開帳の標を建綴喜街の遊女。佐々目が谷の歌舞伎。放下。物真似。辻商人れのか様々の稼業も。知らで被る聖代の恩。その街衢の繁昌は今を盛りと見ゆにける。さても道長師は兼てきつる。大阿が住所をたづね給ふに。御所より東十八町ばかり。霧が澤好見といふところに菴を結び。極樂往生の一門をひらき鎌倉中の男女をあつめ。法談す師も亦その席に交り。淨土の宗意を聽給ふに。淨土宗といふは觀經。雙觀經阿彌陀經に。天親菩薩の往生淨土論をそへて。これを三經一論と稱しめて。宗旨を建。我朝にて法然上人といふは。美作國稻岡の人。父は時國。母は秦姓。ある夜靈夢に剃刀を呑と見て懷妊し。長祇二年四月七日誕生在まし。生れなからにして叔悟發明なりしが惠心僧都の往生要集を讀んで初て一切の經論を捨て。念佛一宗を建立し給ふ。さればいかなる五逆十惡の凡夫なりとも。自力の根性を捨。南無阿彌陀佛とさへ唱ふれば。此惡世界の湊を離れ九品蓮臺の彼岸へたやすく往生なすことは。ゆめく疑ひあらぬをか。法華眞言等の聖道門の難行難行をは擲置て罪業の。かゝる凡

夫を救ひます。大慈大悲をわすれなど。建久五年甲寅。選擇集をあらはして。無常をさす鉦撞木。あはれ尊き墨染の法衣の袖をかき合せ。黒谷吉水のわたりに道場をひらき。一向に専修念佛をすゝめ給ひける。壽永元曆の合戦より。いまだ十年にならざれば親を討れ子を殺され。兄弟を失ひ妻子に別れ。世の愛目を見たるもの。幾千萬ぞや。幾億万ぞや。血腥さ風いまた街頭を去す吐箭叫びの脛羅のころ。猶耳に残りぬ。かゝる恐ろしき變世も唯一睡の夢なりけり。哀れはかなき飛花落葉の夢の世に。何を樂み何をか待んど。愚なる身もかしてききも。無常の風の心に染。亡人の菩提の爲。我が後の世の頼にと。念佛の聲四海にかまびすく。何なる無道心の者なりとも。心弱くも皆法然上人の。唱名念佛になびかぬ草木はなかりけり。今法然上人建曆二年の遷化より今年曆仁元年まで。星霜わすか廿七年。教違はぬ十即十生。道長師も此念佛に心を委ね。安心の法門に心耳を澄し給ひける。又この頃念佛者の語るを聞給に佐輔が谷に。然阿良忠上人とて。法然上人の孫弟にして。學解ひろく念佛の得悟たしかなるよしをきき。道長師又こゝにも往通ひ。三心四修の宗脈を受給ひける。それより延應の秋くれて。仁治もはや二年を送り給ふうち彼の好見の大阿

上人。病の床に臥て。古今の悪病を煩ひ。苦痛にたへかね晝夜菴の中を轉び泣叫びつゝ。虚空を擲て息絶たり。遷化の後。死骸を見るに身縮りて小兒の如く。其色黒くして墨を塗たるが如しとぞ。其隨身の弟子等の物語にきよ。さても淺間敷ことかな。守護國界經には死人の十五相を説て。地獄に落るを明し。天台摩訶止觀にも。死人の形相を委しく教へ給ふ。此經釋を鏡とするに。大阿上人の地獄は疑なし在俗の身ならば過去の宿業も。こゝに現るともやあらん。道徳圓滿の上人數年の修行その證なく。臨終の正念を失ひ。最後に地獄の相を顯したるはいかにそや。これ正しく佛意に協はぬ處ありて。其現罰にあらぬやと。我と問。我と答へて黙頭たまひけり。又此鎌倉の繁昌に諸宗の學者。十宗の碩徳春の野に立茅花の如く。いとさらしくみゆるものゆる。かれに問これに尋。學解を凝さんと思せども。いかんせん鎌倉も泰平久しき御代の習ひ。文道武道美榮多く。萬般すべて花車風流になりもてゆき。琵琶を弾じあるは爪琴小鼓に。離すしらべの糸竹も。都下の白拍子。袂かざして媚を唄ひ。なまめきわたる風俗のいつか出家に押移り。錦の袈裟に七寶の珠をつらねし百八の。煩惱つなく地輕薄。佛事供養も布施からと濁心の貪慾無懺。まこと

しからの事のみ多く。我も亦た、假初の草枕。五年こゝにありければ一先安房に立かへり。其上に兎にも角にも思立ばやと。歸國の要意彼これと調へ給ふうち。二月四日夜に入。戌の刻頃。西の天に赤白の氣三筋たちて。二筋は程なく消て。赤き一筋。火の柱を建たるが如く。中天に衝立たり町中の男女驚て見物す。御所にいらしては陰陽師。安貞を召て御尋ありけるに。これは彗形の氣と名づけ。俗に火柱ととなへ。昔村上天皇康保年中あらはれたるよし舊記を引て言上せり。いかなる事の前表にやと。上下安心もなかりける。遺長師は此取沙汰を後にきよなし。房州さして歸りたまひける。幾程なく同七日の朝一天曇りて雨にやならん。風にやならんで見うち。巳の刻頃大地震に震動し。山鳴谷應。鎌倉府内の大小名。堂塔伽藍を揺蕩し土煙天に覆ひて暗夜の如く。其中より處々に火然出。男女の泣わめく聲いと哀れに震動の間にきこへ。物凄も懼しなんといふばかりなし。此一朝の地震に人畜牛馬等死滅損傷その邊際を知らず。御所よりは四日の火柱。七日の地震。あわせ記して京都に注進す。かゝる鎌倉の騒動を旅にきよつゝ、運長師は東條小湊にかへり着。両親のかはらぬ面影を拜し。鎌倉の物語に春の一夜も明やすく。次の朝は清澄に登師の御坊

の恙なき喜び。此年月心をひそめ、修行なしたる淨土の正宗その外諸宗の論議。古今名僧の物がたり。彼此同座の僧達へも談じ聞せ給へば師の道善をはじめ。二間寺の道義も。この席に在し。淨顯義淨その餘。青蓮明心等同寮の所化まで。耳新しき物語に感入。その達辯といひ才學といひ。一山の衆徒。膝をうつて驚歎し。師の御坊は喜びの涙席を沾し給ひける。清澄にしばし在すうち。小乗權大乘。法華。眞言の四門の戒行の次第を詳らかにしるし。戒躰即身成佛義と名づけ。山内の僧達に示し給ふ。これ法門筆作の初なり。かくて情世の有様を思ふに。鎌倉は當時日本の大都會なれども。法を弘むるにはよろしく。道を學ぶには益なし。又かゝる山寺は閑寂なれども書籍に乏しく。其上道を談ずる友もなし。干將莫耶の名劍も屢磨すはいかにせん。傳へさく比叡山は傳教大師。圓乘戒檀の山といひ。また三井寺東寺。南都の七大寺は今の僧はうとくもわれ。其宗々の開山は入唐渡天に艱難を凌ぎ。苦修煉行の跡なれば。經論書類も定て多からん。いでや彼の山々を遊學し先師の道をうかいはばやと。其心搏しつ。旅の用意も僧の身は。立ことやすき水禽の跡。にごさじと道善御坊。又同寮へもいとまを告。今年も暮る秋の日の。日影に笠をかざしつ

よ。京都さして發足なしたまひけるが。鎌倉に立寄。年頃親しき人々に音信給ふに。世に國家の棟梁と頼つる。北條泰時も。此六月十五日春秋六十二歳にて。草頭一時の露と消たまひ。暗に燈灯を失ひたるが如く。政道の古實忽に亂なんとす。泰時の嫡孫四郎經時。武藏守に補せられ。鎌倉の執權となる。萬端のこと昔に似す。人のこゝろも改り。そのうへ去年丑の秋より。五穀登らず。二年の凶作。四海こゝに困窮し。世のあさましき事いふばかりなし。蓮長師は鎌倉の旅のやどりに思はずも比叡山の學僧尊海といふ人に因を結び。種々佛理を談じ。年ころの友の心地して。底意なくものかたらひ。我も叡山に學問の志願あるよし語給へば。尊海も大きに喜び。己は座主信尊の法弟にて徑廷なれども。叡山の四俊とか。人も算る者なるが。今般法用の事ありて鎌倉の御所に仕候し。そが用もはや果たり。御身は才學の壯士とればゆるぞ。疾叡山に登り給へ。我どもなひまいらせんとありけるにぞ。闇に灯火渡りに船願ふてもなき同伴と。蓮長師はふかく喜び。秋の日あしの短くて。其夜は懷島に一宿し。晝猶くらす竹の下。けふ越わぶる足柄の關路はどなく駿河なる百度見ても雲風に姿さためぬ富士の嶺の。けふも見へけり明日はまた。宇都の山邊の

葛蔓、わくも夢か武士の。矢矧の橋の一筋に。皇都とさしていそぐ身は。問遠の渡し風
 寒く。旅の疲姿はうつさじと。けふはた曇る鏡山。志賀の湖水底清き蓮長師は。彼の御海
 に伴はれ。坂本より叡山に登給ひ。つらく四境の風景をながめ給ふに。西北は山城國愛
 宕郡にわたり。東南は近江國滋賀郡に属し。嶺は四明が嶽とて。人跡絶たる高嶺にして。
 こゝに登れば諸天の御聲もさこへつべし。鴨川大井の二流愛宕高雄の山々より。淀川の流
 れ遠く。難波津の浦より。蒼海渺々として。帆を掛たる船は。昆蟲の蠢くに似たり。東南
 の眼下には。唐崎の松。栗津の濱。湖水の築波悠々として。沖の小島。竹生島は水鳥の波
 に遊ぶかどあやしまる山水の美景。四境を遶らし。萬古の風色足すといふ事なし。其棲べ
 き學室のわたり。樹木森々と生茂り。庭に雲蒸音滑かに。山は黙して佛の禪定を示し。水
 は語て如來の演説にかたどる。億萬の經論は一山の草木より多し。三千の學僧は智解を凝
 してかしましからず。實や傳教大師はじめて此山を開き給ひし時
 阿耨多羅三藐三菩提の佛達我が立刹に冥加あらせ給へ。と讀給ひしといと尋く。天竺の
 靈山。唐土の天台山も。かくやありけん。我此山に久しく修學せば。一世の大願も茲に成



叡山の講堂
 高祖三塔の學
 者を相手
 慈覚大師
 の義を
 難す

就すべしと。深く喜び始めて法華經をもつて我が本分とさだめ。三塔の學衆に親み。天台
 章安。妙樂の釋疏を熟覽し。天台一宗の學を講ずると。其一日の學問。餘の僧三年の修
 行もなほ及びがたし。こゝに於て當山の役寮に評議して。東塔の圓頓坊といふ一院を住
 職せしめ。此ころ靜明。經海又心賀などいへる。何れも三千大衆の上頭にして。博學の譽
 たかし。蓮長師は常に此等の人立交り經を講じ釋を論ずるの外。他事なく月日を送り給
 ひけり。今朝しもまた。常にかはらす香を拈り。日課の御經に心をうつし。梵音呪々と讀
 澄し。深く佛意をかながみ給ふに。上行無邊行等の本化の大菩薩。末法第五の今に出現し
 。法華經をもつて廣く濁惡の衆生を救ひ給ふべきよし。御經に明かなり。我佛縁かひなく
 。進では天台傳教に見へず。退ては彼の上行菩薩。出現の時にもいまだ逢奉らず。何をた
 のみ誰を師として。今經の利驗を仰がんやと。御涙をいりに膝をうるはしける折。はや講
 堂に大衆を聚る鐘の聲。溪間の雲の隙もりて。嗚々ときこゆるにぞ。御經を巻れさめつゝ
 三禮し。徐々と履を曳て。講席に出勤なし給ひける。此日學徒多く聚りて。講主より法華
 經と大日經との差別いかにといふ問を大衆に出す。蓮長師席を進み。法華經は醍醐の極説

○大日經は生蘇味の權教。力士と小兒の腕競べ。此二經に何の論かあらん。當山は慈覺大
 師に至て。開基傳教大師の法水忽ち彼の眞言の泥に濁りたりと。粗その條々を擧て席を打
 て談じ給ひけり。我朝法華の元祖傳教大師といふは。神護慶雲元年をもつて生れ。名を最
 澄とよぶ。初め山科寺の行表。僧正を師として六宗を學ぶ。後漢土に渡り。天台の教法を
 傳て日本にかへり。大ひに華嚴三論等の六宗を破。南都七大寺の高僧蜂の如く起り。傳教
 大師を佛敵と罵る時に延暦廿一年正月十九日。桓武帝高雄寺に行幸ありて。彼の南都の六
 宗善議勝猷等十四人を傳教に召合給ふ。日出ぬれば星かくれ。法華の大典ひとたび出現し
 て。一切の諸經。何の光輝かある。唐の天台は釋迦に信順して。法華を四百餘州に揚今此
 傳教は天台に相承して。今經を日本に弘通す。獅子一聲吼て百獸腸腐るが如く。南都の
 六宗跡を削り六十餘州傳教大師に歸伏せり。しかるに法弟義眞圓澄はその法を守護り給ひ
 けれども。慈覺大師弘法の眞言になづみ。又別に理同事勝といふ義を立て。玉に瓦をそへ
 。酒に酢を加へたるやうに。眞言と法華と習ひ合せて。叡山の宗脈こゝに濁りたるよし。
 此席に於て言出し給ひけるにぞ。一座興さめて見へにけり。兼ての學友尊海。この座に

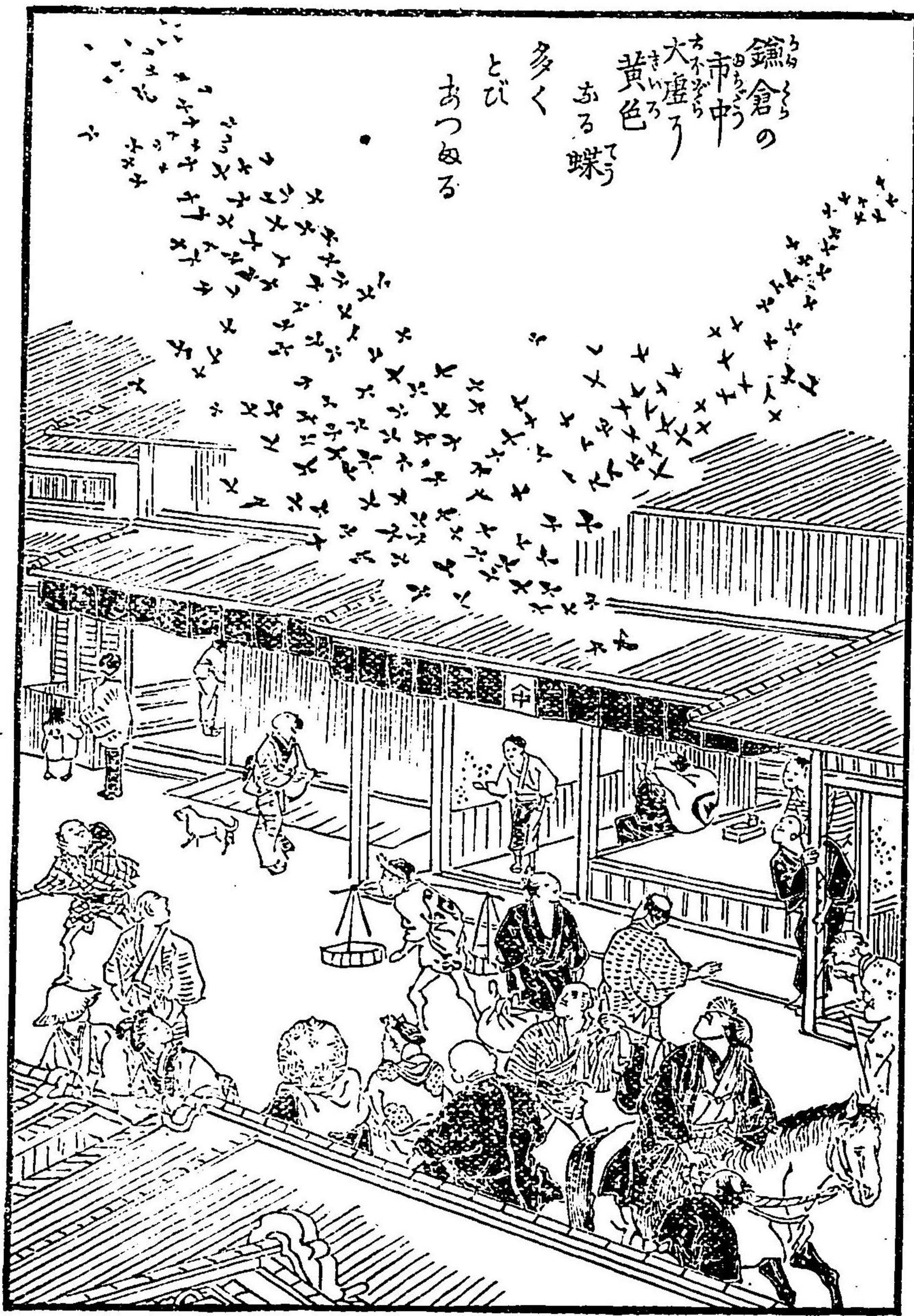
ねはしけるが。蓮長師の袖をひかへ。講論果て我が坊にともなひかへり。筑紫背振山の茶を煎じ。鹽うち豆に燕膏の漬物など取いで。饗應がてらうち解ての物がたりに。蓮長師のたまふ様。この年月天台傳教阿大師の遺教を深く考ふれば。慈覺大師こそ心得ぬ。身はこの山にありて其宗流を繼ながら。心は雪と墨染の。袖にも耻ぬ師敵對今は一山のこりなく。何時しか慈覺の宗風に落果たり。其辭譯を知らずして。在す君かは君はまた。いかい思すと詰り給へば。尊海もさしうつむきて。應もせず。ひそかに其天機秀發の。才智を感じける。蓮長師は一山の老弱みな其實學に懷き。今年寛元四年午の春。横川華芳谷淨光院に住職せしめ。圓頓坊を兼帯して。名を三塔にといろかし給ふ。三井寺。南都。高野山の遊學も。皆これ叡山修學の餘力にして。春秋あはせ十二年。此山に心をといめられ。一期の修行。全く當山に成熟すとぞ思はれける。此程は一代經の要文の處を抄書し。三藏要文といふ書を作て。學衆に示し給ふ。猶當山の宗風の乱れたるよしを。時々參會の序をもつて。此事を歎き談し給ども。承和ののかた三百有餘年。慈覺の學風此山に染中々ひるがへるべきにもあらず。同友の智識博學の輩も。これを聽て悦ばず。還て苦々敷ねもひけるも

。これ全く傳教大師の化縁こゝに斷絶の時節にやあらんと。深くなげき思しける。これより折々京都に出て。内日さす大裏山の春のながめに。九重の空いと長閑に。百官百司の袖を列ねて參内するありさま。また赤裳曳官女上藤達の花見がてらに神詣を促し。都童の戯戯野に若菜を摘。土筆を折。さすがに京の春氣色。夢と悟りし世なりしも。現ごころの移りもて。柳櫻をこさませし。都を春の唐錦ながめもあかぬ風景を。遠近見めぐりつゝ。その夜は五條油の小路。天王寺屋といへる。書籍を商ふ家に宿り給ひしに。主翁淨本。性質篤實にして才あるものゆゑ。はやくも師の尋常ならぬを察し。一向こゝにひきとめ。妻もろともに疎畧ならずもてなしける。これより京都に出ては。いつも此天王寺屋にやどり定め。主夫婦も他事なく尊敬せしも。不測の大因縁にて。後年に及び主翁淨本その妻妙蓮ともに法子となり。淨本は弘安三年九月十一日をもつて卒し。其孫蓮妙宅を轉じて寺となし。本蓮寺と號す。永祿二年中興に及び。本國寺日栖上人。寺號を改む今の妙堯寺これなり。さて蓮長師は淨本が厚き情を喜びこゝに滞留なし給ふに此頃圓爾和尚とて。普門寺に住し。臨濟を弘むる禪僧あり。蓮長師折々この方に遊び給ひたるに。圓爾和尚もその

博學智辯を感じ、其法弟等に向ひ。師を指ざし。かゝる器量ならでは。衆生の導師には成
 がたしと語られけるゆる。其頃人いひ傳へて師を輕からずもてはやしけるとぞ。圓爾は後
 に聖一國師とて。世に名高く。寛元年中九條關白道家公の本願として。一寺を建立す。蓮
 長師平日の交り深かりければ。結縁の爲に大なる良材を一本寄附ありしに。程なく諸堂結
 構して。これを京都五山の第四に准し。惠日山東福寺といふ。今にその贈りし材木は。柱
 となりて。これを日蓮柱と稱し。世に奇特の利益ありとて。削り取者多かりける。又同頃
 聖興寺に道源といふ僧ありて。曹洞一派の禪を華洛に弘通す。蓮長師又此僧にも親しみ給
 へり。今京都には道源禪師圓爾和尚といひ。又其上に唐の禪僧。道隆蘭溪和尚。後に鎌倉
 建長寺の開山となりし大覺禪師とて。世上に聞へたる唐僧の來朝して。泉涌寺の來迎院に
 住居し。世の渴仰大方ならず。蓮長師これを開給ひ。泉涌寺は禪律眞言淨土四宗兼學の大
 山にして。開基已來宋朝より渡りし經論その外佛具等もあまたありとさよ。能僥ひと來迎
 院に入。道隆禪師の會下にひそみ。禪宗の見性成佛の工夫を凝し。參玄衲子の塵に交り
 給ひけり。此禪宗といふは。楞伽經。楞嚴經。金剛經等を大意として。其宗風他の諸宗に

似もつかず。大聖世尊一切經を説終り。機縁の薪盡。厥提河の邊に入滅の時。人天四衆五
 十二類。悲歎の涙。雨と降す迦葉尊者。雞足山の洞より。涅槃雙林のともに來り給ふ。如
 來寶棺の中に在して。華を拈て見せ給へば。人天大會その意を悟る者なし。迦葉尊者ひと
 り微笑たまふ。これ心を以て心に傳へ。正法眼藏。涅槃の妙心と名付たり。迦葉この佛心
 を得て。此を如來禪と稱す。のちに南天竺の達磨和尚。震旦に來り。其心印を傳て。教外
 別傳と名乗り。此宗門は不立文字と立て。一切佛經に依らず。一代聖經は月を指ゆびの
 如く。月を見て後指何の用かある。經論は瘡を拭ひし紙屑。佛像は尿壺を搔さぐる櫛木な
 り。釋尊の頭を踏で初て佛果を證すとのしり。腕を切て明悟し。猫を殺して悟道し。旌
 の動くにさとり。瓦を投て得悟す。これを直指人心見性成佛といふ。讀經修學を疎んじ
 。坐禪工風を專にす。凡俗の耳を驚かし。愚昧の膽を奪。法外不測の宗旨なり。此宗の日
 本に渡りしは。仁安三年釋の榮西。天台山の敝禪師より。心印を傳へ。歸朝有て。建仁寺
 を草創し。これより禪流海内に彌布。蓮長師は此宗風により。しばし禪機を凝し給ひける
 が。又思立て江州滋賀郡三井寺に趣給ふ。この寺は比叡山に先立と一百餘年。天智帝第五

の皇子。大友の殿宇を寺とし。園城寺と名つけたり。本尊彌勒菩薩にして。五十六億七千萬歳。龍華の道成を期する誓ふかく。其三會の曉を契らん初ぞと。入相の鐘に無常の響をつたへ。志賀の花園に無我の嵐を觀するもいと尊し。當山の中興。智證大師は讚州の人なり。十四歳の時。叡山に登り。義真和尚の法子となり。後慈覺大師に與同し。口に天台を唱へ。心に眞言密部を存し。しかも大徳にして三代の帝王の御戒師となり。世上の尊敬大かたならず。かく盛なりし蹟なれば學匠も亦多かり。ひとたび其境に入て。不測の法理をも尋ばやと。其學寮に入て。智證大師傳來の舊記。書録を讀給ふに。皆これ慈覺の同論にして。寺門寺山ともに法華經の蹟を絶し。天台傳教そのれもかけもといめず。日本一宗正法に背き釋尊の本懷を滅却す。哀れこの暗のうつゝに迷ふなる一切衆生は何を頼として。後の世を助からんと。両眼に御涙をうかめ。忙然たる折しもあれ。襖をしわけ本院の所化見なれぬ僧を伴ひつ。運長御坊よ。此はその初め。此山に剃髮したる者なるが。久しく鎌倉にありて。今又ふたゝび歸り登りし。善證といふ沙門なり。此寮に同居させよと。學頭の下知なるはとさし示せば。運長師は唯々と應へ。式禮終て宣やう。さても床しき友を



得つるかな。我さいつとし。五歳までも鎌倉に住で。親しきかたもいと多し。關東の勳をさかん音信さへ。絶て六年をへしこゝに。夢路も遠き鎌倉の。安否を聞んられしよとありければ。善證坊は歎息吐我れ先年齢いと弱くて。師に誘れて鎌倉に下り。大藏なる大慈寺に住。思ふに増る府内の繁華。かゝるめでたき地に棲こそ。世にあるかひの果報なれど。送る月日の箭をはやみ。幾歳ふりし白雪の。積る病ひに師の坊の。消て跡なき我が薄命。寺内の親しき友達は。いと懇にといめもしたれ。近年つゞく鎌倉の凶變に袖うち拂ひかへり來ぬと。舌を卷ての物語遺長師は耳を聳て。その鎌倉の凶變とは。いかなる事と根葉分て。問るゝ善證膝つくろひ。さればとよ。鎌倉將軍頼經公とさこへしは。二歳の御時關東に下向なり。九歳にして。征夷大將軍に任せられ。今年三十にも得なり給はず。とかく世を憂事に思召給ふ。その根は北條一家權威にはこり。將軍家はわれども無が如く。其上諸國に非分の沙汰のみ聞へ。彼是御意をいため給ひ。明しき間なき御病廢。ことに去る寛元元年。極月廿九日の事なりき。白き虹唯一筋日輪をつらぬいて。一天に跨りたり。こは不測と。御所のかしましさに。將軍家御庭に下立。これを仰見給ひしに。俄に御目眩疎

毛ければ。いとぎ其儘御殿につかせ給ふ。これより雨風度々吹荒て。時候順當ならず。是に依て其翌の辰の三月。將軍家御心願とあつて。鎌倉中の神社佛閣。残りなく御願拜わり。同四月廿一日。御嫡子頼嗣公。御元服ましまし。京都へ葵聞のうへ。征夷大將軍に任じ給ふ。御齡わづか六歳なり。同七月五日。先將軍頼經公は。御齡廿六歳久遠壽量院に入て。御飾りををれろし。入道なし。御名を行知と稱し。年來の御本懐なりと。悦び給ひしこと。心無き下賤の者まで。聞も勿躰なかなしき限りと。皆人いひ合。世の中何となく物哀れに。頼すくなく覺ゆるに。打つゞき去年三月の彗星。これまで日本にありとも聞ぬ。怪しき形なりと思ふ處に。今年寶治元年。未の三月十二日の夜。戌時に大ひなる流星いで。丑寅の方より未申の方へ飛渡る。其長五丈ばかり。虚空をわたる。その光り晝の如く。鳴轟く響。大地に震動して雷電より凄しく。人皆魂を消ぬ。同十七日天氣うらゝかなる長天に。黄色なる蝶の數限りもなく飛聚り。幅一丈餘。長十丈ばかり。摸稜亂れず。恰かも黄色なる旗絹を。ひるがへすが如く。翻々として虚空にひらめき。あるひは高く雲間にかすみ。又は近く軒端に舞けるにぞ。鎌倉の町中。こゝよ。かしこと見物せしが。はては

破落々々と飛散。さしもにひろき鎌倉中の人家に飛入て死しぬ。昔朱雀院の御宇。承平の
 初。常陸下野の兩國に。黄色なる胡蝶多く聚りしか。程なく相馬將門。反逆して東國暫く
 亂れたる事ありきと。昔語りをさし傳へ。安さ心もあらざりしに。同廿一日の事なりき由
 井が濱の沖俄に紅ひに變じて。その色朱を流したるが如く。大海皆血潮となり。紅ひの波
 岸を洗ひ。巖に生し磯草も。砂に交る種々の貝も礫も。皆その色に染成て。珍らしくも
 又恐ろしと。市中の者見物をさへ爲ざりけり。御所よりは。執權を始。大小名までそれそ
 れ由井が濱に出馬ありて。その不測を見届給ひけり。此月十一日。奥州津輕の浦々。海の
 潮水血に變じ。あやしき魚。數多く死して流れよりぬ。其長一丈餘。手足は人間の如く。
 鱗細にして頭と尾鱗は魚なりしよし。彼の國司より注進す。これに依て。博士を召て御
 尋ありけるに。先例こゝろよからず。昔文治五年の夏。此魚あつて泰衡滅亡し。又建保元
 年四月。この魚鎌倉の海に見へて。和田義盛亂を興しその一門滅亡せり。此魚の佐與は。
 世の中の不祥なること論なし。但し海水の血に變じたるは。和漢兩朝前代いまだ其事をさ
 かすといへども。大方天下の御大事ならんと言上せりとさく。彼といひ此といひ。斯春の

不吉の凶惡。耳目を驚かし。鎌倉の上下萬民みな面色土のごとく。聲れのよき恐しなんど
 言ん方なくはべるほど。其を見る如く語りければ。蓮長師はあまたよび歎息し。日月二天
 いまだ地に墮す。水は流れ。火は燃る。此世の滅する壞劫にはよもあらじ。其上天下の政
 道正しく。民を撫。下方民は五常を守りて。五倫亂れず。かく正しかる世の中に。天地の
 怒り烈しきは。鎮護國家の佛法に。僻めるとの有もやすると。思ひあまりて口籠に獨言し
 給へは。善證は開咎。こは不審。仰かな。京鎌倉はいふもさらなり。陸奥筑紫のさかひま
 で名僧知識の開きたる。その宗門の數多く。佛法の繁昌は。津々浦々のはてまでも。神に
 佛に敬いぬ。人とてもなき此國に。何を罰して。辛目を見給ふべき事かはと。詩詞にさは
 わらじ。神も佛も妙法の。法味なければ此國に。影もとりぬ空蟬の。もぬけの殻に入替
 る。惡鬼魔王のなす事より。國も衰へ世も亂る。嗚呼あさましと言は得に。いはで止みし
 御意を。知るよしもなき善證が。たがひに顔を見合せて。ともに愀然たるばかりなりける
 。斯て寶治元年も半を過。七夕津女の空ちかく殘暑のたへがたきに。時知りがほにはのめ
 かす。桐の一葉に思立。南都の大寺。高野をも遊學せばやとおぼしめし。三井の學寮に別

を告。大津より京都に出給ふに。鎌倉に兵亂ありきとて。下賤者の癖として。路に語り門に傳へ。いと喋々しく聞ゆるにそ。運長師は天王寺屋淨本かもとに立よりて。南都に學問せんと思立しその志を物がり。且また鎌倉の騷亂とは。いかなる事にはべるやと尋給ふに。淨本は眉根に皺よせ。いざとよ昨日。註問の書籍をもたらしして。六波羅殿の記録所の。庇まで参りたるに。侍所の詰衆達。その始め終りまで。詳に聞し給ひたる。鎌倉の爲体。その混雜に我が用は得達すして歸り來ぬ。法師に用なき事ながら。耳の法樂なし給へど。矢背の姥が手作とて。貰ひたる初穂の黍の捏餅。折敷に盛てすゝめつゝ。さてとよ鎌倉に在て。三浦若狭前司泰村とさこへしは。鶴が岡八幡の東の山際に邸を構へ。しかも先執權北條泰時の智なれば。天下の政事をも談合し。世に輕からぬ家筋にぞ在しけるこゝに又秋田城之助義景といふは。藤九郎盛長の孫にして。代々長谷の甘繩に住居し。當時の執權。北條時頼と無二の交りにて。これまた世に威勢を振舞ける。此兩家はともに累代の諸侯にして。右府頼朝卿このかた。鎌倉の城廓。天下の礎となりけり。しかるに此兩家たがひに權威を詳ひ。年頃快よからず。ありけるより事起り。前司泰村とかく我意を行ひ

。我がまゝの所行多く。將軍家の下知を蔑り。非法の働き多かりければ。北條時頼深く心を痛め。泰村が野心を宥め。泰平の謀ごとをなさんと。様々に扱ひ給ひければ。いよゝ心高振。増長して。無禮の事のみ多く。其兄弟一族みな其氣に乗して見へければ。時頼も今はその謀叛の下心を察し。用心いとまなかりける。此事を開傳へたる。近國の諸士。我もくと人數を纏ひ。鎌倉さして参着し。御所をはじめ北條家の邸を守護し。事仰山に見へければ。秋田城之助は折こそよけれど。表に忠義の色をわらはし。内心には日頃の意趣を晴さんと。俄に下知を傳へ。大曾根左衛門尉長泰。武藤左衛門景頼。橋十郎公義等はじめとして。一族同士の輩。三百餘騎。若宮大路より。神護寺の門外に屯して。哄を作り五石疊の紋摺たる旗をさし揚。筋違橋の北に陣取たり。諸國の御家人。すはや軍は始りたるぞとて。追々此手に馳加ふる。三浦前司泰村は。不意を討れて驚つゝ。家臣郎等に手配を傳へ。嚴しく防ぎ戦ふ處。執權北條時頼も。今ははや事破に及びたれば是非もなしと。北條陸奥守實時をもつて。將軍家の御所を固め。北條六郎時定をば。討手の大將とさだめ。五百餘騎をさしむけられければ。塔の辻より馳加はる軍勢。雲霞のごとく。既に鎌倉大亂

に及び老たる親を負。泣叫ぶ兒を引携。妻よ兄よと迷惑ふ。家財を荷ひ。雜具を運ぶの狼狽に。病人を踏殺し。幼兒を倒に抱懷き。西へ東へ辻々に泣喚るこそ物凄く。修羅闘詩の惡道を。目前こゝに感じける。さてしも敵味方の吐のころは。天地にひいき。軍馬の物音地に震動し。諏訪兵衛入道。信濃四郎左衛門。軍勢を上げまし。北の手を攻破る處。佐原十郎左衛門泰連。同十郎頼連。能登左衛門尉。これを拒んで血戦し。しばしその斐見へざりけるが。伊豆國の住人。輕又八と名乗て泰村が南の小屋に攻登り。向ふ敵三騎まで伐て落し。小屋に火を懸たりしかば。折ふし風烈しく。火焰四方に散乱せり。三浦の一族はや防ぐべき手立もなく。とても逃れぬ運命なれば。徒らに焼死んより。法華堂に引退き。故右大將頼朝卿の御影の前にて。自害し前代の御恩に報奉らんと。各北の塚をうち破り法華堂として引て行。泰村が舍弟能登守光村は。永福寺の惣門の内にて。郎等八十騎を隨へて。眼に餘る大軍を引受挑み戦てありけるが。兄泰村が引退くを見て。死生を一所にせばやど。一方の敵をうち破り。法華堂をさして落行を。數方の敵軍さびしく後を慕て。追討にぞ三浦泰村が兄弟。毛利入道西阿大隅前司重隆美作前司時綱等。返し合ては引。討拂ては

退きつ。漸く法華堂に引入けるに。ついでに込入る敵軍をば。白川七郎兄弟。岡本次郎。垣生小太郎。佐野三郎に防がせて。頼朝卿の尊像の前に居並んで。高聲に念佛し。三浦若狭前司泰村をはじめとして。一族二百七十六人家臣二百二十餘人。同時に腹を掻切て。同じ枕に死てければ。申の刻には全く戦は果にけり。嗚呼此日いかなる日ぞや。寶治元年六月五日。累代武威を關東にかいやかしたる。三浦の一族。夏草に結びし夢の跡もなく。皆滅亡に及びける。又泰村が妹婿。上總權之輔秀胤は。下總國一の宮。大柳の要害に楯籠り。近邊を押領し。合戦の要意。取々なりと注進す。依て大須賀左衛門尉胤氏。大將として二千餘騎。鎌倉を進發す。この注進櫓の齒を挽が如く。京都六波羅へ聞へ。海山隔つ九重の。空さへ憂る心地なれば。關東にすむ民百姓の心のうち思やられてはべるはと。息つさわへず物語るを。遠長師は心の底に斯あらん。佛法亂れば王法亂る。左もあるべき道理ぞと。明ていはれぬ本地の内證。さても恐ろしき淨世には。成果ける物かなど。深き心を岩が根に。下漏水のいと淺く。いらへなし給ひつ。其夜は淨本夫妻が。わりなくといひるゆへ。一夜をあかし。それより南都に趣き給ひけり。青丹言。奈良の郷といふは。帝王六

代の都にして。昔は句ふ八重櫻。けふ九重に移しはしたれ。古き寺々の多く残りて。佛法盛の地なればや。世に奈良學といひ傳へ。古書經論を高くつみて。佛學の達者いと多し。蓮長師は叡山にて知己の僧こゝにあるを紹介として。元興寺に入給ひ。彼の高麗國の慧灌和尚の傳來せし。唯心無境と立たる。三論宗を學び。又傍に我が朝天平七年。玄昉法師の弘め初めし。俱舍宗の論三十卷を讀で。其宗意を究め給ふ。こゝに又興福寺の僧釋の道昭律師。唐にゐるて。玄奘三藏より傳へたる法相宗といふあり。此等の諸宗をそれこれと習ひ併合。近きころは東大寺にうつり住。いく月日を送り給へども。奈良の古跡を見物せんいとまもあらず。在しけるか。此程うちつゝく爾生の空のうららかなるに。學室を立出給ひ。振さけ見れば。はのがすむ。春日の山を真中にて南は高間北は若草。この三の山を羽買の山と歌によみ。また三笠の山とも世に傳ふ。萬葉集に

はし鷹の羽買の山を今朝ゆけば。飛火野の原に雉子なくなり。と見へたるもれもしろく。いま幾日ありて若葉摘てんとある。野守の池。雪消の澤に萌いで。ねよげに見ゆる若帥を。己が臥處と。小雄鹿の。ねきふし遊ぶ。のとけさに。心いとみて。千早根神垣の森

御手洗川。清流るゝ水源の。春日の社に詣給ふ。常社は大宮四社。一の御殿と聞へしは。武甕槌命にして。神護國雲二年。この春日野に影向ありて。天が下の草民を護ますと。いと尊く思はれ。猶そここゝと尋ねまはしくればせども。學ぶべき諸宗の經論。最多くて。心のまゝに遊ぶによしなく。猿澤の池の玉藻のたまさかに。昔を忍び給ふのみ。今この東大寺に在して。華嚴宗を修學なし給ふに。これは孝謙天皇。勝寶六年。良辨大僧正。勅を受けて入唐し。廬山の惠遠法師より習傳へ華嚴經にて。三界唯一心と立。十玄六相の法門を備へたり。また成實宗ときこへたるは。鉢空無生の法理とて。獅子鎧三藏が造りたる成實論を。根とする宗門なり。かれこれ學びの道に。今年戊申の秋も深くなりけるころ。蓮長師は泉州左界の浦に待人ありて。東大寺をうちたち。郡山小泉より龍田にかゝり。山路はさゆる霜風に散て。流るゝ紅葉は。いざといはねと潤川の。水にこゝろの語れて。見送る瀬々の唐錦。九曲坂なる石高路を。數珠爪操てたからかに。壽量品を唱へつゝ。徒行給ふ處に。僕に些の袂を持しめ。椎名紬の胴服に。黒皮の行騰し。山刀を佩たる人。此方を見つゝ聲をかけ。珠勝の御經いと有がたく聞はべりぬ。御身はいづれの御出家にて。

何處にれもむき給ふやと。問はれて後を見かへりつ。我は道長とて。天台の僧なれど今の天台は天台ならず。まして諸宗は多かれど。凡僧野師の了簡のみ多く佛の教に似もつかず。出家となりし身の任にて。其を能く學び正さんと。南都に高野に學問なす者にはべると應給へば。其容貌といひ。道心といひ。世に稀なる御出家かな。我は和泉の國府に棲る。江川太郎左衛門吉久といへる者なり。明日は先祖の忌日なり。狂て一夜の供養をうけ。我が方に宿り給へど。懇にありければ。袖振合す多生の縁。黙止がたしとそがまゝに。吉久に伴れ。上土門に植をへし。松の縁も不老不死。揚り櫃に法衣の塵をうち拂ひ。威儀容々と入給へば。吉久も家の族に意を得させ一間を淨くはらはせつ。敷てすゝむる花筵。色も香もある狸應は。やかて一乗の寶を結ぶ。大因縁とぞ知られける。かくて運長師は。供養追善の終り。種々の話に取交て自他ともに泡沫夢幻の身を忘れ後世の營み疎略也と云てとよりして。御經に見へたる。月の鼠日の鼠といふ事をさへ語りいで給ふ。茲に一人ありて。廣き野原に出て。虎に追れて逃惑ひ。數十丈の斷崖に落入たり。斯は協はじと一株の草に取つき。漸く其身は取どめられど。下を見れば。物凄き淵に。長十丈ばかりの鱒鮫落

なば呑んど待つけたり。上を看あぐれば。彼の虎はもし登らば咬んど睨まへたる有様なれば。いかゞはせんと。魂も身にそはず。恐ろしく有けるに。いづくよりか二頭の鼠いで。かはるぐに彼の命と取繕りたる。草の根を咬切にぞ。其人の心のうち。いかに悲しかるらんと。思ひやらせ給へ。我等衆生の身の上。全くかくのごとくにて。人の上にはあらぬかし。前の世に造りし悪業は虎と成て追來り。これに追れて。六道の廣き原中にさまよひ。唯今三惡道の深き崖に落入らん處を。いかなる過去に善根やありけん。一株の草の手に觸りしを。それを命と取つきて。漸く人間と生れたり。前の世を願れば。惡業の虎は。鬚喉反して睨まへ居り。後の世を見渡せば。無量罪惡の鱒鮫。鱒を怒らして待懸たるを。哀れなるかな我々が。いのちとすがる草の根を。月の鼠日の鼠といふふたつの鼠。かはるぐに出來り。昨日は正月今は二月。けふは朔日あすは二日と。頓て限りある草の葉を咬つくされなば後の世いかに成ゆくらん。されば佛法を知らずして。此あだし世にむなしく。月日を送る人を。智者といはんか賢人と譽んか。よくく思ひはかり給へと語り給ふにぞ。主吉久をはじめ。一家の男女これをさゝ。一座しめりてともに菩提の心を發しける。こ

れより年曆十五年。弘長壬戌の夏。伊豆の伊東に流罪の頃。江川吉久は。同豆州韭山といふ地に移り住て在ければ。不圖そこに再會し。本化の化導に預りて。法弟となるべき良縁を。茲に結び給ひしも。宿世奇特の相遇と思はれられしより。蓮長師は。堺の津にいたり。古郷の人に値て。御両親の雁使をもさく。道善御坊まで恙なくいますよしをさし。喜びの眉を開き給ひ。其方へ贈るべき。書など認め。此彼古郷の物語に。思はづ日敷を重ね給ひけるが。慕なんとする年華に驚き。ふたゝび奈良へ立歸り。東大寺より紹介を求め。招提寺の梅檀林に入給ひける。當寺は天平勝寶六年。聖武帝。唐の鑑真和尚を。我が朝に請待し。御歸依後からず。紫宸殿の側に。大戒壇を建て。帝をはじめ。大臣公卿。下民に至るまで。受戒の輩四萬餘人。この招提寺は戒行律宗の本寺なり。統て三輪。俱舍。法相。成實。華嚴。律。これを南都の六宗といふ。蓮長師は此諸宗の論釋を學び。それより藥師寺の經藏に入て。一切經をひらき。彼の宗々の流儀を逐一御經に照し合て。しばし心を潜め給ふ。これ建長元年の頃にして。年輪廿八才の時なりけらし。茲に又同國平群郡。法隆寺と云は班鳩の宮の蹟にして。聖德太子。勝曼經。御講讀の舊跡なれば。蓮長師も頻

に其跡のしたはしく。此寺に入て。三論成實を講論し。程なく。高野山に登らんと。紀の路をさして。旅立給ひけり。高野山とさこへしは。紀州伊都郡に属する。靈山にして。昔弘法大師。唐土より日本に歸り給ふ時。かの唐の湊にて船に乗り。三鉢を手に捧て。日本の方に向ひ。此三鉢大日如來。有縁の地にとまれと。空中に投給ひければ。其三鉢翹なけれども。高く雲に入日本の方へ飛去りけり。船中の者。これを見て驚嘆せざるはなし。大同元年丙戌十月廿二日。歸朝し。嵯峨天皇の御戒師となり給ひければ。彼の唐にて投たる三鉢。いづくに落止りしやと。日本一州に勅命有て。その在處を尋ねしむるに。紀州伊都郡高野山にありけると奏聞す。天子御感悅在まして弘仁七年弘法大師をもつて彼の山を開かしめ。金堂を建て丈六の阿閃佛八尺五寸の四菩薩をたつ。今の高野山金剛峰寺是なり。蓮長師は紀の路より花坂にかより矢立といへる處まで登り茲にしばし休息つゝ。これより伴ひ此山の僧一人加田より歸るに連立。嶮しき坂を登り給ふに。路の右りに捨石とて。手をもて振たる如き岩角あり。又押揚岩とて大盤石を押あげ。下面に左りの手の跡凹かに見ゆる。彼是いかなる故ありやと。尋給ふに。路連の僧うち咳嗽。さてとよむかし弘法大

師。此山を開給ひしに。大師の悲母うれしく思し。登山なし給ふを。弘法大師れしとていめ
 まゐらせ。女人結界の山なれば。協まじきよし諭給へば。母公の宣やう。我が子の開きた
 る山に。其母の登られぬ道理やあると。強て登山し給ひければ。一山俄に轟動して。火を
 降せければ。母公の御身たちまちに焼焦れんとす。大師愕て。かたへの巖を押揚。その陰
 に。母公を隠し給へり。母公御怒の牙を咬。あたりの岩をしたゝかに振給へば。その御手
 の跡岩角につきぬ。今の振石。押揚石これなり。遺恨やるかたなく。猶登り給ふに。鏡石
 とて石面斑々として能物の影をうつす石あり。母公我が姿の此石に移るを見たまふに。髪
 うち亂れ。眼血ばしり惡鬼の形に似たり。我が身ながらもねそろしき事に思し召。兎角女
 人の身は。生身の佛に値奉らずは。得脱かなひ難しと明め。これより天野に下り。巖窟に
 籠り。慈尊出世の曉を待て入定なし給ひし。天野慈尊院。彌勒堂これなりと。喘ぎく
 と誇りがに物語るを。蓮長師は唯應々といらへつゝ。心のうちに思すやう。淺猿哉弘法大
 師。唐に渡り天竺に越。艱難修行の功積て。御身ひとり佛果を得たれ。母を救ひまゐら
 すと協はず。現在この山に地獄の炎を降せ。牙を咬。石を振て。怨を末世に傳へ。恥を後

昆に晒させ奉りし大罪。無量億劫無間の底にその身を焦すとも。此罪猶消難かるべし。佛
 教には父母の恩。第一と定め。儒典には五刑三千。罪不孝より大なるはなしと見へたり。
 たとひ其身天子の御戒師となり。下萬民に生如来と仰がるゝとも。豈本意なき事にあらず
 や。もし此事實ならば。眞言の宗門には。三界の女人たすかるべき道なく。一切衆生。父
 母に孝行の道絶ぬべしと。心に秘て山吹の。いはぬ色なる花坂より。實をも結ばぬ。無益
 語の。ひかし語り路はかゆき。五十八町總門も。やゝ程近くなりける。これより密巖
 の淨域に入。頭をめぐらして。其山嶽をうち詠め給ふに。花坂不動坂いづれも。五十有餘
 町の險路を陟り上峯又廣き平地にして。四嶽八山屹立として。内に大日覺王の淨土を開き
 。東西は龍の臥が如くにして流をそゝぎ。南北は虎の踞するに似て。坊舎その間に立連ね
 たり。玉川の水源よりは。五逆三毒の水を流し。御廟の橋は。五障造惡の濁穢渡さず。扁
 栢黒松いや茂り。夏尙寒き伽藍の清淨。又曉の枕には。佛法僧の聲すみて。無明の夢をお
 どろかす。此鳥はその形容鳩に似て。その色碧綠なり。其啼聲佛法僧と喚が如し。歌に
 我が國は御法の道の弘ければ鳥も唱ふる佛法僧かな。後鳥羽院の御製も思ひ出られ。誠

に佛門の柱石。鎮護國家の山とぞ思はれける。常山の起源たる。眞言宗といふは。同し佛法のうちにも。釋尊の教法と大ひに事かはり。毘盧舍那法身。大日如來盧空の阿伽尼陀大。法界宮にいまして。金剛薩埵の爲に。口に眞言。手に印契を結び。意に觀門を開くべき。此三密の秘法を傳へ。これを大日經と名づけ給ひ。又密教と定む。釋迦如來は同じ佛なれども。應身下劣の凡躰にして。その説たる御經も又いやしく。これを顯教と名づく其相違をいはい。釋尊は無明の凡夫にして。大日如來の履探にも及ばず。又大日經は圓滿具足の密法にして。法華經の如きは。その牛飼にもたらずといへり。此宗旨は中天竺の善無畏三藏と云者。將來して唐土に渡り。玄宗皇帝の御師となりて。眞言大日經を弘通す。金剛智三藏。不空三藏ついでて天竺より來て。其宗門をたつる。此時に當て。漢土四百餘州。眞言大ひに流布せり。本朝には空海和尚。寶龜五年を以て讚岐國。多度郡に生れ。延暦廿三年五月十二日。三十二歳にして勅命を蒙り。唐に渡り。青龍寺の慧果和尚より。眞言密法を傳來して。日本に歸り。彼の傳教の弘めたる。法華經の位を考ふれば。顯密合その中に。大日經第一。華嚴經第二。法華經は第三にして。大日實經に競れば。法華の類は戲論

とて幼稚もの戲言に似たりと罵り。高野山を開て。眞言の正宗を弘む。一天の君。尊敬淺からず。萬民誰か仰ざらん。弘仁九年の春。天下の癘疫を攘除かんと祈り給ひしかば。夜中に日輪出たり。又朝庭にて即身成佛といふ事を疑ひしかば。手に智拳の印を結んで。南方に向て。現身に佛となり光明を放ければ。天子は玉の冠を傾け。大臣百官地上にひれふし給ひけり。かくて承和二年三月廿一日。金剛峯寺にして。手に毘盧の印契を結びて。入定なし給ひけり。それより後八十七年を経て。延喜廿一年十月。弘法大師と諡名を受給ふ。かゝる尊き五智の瓶水。三密の法印かるくしく他家に授くべきにあらざるを。逆長師のこりなく。其奥藏を研究せんと。庵ふり埋む雪の中に。一歲を送り。明れば建長二年の春をむかへ。雪間の草の初みどり。都の花より珍らしく。心も春といさみつゝ。高野を下山なし給ひ。これより。道を河内に求め。當國石川郡。太子村なる。磯長の叡福寺に。聖德太子の御廟を拜給ふ。中央は太子の御母。間人皇后を飲め。東に聖德皇太子。西には太子の御妃。膳臣の大妃を安じ。これを三骨一廟と稱し。今に御廟の丘に。悪木雜草を生せず。雨風に竊ず崩れず。樹木に諸鳥翹を休めず。此を御墓山三の奇事といひ傳ふ。太子

御入滅ごにりめつの後のち。推古天皇すいこてんかうより。後宇多帝ごうたていにいたるまで。四十代の帝王てうわう。代々こゝに車駕しやがをす
 められ。御廟ごみやう參詣さんげいせざるける。かゝる尊き靈跡れいせきなれば。遺長師いぢやうしも茲こゝに參詣さんげいし。御廟ごみやうの前に
 座具ざぐを展敷ののしき。恭敬くきやう禱拜たうはいし。法運ほつうん興隆きやうりやうの恩德おんたくを謝しやし給ふに。日も夕暮ゆふぐれて山の端はに。三日みか月づきか
 すむ黄昏たふせ時とき。ゆくてをいそぐ事かほと。此廟堂このみやうどうの中ちゆうに入いて通夜つうやありたるに。其曉そのあけ天あめがた廟
 窟くつの燈明みあかりはのかに。聖德太子しやうとくだいし。衣冠いくわん正ただしき御服ごふくのうへに。錦襪きんわく九條くじやうの御袈裟ごけさをかけ給ひ。
 ありく。其處そこに立給ふに遺長師いぢやうしは讀よみさし給ひし經卷きやうくわんを。徐しゆかに卷まねさめ。うやくし
 く御手ごてを支つかへ。當今たうこん末法まうぽうの群類ぐんるいのため。此法華經ほけきやうを弘ひろめんと宿願しゆくがんを。逸いやく々に述の給へは。皇
 太子たいしは點頭うなづつ。堯爾くわんじとして滿面まんめんに歡喜かんきのいろをあらはし給ふよと思へは。夜よははのぼ
 のと明渡あけわたり。妙香めうかうのかほり。四邊あたりに馥郁ふくいくと薰くんじつ。皇太子くわうたいしの尊影そんえいは。見へすなり給ひけ
 る。遺長師いぢやうしはその御後ごあとをふしおがみ。感涙かんなみ座具ざぐにしたよりて。御頭ごかうも擡た得えずた。まゝたし
 き唐衣からころも。日もさしのぼる御墓山ごはつやま。僧そう御名ごな殘ごんのしたはしく。禮拜らいはい誦經じゆきやうに時ときをうつし。その御
 廟堂みやうどうを退出たいしゆつなし給ひ。これより山城やましろ國くに綴つ喜き郡ぐん。男山おとやま嶋じまが峰みねに跡あとを垂た給ひし。石清水いししみづ八幡宮はつぱんぐう
 に參詣さんげいし。宇治うぢより京都きやうとに出いでて。天王寺てんわうじ屋や淨本じやうほんがもとに歸かへり。南都なんとに高野かうやの物語ものがたりり。つも

る修行しゆぎやうの艱難げんなんを。淨本じやうほん夫婦ふうふはかつ感かんじ。かついたはり。しばらく茲こゝに御身ごみの勞つとを休やすめ給へ
 と。いと懇ねんこにもてなすにぞ。我が故郷こきやうの心地こちして。ねもはづ日數ひかずをかさね給ひけり

日蓮大士眞實傳一之卷畢

日蓮大士眞實傳二之卷

東海相模州 小川泰堂編述

人を酔するものは藤體なり。雞を酔するものは蜈蚣なり。雞蜈蚣を啖へば酔て墮天を告す。蕎麥の花を嘗たる蜂は酔て人を刺す。薄荷を咬し猫は鼠を捉す。鳩に桑樹。蛇に菜莢。いづれもこれを啖へば酔といふ。其道に違ひ良能を失ふは。異類もまた人間にかはることなし。今日本國の一切衆生方便權教の酒に酔て法華眞實の正氣を失ふ其生死長夜の酔をさますべき方術もかなど蓮長師は南都の六宗高野の眞言。廣く諸宗の奥藏を窺ひ京都に歸て。しばし雄氣を養ひ在しける折。天王寺屋淨本が。年來したしかりし儒者あり。博學の名高く。月卿雲客を友とし。仙洞の御所へさへ。時々昇りて經史百家の説をも。聞へるよしをさゝたまひ蓮長師は一日そのかたを訪たまふに。東寺のはどり。北面雜所の住居に交り街近けれどもかしましからず。いと物靜けき玄關に。物言さんどねとづれつ。五條油の小路なる。淨本が縁の者のよし言述て。案内を請ひたまひ。面會しつ。且驚き膝を撲

て。先生は比企氏にはねはさぬやと有ければ彼儒者不審はれやらず。斯のたまへども兎の
毫ほども見も聞もせぬ貴僧をば。いかゞ知べき誠よしあらずと答れば。師は微笑て。儒者
のうちには半面の識とて。襖の際よりかいまみて其顔を半面見しさへ識人といふなるもの
をいかにして。幼稚心のいはけなき。吾さへ見覺へあるものを。君は吾より齡たかくて。
物々しくも吾が家を訪給ひし。房州小湊の配流人貫名が兒の善言にはべるかしと。いはれ
て先生ひたと呆れ。幼稚ぬしとへ見覺たるを。年華高くて忘れしは。我ながらぞましか
りさといひ譯て。一別以來の應答にむかしを思ひ出しけり。此儒者といふは鎌倉二代の將
軍頼家公の其頃には比企の判官能員とて世に時めさし權貴の家さるを北條時政が。政子の
方と心を合せ。腹悪くも能員をねのが邸に欺き迎へ名越の亭にてたまし討。そのまゝ手勢
を引具して。比企が邸へ押寄つゝ。不意を伐たる殘忍荼毒。比企の一族のこりなく。邪見
の刃に身を裂れ。一門こゝに斷絶す。其時判官能員がいとく季の男子ありけり。それさ
へ殺し捨べきを。その頃比企の親族に伯耆坊とて戒行堅固の沙門あり。鎌倉の北。山の内
なる證菩提寺に住しけるが。此事をさゝつ身捨て。その稚兒を法衣の袖に請うけてその

玉の緒は取どめつ。其儘には成がたしと。房州に流されしは。此男の二歳の時なりけり。
これより配所に人と成。貫名の家も程近ければ。訪れとづれ罪なき配所の艱難をかたり。
互ひに心をなぐさめ給ひける。其後は比企氏も伯耆坊にもなはれ。京都に登り。表には
東寺に入て。出家となしぬと聞へ置。實は才學いと頼母しく。經學文章拙ながらねば。過
し流罪のつみ咎も代る月日の久しくて。年々繁き諸國の成敗。今は毛を吹。疵を求むる人
もあらじと。儒をもて家を興し大學三郎能本と名乗。都の人に仰がれて何不足なき身なり
けり。蓮長師はむかしの好といひ。また儒道にも望みありければ。折こそよけれど。大學
三郎に厚く交り。堯舜以來。周公孔子の道とする。仁義五常の教のもとする。詩書論孟の
儒書を研究。能本に學びたまひしが。一時能本歎息し。師の才智にて。儒者となり給は。
世上に功高く人倫に益あらん。惜哉法外無爲の佛道に身を陥給ひしことよと歎かれければ
。蓮長師は禮を正し。先生その儒を知て。未其佛を知給はず唐土宋の世に。觀文殿の大學
士。張商英といふ人は。その初め強達博學のきこへありて大觀四年六月召に應じて參殿し
始て。徽宗皇帝に御目見ありしに。此頃久しく早魃にありけるが。此夜俄に大雨降出。天

下を潤しければ徽宗帝御悦斜ならず。これ張商英が徳の雨なりとて。震翰を染て。商霖の二字を大字に書して賜ひき。これより位階丞相に登り。天下の政事にかゝつらひ其頃無雙の儒者なりしが。或時大寺にて。釋尊の一代藏經。たかくつんで麗々しく莊嚴し。燈明を點じ香を焚。いと尊く飾りなす。張商英これを見て憤りを含み。天竺邊土の夷狄等が書し無益の書籍を。かくまで。尊敬することいはれなし。從來佛といふは虛無空濶の教にして其體非ず。その體なき道を求んとて迷ふ人これ多し。我れこれより取かゝり。愚味の邪説を難倒さんすと家に歸り。久しく籠りて無佛論といふ書をかく其妻向氏あるとき夫婿に問。君は日夜何事を爲給ふや。張商英答てわれ無佛論を書て彼佛法を破らんとす。其妻笑て無佛といはんは何の論かあらん。先有佛論を書て。佛道を篤と見おさらめ。後にこそ無佛論もよかるべしとありしかば。張商英默然として詞なく。これより心にかけて。一切の經論を讀。漸く儒道佛道一致なる事を辨へ。大ひに佛教を扶たりとさく。我こゝろみに些これをいはん。斯天地の始終りを。佛は成住壞空の四劫とて。無量萬々年限り知れぬ劫を説。晋の邵康節は一元十二萬年にて。此天地は滅すといふ。佛は三世を教へ。儒道に

は一世を示す。其説とて、其道に大小あるは。其道に大小あるゆるるなり。譬は蜂蟻といへる虫は。その朝生れてその朝直に死す。世に明暮ある事を知らず。又蟬は夏生じて夏終る。世に春秋あるを知るに由なし。周公孔子の忠孝仁義を教へて儒道といふも。釋迦牟尼世尊の地獄畜生人間等の十界を立て佛道を教ふるも。唯夫一尺と二丈との長短の差別にて。其教法もとより一なり。天地の間に二の道なく。聖人に二の教はなかるべし。我が佛門に不殺生戒とて。物の命を取ざるは。儒道に示す仁なるべし。不偷盜戒とて。盜せざるは義を守るなり。不邪淫戒とて道ならぬ婦女を犯さぬは禮なり。不妄語戒とて人を欺き偽らざるは信といふべし。不飲酒戒とて酒飲ことをいましめたるは。本心を失なはざれと教ふる智にわらずや。君が仁義禮智信の五常も我が殺盜淫妄酒の五戒と。別なるものと思ひ給ふや。此五常五戒を持て。身を慎むは戒なり。志しを善道にさだむるは定なり。此二法を辨へたるは智慧なり。この戒定慧の三學は。身を修め家を齊ふ直道の根本なり。されば五戒三學を修行する人。家に一人あれば。其家十人よく治り。百人これを行へば千人和順ならん。此教千萬人に及ばば。百萬の人れのづから睦し。争ひ家に息刑罰國にすくなければ。國を

治め天下を平かにするの道。外に求べからず。法華經第六の卷には世を治る語言。一切みな我が正法なりと佛は説たまへり。先生の本業と立給へる儒道はもと我が佛法十界のうち。唯人間一界の教にして。それも佛の道なりと。しらせ給はで在すにやと。齒に衣させぬ物語に。大學三郎能本は袴の側に手をさし入れ。默然として始終をさしてありけるが。これより志を佛乘に運び。儒を教へ佛を學び。魚と水との交りも。後年鎌倉に再會し。大士の化導を扶つゝ其身も剃髮して法弟となり。家さへ轉じて寺となし。比企が谷妙本寺本巧院日學と喚れしは。世にも不測の前縁なりける。かくて蓮長師はこの比企氏の親しかりける冷泉家にたよりて我が日本の本教なる敷島の道をさかばやと。その緯を能本に語給ひければ。其は易き事なりとて。能本に案内せられて。冷泉家を尋たまふ。今の冷泉爲家卿といふは。定家卿の御子にして代々歌道の名家なり。そのうへ去つ寶治二年。勅命もて續後撰集といへる歌書二十卷を撰びて。寂感にあづかり給ひしより。いよく其家かゝやきて學びの門人は。八百日ゆく。濱の砂の數多し。蓮長師は播磨の杉原十束に。宇賀の昆布を取そへつ。心ばかりの路の芭。僕夫にもたしつゝ。式禮正しくねとなひ給ひければ。爲

家卿は柳さびの立烏帽子に。縹色の水干を着し立出て面謁し。その志の淺からぬを祝し喜びつ。さて宣ふやう我が敷島の道といふは。天地の成の隨意直なる人の心を種として。萬の言の葉をいひいで。尾上の松の霞に咽び。谷の柏の風に噪ぐも。皆その調べに協なる。神代のつたへ賢きも。初學初心の輩に。唯その道を語るとも。甘辛と味ひの嗜するのみ其身に益なし。直なる道の味ひは。みづから嘗て知には如じ。皇國學は我が國の古き書類を讀こそよけれど。まづ古事記神代の巻を取いで授ける。それより道長師は日にこの許に立入て。古書どもを問明らめ。和歌には奈良の都まで。古言たゞし萬葉集。神代久しく傳へてし。そのてにをはを初めとして。秘事多き數々まで心盡に學びたまひけるに爲家卿もその俊才の器量を感じればせしが。又和歌を認たる筆を見そなはし。此僧の才學といひ。又その手蹟の妙なること道風空海佐理行成卿これ本朝の名筆とつたへよび。我が家にも其筆跡は藏し持り。しかるに此僧の書法の絶妙なること。彼の四人に競るとも。をさく劣りわらぬかしと。舌を卷て驚きつ。これより爲家卿は深く師を尊敬し文庫に秘たる歌書のいろく取出て。其表題を師にかゝせ深く秘藏なし給ひ。今に其御家に傳へ

けるとなん。この頃蓮長師はしばらく暇を見合。東寺に遊び給ふ。此寺は山城國紀伊郡に
關し。秘密傳法彌勒山。教王護國寺と號て嵯峨天皇の建立なりといへり。此寺の法華堂に
眞廣法師といふ僧ありて。一度師に相見て。しきりに其智徳を慕ひ厚く交り。尊敬大かた
ならず有けるが。此眞廣の紹介にて。東寺仁和寺の學室に入り。眞言に小野廣澤の二流あ
るも。大概これを學び給ひけるとかや

眞廣法師は此に良縁を結び。後弘安四年辛巳の春。老牀を杖に扶けられ。遠く身延山
に登りて。本門の大戒をうけ。それより法華經一千六百二十部を讀誦せり。大士滅後
は日朗聖人に法を聞。常に經を讀て本化の宗を修行す。其東寺の法華堂今に我が宗門
の一寺と成て成就山法華寺とて靈跡を殘せり

一日蓮長師。東寺の法華堂にねはして。眞廣法師の懇望にまかせ。法華の開經無量義經を
訓讀なし給ふに。眞廣は梅檀を炷らせ頭を低て。其梵音をさゝすましたる折。油の小路な
る淨本の尋來て。その微妙の讀經に會釋も遺れ。竹縁に蹠り揚り。共に聞法の縁を結びけ
るが。御經終てさていふやう。今日は用筋ありてこれより直に天王寺に仕はべる。御師の

望をもかねて其僧寮へ頼置たれば。さだめて古き書類も取いだして置つらん。障なくばあそびがてらに往たまへ。御伴しまるらせんとあるに。師も喜び給ひ。御身の用の幼ならずば。伴ひてよとうち連て。淀川づたへ難波なる。天王寺に趣き給ひけり。これは津の國東生郡にある古梵刹にして。用明天皇二年聖德太子みづから澁河の館にうち向はせ給ふ時。白膠木をもつて。持國。毘沙門。廣目。增長の四大天王を刻み。怨敵退散の冥助を祈り。物部守屋を誅戮して。此寺を造立し。四天王寺と號す。日本國佛法最初の靈場にして。西の門に大鳥居をたて高二丈五尺。額は小野道風の筆にして。釋迦如來轉法輪處。當極樂土。東門中心の十六字を四行に書す。蓮長師は此を仰き見つ。この寺に入り。敏達天皇六年。百濟國より始て渡りし。經論又聖德太子手づから書たまひし法華。勝曼。維摩。の三經の註釋はじめ。許多の書籍を拜見し終り。京都にかへりたまふ。路のゆくてに佐女牛の八幡宮に參詣し。京都より比叡山に歸り横川淨光院にひそみて專天台の摩訶止觀を讀。智者大師の己心中の法門を了解し天台は藥王菩薩の後身。傳教は天台の再誕なる其法門の次第。古今獨歩の妙說なるを悟り給ふ。然るに此叡山は宗風亂れて諸派に別れ。檀那流。慧

心流。安海流。安然流など互ひに其流を争へども。龜の甲の毛の長短。兎の角の無有にていふに足ざる論なれば。更に取肯たまはず。唯傳教大師の正義を求めたまふのみ。これまで數年諸宗にわたり一切經の披見さへ。既に三度に及び。釋尊の正脈を御手に握り。末法の要法御心に居たまひ。恰も須彌山の金輪際より涌出たるが如く。百萬の外道もつかふべからず。無量の魔軍も犯し難し。抑も一代聖經に法華經のあるは。天に日あり國に王あり家に柱あり人に魂あるが如し。如來出世の本懷は唯法華一經にとゞまれり。又此法華經に二の義あり。一には迹門二には本門なり。其迹門法華をば。佛藥王藥上。觀音等迹化の菩薩を召て。正像二千年の弘通を許し。又本門の法華をば上行等本化の大菩薩に譲り。末法五濁の今を教はせたまふ。經文明白なり彼の迹化の藥王藥上等は既に天台傳教等と生れて華法迹門を弘めて和漢の兩朝に弘通せり。今末法に入ぬれば其天台傳教の迹門の教法すら。猶去年の曆に似たり。御經には後五百歲中に本門の法華經。廣宣流布すべしと説給ひ。天台大師もかねてこれを召知て。後の五百歲遠く妙法に沾はんと宣ひ。傳教大師も亦法華眞實の教は必ず後五百歲に流布すべしと。正しく御意を染て書殘し給ひし。されは今

その末法第五の五百年。彼の神力品の附屬を受給ひし。上行菩薩出現し給ふべき時節到來せり。我身不肖なれども。時を計り機を考へ。御經文に任せ。上行菩薩に先達て。此大法を弘むべしと。心決して磐石の如し。昨日に今日にうちついき。朝疾起て沐浴し。開結わはせ御經十卷讀誦まします其うちに。いとも妙なる異相の御神。杉の折戸の際に坐し。御經聽聞なし給ふに。日にく其影向の神像かはるにぞ。それを不審く思召。いま二十二品屬累品をよみさしつ。御掌を合せ南無と唱へて拜をなし。毎日いたします其方々はとも誰やの人に在すぞと尋給へば彼の異人恭しく禮をなし。我等は法華守護の三十番神なり。この日本を本土として。跡を垂たる神々の其むかし懸鷲山の佛勅をかしこみ當具奉行と應てし誓違はず末法に。御經守護の爲にこそ。こゝに影現はべりつゝ。聖人を守りまゐらするなりと右の御手を揚給へば。不測やその指尖より縷々として五色の雲を起し霞にわらず霧に似ずそが中に熱田。諏訪。廣田の神々を始として。吉備明神にいたるまで整々堂々として天津空なる星の如く居並て。異口同音に。斯人行世間能滅衆生闇と讚歎なしたまひける。師は泰然として謹み給ふのみ。側なる料紙硯をかいとりつ。三十番神の御名を記しとい

め。猶注樂の心して。殘んの御經讀誦なし。卷第八にいたるころ。禮を作つゝ神々も退き
 給へば卍字にめぐる多摩羅婆の香の煙の薫るのみ。一室はさらに寂莫たり。こゝにわいて
 其影現の神像を。拜見のまゝ畫工を雇うて繪がしめたまひけれども輕忽しく世には傳達
 なかりけり。此大士自筆の三十番神の神號は今駿州沼津妙海寺に傳來し。又神像の畫軸は
 甲州休息立正寺の寶藏に現在せり誠や權衡をもつて物の輕重を定む。人これを諍ふべし
 や。墨細をうつて其曲直をたいたす。世にこれを挑者あらんや。唐に天台我が朝に傳教此兩
 大師ひとたび出世ありしより。經論の輕重。諸宗の曲直たちまちにあらはれ古往今來。誰
 か異議を述る者あらん。されば蓮長師は十年餘りの春秋をこの叡山に送り給ひ。今年建長
 四年寅の冬。傳教大師の御廟に報恩の香花をさゝげ。山王權現に正法守護の神德を謝し奉
 り。數年三塔に骨肉の交りをなしたる學友に残りなく暇を告給ふに。尊海師は取譯名殘を
 惜み。素絹に縫べき料なりとて。加賀絹一匹に別離の涙をそゝぎ馬のはなむけにぞ成給ひ
 けるこれより。蓮長師は京都に出て年頃日來淺からざりし淨本がもとに音信歸國の事を告
 たまひしに夫婦は驚き餘日もあらぬ冬空の雪催なすきのふけふ。御出家の御身にはいづく

も假の宿なるを何いそぎ給ふ事かはと。其誠實にとめられ。振分がたき旅の袖。今年はこゝに新玉の春をむかへて。尙寒くさゆる日影にうち立たまふ。浄本夫婦はどいめかね。美濃上品の袷衣。綿の帽子に襷子手巾。城殿の未廣取そろへ未消殘る雪路に。情も厚き温草鞋こゝろづくしの餞別を受たさめつゝ暇を告。心いそぐは法の爲。世に鍛たる鎮石心。本國安房に立歸り。身命を三寶に奉り。此法華經を弘通せんと。今日九重にさく花の。帝都をあとに見なしつゝ。霞ととも打立て。吾妻をさして下り給ひける。こゝに伊勢天照皇太神とさこへしは。日本開闢天照します御神の宗廟にして。人皇の始め神武天皇より五百三十餘年の間は。禁庭の内天子の御座近く崇め祀りたまひしかど。十代崇神天皇の六年。神と同座なるを恐れみ給ひ。始て御祠を和州笠縫の里にいとなみ。内裏にいませし神跡を。こゝに移し祀り。皇女豊鋤入姫尊をもつて神に事しめたまふ。後大和媛尊これにかはりて神廟に事ふ。それより神勅に任せて。祠を遷し改めたること十四次。垂仁天皇二十六年。勢州渡會郡。五十鈴川の水源地。鎮座なるべきよし。神託に依て神殿を造營す。今の伊勢の宗廟これなり。遣長師は道を伊勢にもとめ。間の山淨明寺といふは。天台宗に

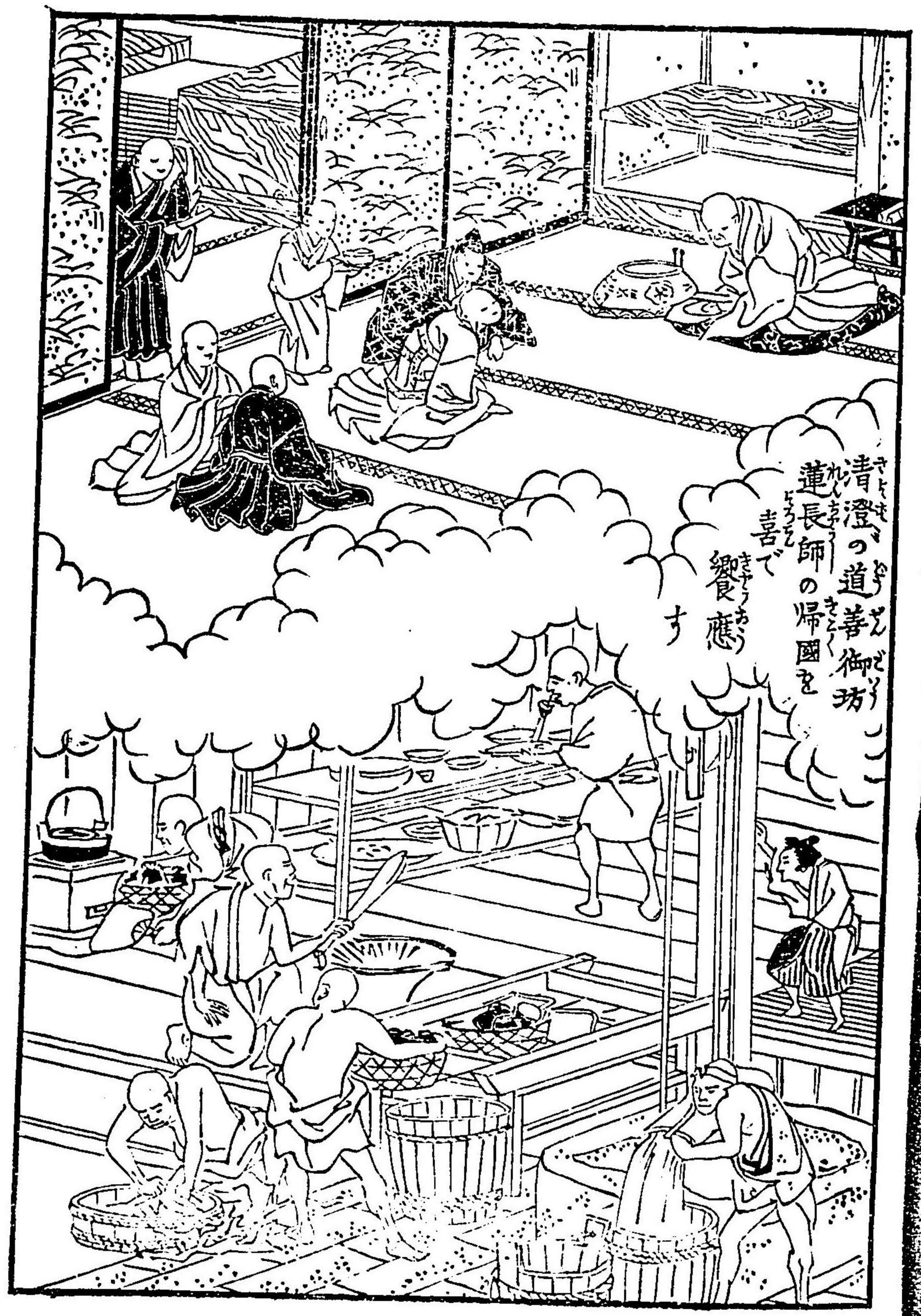
て。此寺の住僧は叡山にての知己なりければ。こゝにやどりて旅の装を解。神廟に詣り給ふに。神路山春喚子鳥よびつれて。吹神風ものどかなる。みもすそ川の水溜み。移る八千代の若翠。杉のむら立森々。神さびいませす廣前にぬかつきて。神拜終り。御經取出いとも靜に談澄し法施に時をうつし給ふ。四邊しづけき神殿の扉を隔て鈴の音いともかすけく皇々とひびきつゝ。神にかけし神鏡より颯と音して輝く光明樹々の枝葉も神垣も同じ色なる紫磨金色内外へだてぬ八百萬神も納受と見ゆにけり師は此奇瑞をかしくみつ。神前近くすゝみより。傳さく天照皇太神は本地久成の釋尊にて。迹を東海秋津洲に垂給ひ。衆生の利益百萬餘載。正像二千の其間は法華迹門をもつて法糧として。威光精力を増たまひ今末法第五の濁世に當り。諸經の利益盡滅たり。さわれば皇太神も無明濁惡の世に堪たまはず。此迹土を捨て本覺の妙土に歸り給ふらん。此事御經文に於て。蓮長疾よりこれを知れり。我數ならぬ身なれども佛勅にまかせ。法華本門を此神洲に弘通して。末法當來の闍もてらさんとす神慮いかにとありければ大地六變に震動せり。これ此御經末法に流布すべき。地動瑞とぞ知られける。これより雲時淨明寺にとりまりて。日にく神廟に詣りて法樂の讀

經いと尊く聞ゆる時に又妙見大菩薩の示現も有て今に其地に妙見町の名を残す皆これ正法の不思議とぞ思はれける

間の山淨明寺に。大士こゝに參籠の時手づから彫刻し給ひしとて。一遍首題の本尊。その下に蓮長六年甲寅四月十六日日蓮敬白と十五字を石面に彫附たり。案ずるに宗官建立の翌年鎌倉松葉が谷に在して。天照大神法樂の爲書認給ひしを後の人石に彫てこゝに建しものと思はる。諸傳の説。又冥應論等その理當らず

神風や伊勢の社の感應奇瑞。心にかけてし注連繩。日も稍永き春霞翅はやめてゆく鶉雁は古郷いそぐ旅の友日敷かさねて房國の彌生の空も十歳經。歸りて見ればいとけなき稚遊びに我植し。門の柳もやゝ老て茂るを宿の目當に。蓮長唯今歸國せりと。さゝりて次郎は歡びつ母梅菊は取分て轉が如く走り出。草鞋とかし洗足すゝめ。それかれと旅の疲れをいたはりて。積る話は四方山に今を春部と萌出る草葉の敷も及びなき其喜ひは知られけり父の次郎は心づけ何時くまでもこの宿にとりまほしう思へとも道御坊もさいつ頃より。蓮長の安否は聞はべらすやと。厥を幾度か所化僧や。童兒をたこして問たまひき。いと

ぎ御師に見ゆあげ。厚き情を報てよと。いそがせば。遠長師も意をわて。やがて清澄に登
 給ひ。諸佛坊にれどなひ給ひたるに。師の道善は雀躍し席にも居らず嬉しみて。年月なが
 き學問に。その憔悴もみぬざるはとて。喜てうち笑ひ。又修行にも程のわれ老たる我に久
 しく物を思はせたるは。腹たゞしとて呵もしつ。尙時しらぬ袖の露。しばしはれまはなか
 りけり。遠長師は慇懃に。つゝしんで在すのみ事を委細に述べたまはず。もしその話の佛法
 の事に移らんとすれば。色を和げ詞を軽くし。叡山の峯は高かりき。高野山は寒かりきと
 。他の話に紛らして。更に佛法の事にわたり給はず。師の御坊も亦慈愛深く。さのみは
 修行の事も問給はず。相互に心慰む物語に時を移し給ひける。又同寮の法兄弟。圓密。淨
 顯。義淨等始として。れさなき離僧。兒達まで。かはるく無事を祝しぬ。又師の坊は人
 を馳せ。次郎夫婦に悦をのべ給へば。次郎重忠も使どもに山に登り。道善御坊に式禮し
 。淺からぬ慈恩を謝しはべるに。道善は手の舞。足の踏をしらず。庫裏の司を召換で。道
 長はじめ其が父も。亦院内の僧どもへも。些の饗應にわれかれと。指揮あるに。頓て折敷
 の木椀に。豆腐の羹。黒煮の蕨。そへ持出る釜鍋は。備後の酒の味に似ぬ。其片白は許し



清澄の道善御坊
 蓮長師の帰國を
 喜んで
 饗應す

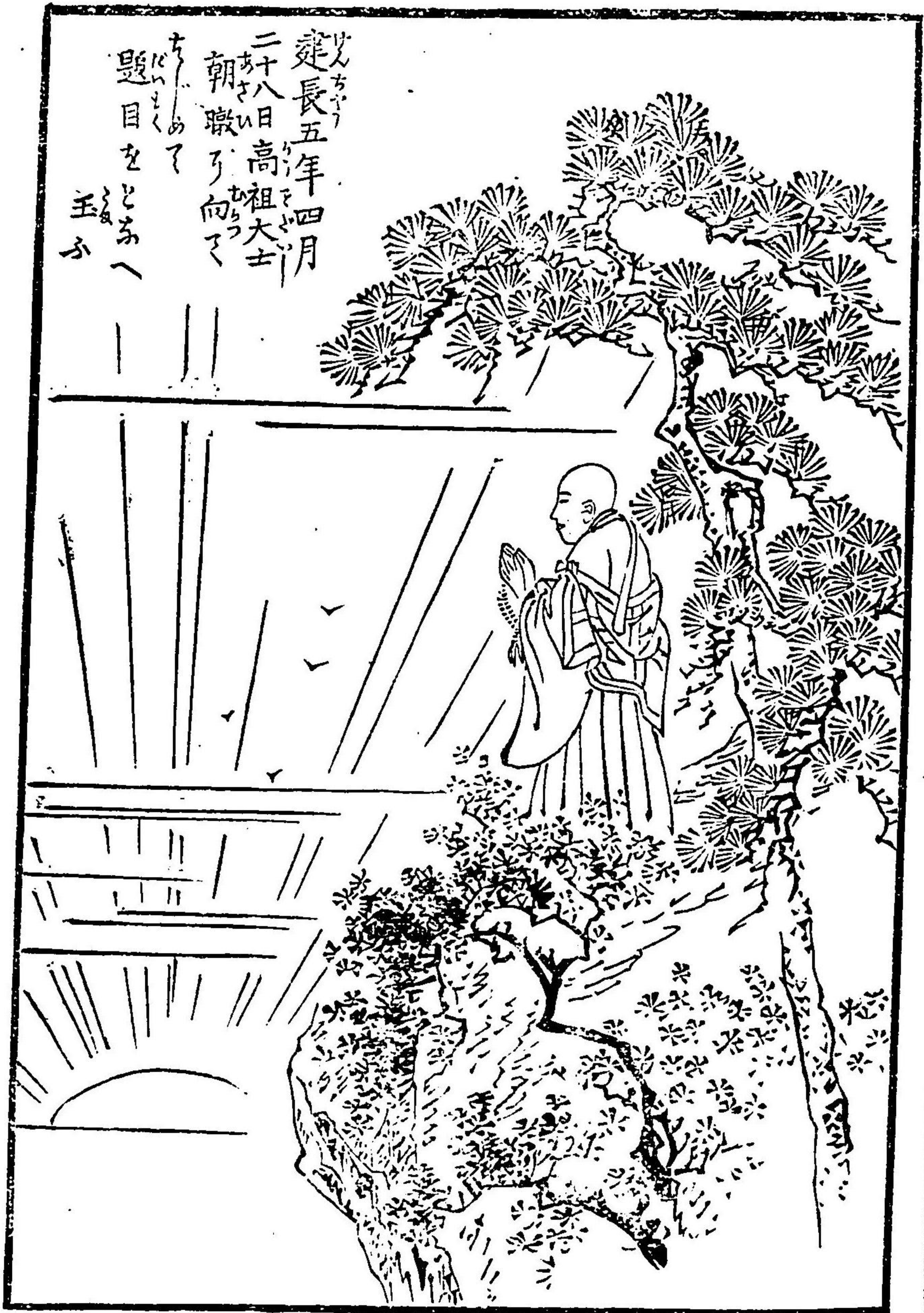
ても。肉はゆるさぬ差酢の和布。雁裘の椎茸とりすゝめ。過飲一座の賑はしく。飯後の菓子
 子の巻餅に。梅栗をさへ添さしつ。最十分のもてなしに。春の日影もたそがれたれば。貫
 名次郎は道善に。厚き造作の喜びをのべ。又蓮長師を見かへりて。明は暇を費ふて來ませ
 やと。いひさして。足下暗き夕黒を。送る故僕の松火に。さし照させて高低と。麓の方に
 歸けり。蓮長師は翌の朝。御坊に言て山を下り。小滝にいたり給ひしに。慈父重忠櫻葉よ
 く。師を御近く招きよせ。昨師の御坊の我にひそかに宣やう。此山に僧多く。我法弟あま
 た有なれど。我山を護るべきは。此蓮長に限るか。我も六十を超たれば。程なく寺を彼
 にゆづり。心安かる身とならば。我身の僥倖。御身達も老の特怙にあらずやと語たまふと
 聞につけ。これまで長き旅住居。一塵不住の癖つきて又鎌倉に往もやす。京に上やしぬ
 らんと。御師も我も心にかゝり侍かし。これより心れちつけて。彼清澄の主となり。人も
 仰がは其身の立身。登庸のみか。我々夫婦も世の人に。善兒持たりと羨まれ。此世後の世
 安かるべし。さは思さずやとありけるにぞ。蓮長師は黙頭し。しばし思案に沈みたまひける
 か。武蔵館にあらねども。さすがに懸てねもふにも。言で果べき事ならねば。思ひ切て宣

やうわれこの歲月釋尊の御經を。幾度か拜み奉りしに。當時日本に弘まりし念佛眞言禪律
 の諸宗の祖師に。誤多し。その誤を傳へもて。其とも知らぬ八宗九宗塔堂沙門のありさま
 は。佛法繁昌と見ゆれども。更にかひなき脱虚の惑ごに佛の入滅より。正像二千の時く
 れて今は末法第五の闇。其を照すべき御經は。法華經に限るなる佛の教を身に受て。妙法
 の蓮華を一天に咲せんす。大願すでに決定せり。たゞひ八宗九宗にあだまるゝとも。其を
 ばさらに念とせず。強盛に説のべて。世を救ふこそ末法の。本因妙の立行ぞと。御經には
 見ぬはべりぬと。詞しづかに語りたまへば。母梅菊は法衣の袖に取纏。厥をあしゝとはい
 はねども道善御坊の深情と慈父の今の詞どかれこれを。思合せて餘の事に。心移して給は
 るなど。女の胸は山の井の。淺きものから濁いで。夫婿次郎を勧つゝ。ともにその弘通の
 志を障給ふ。あさましくとも蓮長師は恭しく手を支へ。元より出家と成給ひしは。衣食
 に富で位高く。榮耀を求むる爲にはあらじ父母の御手を離て廿一年。千辛萬苦も法の爲世
 の爲にせし學問修行。その効積で御經の。大小權實顯密の。諸宗の義理を直下に見なし。
 身をも惜ます末法の衆生を救ひ得せんと。身にも不應大願も佛の教是非なしと心定めて

あるものを。今父母の障たまふは。これ唯事とも思はれず。むかし唐の天台大師。法華圓妙の觀念を凝して在ければ父母左右の膝により涙ながらに其行法を妨給ひし事あり。これを御經には惡鬼入其身と説給ひ運長いとしと思召。御兩親の御心に。惡鬼夜叉のつけ入て慈悲の詞に劍をかくし今正法を妨なすと覺ゆるぞ。熟思しかへられよ。受がたき人界に生をうけ値がたき佛敎に遇奉り。もし今生を默止なばいつの世にか菩提を得てん生々世々無益に捨たる身の骨は積ば山とも成ぬべし。其中に佛法の御爲に乗たる骨は指一本だにありとも覺ゆず幾生が間。恩愛別離にそよきたる涙は。大海の水より多からん。もし其うちに佛法の御爲に灑し涙一滴もあるならば。かゝる凡夫と生はせじ。今度優曇華の時を得て身を傷ひ命を捨て。佛法を修行し。御兩親の御菩提をたすけ。一切衆生を救はんこそ。出家となりし面目ならんと。稚幼ときより何ひとつ。鬼の毛の尖の露はども。親にそむかぬ連長が。本懷大事を身に受て。篤く教導なし給ひしにぞ。慈父次郎も稍顔面のいろ解て。善らぬ事を爲見とて。それも定まる因縁なるを。まして廣る大千世界人も渡さぬ蒼海に。法の御船と身をなして。多くの人を救べき。平等慈悲の心をば。いかでといめん止なと妻梅

菊をも言諭し給ふにぞ。蓮長師は兩親をふし拜み。その御詞こそ廣宣流布の大願も。満足すべき初なりと。御歡喜の色見ゆて。清澄に歸山なし給ひけり今年の春も稍暮て。卯津木花さく夏山の茂る樹間の清澄に。こゝろ澄して思すやう。今歳正しく如來の滅後二千二百一年に相當る。天は一を以て清く。地は一を得て寧く。王公は一を建て天下を治たまふ。況我が大覺世尊。一佛乘を以て一大事因縁と説。一閻浮提の一切衆生の爲に一成道を示したまふ。一の數誠にもつて塔中別付に契當せり。此時を過すべからずと卯月末の二日より一室に籠り。香を焚て。大禪定に入給ひ。時に御齡三十二歳建長五年四月廿八日。東雲の空はがらかに。旭日東天にかゝりやき登り給ふ時。安祥に三昧より起て。念珠を御堂に懸ながら。旭日に向ひ高聲に南無妙法蓮華經と十遍ばかり唱へさせ給ひけり。其山々の梢吹。夜半の嵐の音絶て。今朝は高嶺に萬代と雅一聲の松の音。これぞ二千二百一年の昔。大聖世尊より上行菩薩に附屬ありし。一呼百諾の金言。末法相應。本因下種の題目とはいふなりの賢くも此本化大慈の日輪。今東海にさし登り平等大慈の光明。大千界を照し。盡未來際の間を除たまふ始にして誠に法運開關の時節ぞと思はれける。此日兼て人を馳て觸たり

けるは。午の刻頃より薩の男女。檀越の人々。別て常郡の地頭。東條左衛門景信も。若侍に下僕召連。忍びやかに登山す。南面の本堂に雖も得立ね参詣は。今日しも當山の蓮長坊。數々京學の功積で。歸來て此山に始て法を説なれば。いかなる尊き事ありや。都學びの法門を。開ましものどかしましく。波羅婆梨多耶の眞言と南無阿陀々の念佛に。しばしば鳴も止ざりけり。蓮長師は出堂の太鼓をうたせ。徐々と高座にのほり。焼香散華に心を澄せ。四弘誓願を唱つ。法華經の紐を解。第六の巻を讀あげたまひ。顔色を和氣。梵音しづかに宣やう。我年來一切經論に亘。廣く諸宗を學びたり。入宗十宗見ざる事なく。聞ざる事なし。大集月藏經の第九の巻を見るに。如來入滅より五百年の間をば解脫の時とて。單に成佛する人多し。又次の五百年をば禪定の時とて。坐禪工夫を凝して得道する者多し。これまでを正法千年といふ。又次の五百年を讀誦の時とて。能御經を讀修行して得益を蒙る。又次の五百年は造塔の時とて。堂塔伽藍を造りもて。利益を得べき時節なり。これを像法の千年といふ。此二千年過終て。後五百年を白法沒の時と名づけ。如來一代の聖蹟。利益一切に盡果て。一切衆生成佛の道たねたり。これ末法萬年の始なり。其うへ正像



建長五年四月
二十八日高祖大士
朝暎り向て
題目をどあへ
玉ふ

二千年の間は。本已有善とて佛に成べき種を。兼て釋尊より植置れたる衆生なり。今末法に入て二百年。當世の衆生は本未有善とて。本より耕さず耘らず。種を植ざる赤凡夫也。抑佛の種といふは。妙法蓮華經の五字なり。此事經文に明白なるぞよ。然るを淨土宗の法然は。小乘下劣の念佛を弘むるとて。撰擇集といふ書を筆て。其法華經を捨よ閉よと罵り。禪宗は教外別傳とて法華經を蔑どり。眞言は天に二の日なく。國に二人の王なきものを。大日如來を本佛と立て釋尊を落し。法華は大日の履取にも足らずと謗り。律宗は二百五十戒三百戒を算へ持て。大乘法華の經王に隨ず。かゝる諸宗の邪流をば。法華經第二譬喩品に佛説て宣はし。佛の種を斷す者なり。其人命終て無間地獄に落て。無量劫にもうかぶ時なかるべしと見へたるぞ。耳あり眼わらんものは。これを見聞て邪正を辨へよ。念佛は無間に墮る惡法。禪宗は天魔の眷屬。眞言は國を亡す邪法。律宗は國賊なる事敢て私の詞にあらず。皆御經文にて見定たり。諸宗無得道墮地獄の根元。法華獨一の利益さらに疑なし。時知鳥の不如歸。今は雲井に聲高し。山田の早苗植後れ。實のりの秋に後悔すなり。時は今法華經流布の時。我はこれ如來の使なるはと。弓手に御經たかく捧げ。妻手に高座

を打て説示たまふにぞ。一會俄にかしましくあな勿寐なし。彌陀を謗り。たのが宗智の眞言まで。願にまかせて言罵る狂僧に。あたら耳を穢したりと。口々に惡口し。或は怒り又は笑ひ。珠數を輪組てさす腕を。屈まる腰に又添て。最婆來よと牛は牛。馬は馬連いく群か。堂を蹴立て歸りゆく。これ本化の弘通。末法下種の始なり。就中間智坊とて此山に年を拾ひし老和尚。誰啞たる聲怒らし。我も法華經を信じもて。讀誦する事五十年。又三年此方は。一字三禮に書寫をもしたれ。何を痴迷て。さばかりに法華經を信じたりとて。諸宗を惡口はべるぞや。たれかある其狂者の遺長を。疾挽出せといさまきて。老のかひなき拳を振り。疎に残る齒を咬で。いとかしましく叫喚けり。地頭の左衛門景信は。諸佛坊に突ど入て。道善御坊よあの爲跡を見そなはしたるか。他の事は角もあれ。御師の山といひ。此地頭景信に。緩急無禮の遺長奴。獅子の高座を引えろし。切て捨るは易けれと。無垢清淨の此山の。靈地を穢すをれそれ見て。其場は免し置たれと。かゝる不法の痴漢を。其まゝ置ば地頭の不念。寺門の恥辱。我請受て連戻らん。許たまへと有ければ。道善坊は恐懼聲。公の怒も道理ながら。狂氣の遺長をいかにせん。其儘この坊に預たまひね。能言懲

して正氣にかへらば。今日の龜忽は我より詫んと。ひたすらに宥られたる鬼棘。さしもの地頭も詮かたなく。頬ふくらしして立山ぬ。道善坊はひたと呆れ。運長師を坊に招き。性根の強きその耳に老の廻らぬ舌をもて。いふも無益の事ながら。十二の夏より手に育て。見處多き法弟なりと。末頼母しき年月も。却て後のわだとなり。此寺をさへ譲べき心構も水の泡消も入たき我が心東條左衛門景信が刀の錆になれしかしと。此春秋を願ひはせじ。今日心の心をひるがへし。改め難きとならば。此山には置がたしいづくへなりともみをかへし。願ふは東條景信が眼に當らぬやう心をつけよ。此教訓の身にしみて。先非後悔せしうへは。疾我坊にかへりこよと幼稚者を懲すがごとく窘めしつ叱もしつ夕日さし入遣戸口。送るよしなき師の思を。後に見なして往空に。寝林もどめて立騒ぐ。雀色時敷蔭の。下路さして降給へば。誰ともわかぬ二人連。後を慕ふて退來にぞ。近くなるまゝ斜視れば。これ別人ならず法兄の淨顯義淨の二人にぞありける。ともに師にうち向。今庫裡のしもべの語をさくに。地頭の怒尚解す。山を下らば待伏て切て棄んと半途の辻堂に待とかさく。此道をくだり玉はいいと危し。さすれば小湊の親のいへには猶往がたし。我々がよき處を思



高祖大士
清澄の堂
諸宗の邪非
を説破り
玉ふ

つきたり。此方へ來り給ひねと後と前とに淨顯義淨師をいたはりて祖徑の。けはしき問道
 うちめぐり。その夜の闇にまぎれつゝ。當郡西條の郷。華房の蓮華寺といふ眞言密寺に身
 をかくし。其難をのがれたまふ。不測や此經を末法に弘通せば。刀杖をもて惡人に追れ。
 又常住の寺を擲出されんと。御經に説れたる。刀杖遠離の法難は。今日こゝに現れたり。
 さはあれ又諸天善神。晝夜に守護あるべきよし五の卷の御經に違はず。今宵危き劍難を。
 兩人に救はれたるも。此將奇特の經力なり

華房の蓮華寺。今に眞言宗にて現在す。又淨顯義淨の二人は。後年大士の化道に受戒
 はしたれども。其頃大山の住職にて。綱位輕からざるをもつて。名利につながられて。
 其宗門を出ず。然れども内心深く其宗義を信じ淨顯は日尊義淨は日在と呼。弘安元年
 大士筆を染て本尊を書し。これを授與ありしこと祖書に見たり

かくて華房蓮華寺の住僧。青蓮坊の方に在しけるが此華房の里に近頃阿彌陀堂を建立す。
 邊鄙の地なれば開堂供養の導師に立べき人なし幸ひ遠長御坊は南都高野に學びたる。希代
 の學者なるよし言傳ふ此堂の供養をつとめ。村の男女に念佛を勧め給はれど。槍も匂ふ新

造の御堂せばしと押合つ。師の説法を待處に。香染の袈裟揺揚つゝ講席にすゝみ御經開て
 宣やう。釋尊一代の説法。大に分て二となす。華嚴。阿含。方等。般若の四十餘年の經々
 は權經とて時を待間の權の方便。又後八年の法華經こそ。如來出世の一大事。これを眞實
 經と名付なり。其は私の義にあらず。四十二年の説法終り。さて佛の宣やう。これまで
 種々に。説法せしは皆方便にして未だ眞實を顯さずと。さしきつて斷り給ひたる。御經は
 これなりけりと。無量義經。説法品を取りいで。未顯眞實とある其文を。さし示し其上彌
 陀は西方十萬億土。他方の佛に在すなる。此土有縁の釋迦世尊。法華經第二の卷に今此三
 界は皆我が有なり。其中の衆生は悉く我子なりとあるものを我が親を捨て他人を尊むを
 道といふべきか。さればこそ念佛等の御經はあさましくも四十二年のうち方等部の經なれ
 ば。名有て實なき極樂往生頼むかひなき阿彌陀佛。その理も譯ずして。念佛開祖の法然御
 坊。煙のやうなる阿彌陀を捉へ。本佛釋迦をふり捨て。人を惑す地獄の罪業。たとへば
 。家に飼れし狗子の。下男奴僕に尾を揺て。主人を見ては却て吼る。賤きに狎。尊を思む
 狗の眞似する諸宗の元祖この事を天台大師は狗作務に狎たりと釋し給ひしぞと説かゝるを

○群衆の中より聲かけて。佛を誘ふ狂氣の其賣僧を引出せ。打よ擲と伏鉢の鐘木を杖に立願ぐ。蓮長師は斯こそあらんと高座を退き蓮華寺へ立戻りたまへども。今は此寺へも入奉らず。さらばこれより鎌倉に立超て。彼の地に法を弘めんと。心決して小湊にいたり両親にいとまを告んと音信給ふに。前日の不興には似もつかず。次郎夫婦は門口まで出迎。上座に押居。鎌倉に弘通あるべき其志をも聞終り。さて宣やう。前日の細々と示されし教訓に我を折て。能く思めぐらせば。語るは今が初若菜。とし若き時我々夫婦。ある夜の夢に云々の。不測の事を見てしより。御身を懷妊なしつるも思へば遠き夢話。それにつけても今日此頃諸宗の祖師も及びなき。道に心をかけ橋の。かけて弘むる御經なるを。老前近き身を忘れ。難波の浦のよしあしも。我が子と思ふ煩惱心。今生後生の罪ふかしと母もろどもに觀念し。けふより有無の乱髮。心に刺て菩提に入。御身が弘むる妙法の妙の一字は未來まで。我が子に受し記念ぞと此を頭にいたゞきて。蓮華に捧日輪の夢の奇瑞の二を取我は妙日其母は妙蓮と法名を定めんと。持佛の前に誓ひしぞ。御身が鎌倉にねもひきて。後五百歳の御代の春。法運めでたく開く日を。指屈かぞへて待ぞかしと涙ながらに宣にぞ

○師も諸どもに露時雨。うれし涙に袖ぬれて。今日御両親の得脱は衆生教化の始なり。又御夢の吉瑞とて。御名を妙日妙蓮と聞うへからは。慈父の日の字と悲母の蓮の字と。此二字をもて我が名とし今日より日蓮と改名せん。明なること日に如ものあらんや。清きこと蓮華に勝ものやある。されば此二字は取も直さず父母なり。これより鎌倉に立超て。尊無過上の立行を開き。佛勅の如く此法華經三千界に流布するならば我が力用にあらずして。其は父母の功德なりと。三諦一身三人の。親子は淨き筒井筒。慮橋の香をこめて。けふ汲初る法の水。日蓮大士は懷中より御經を取出て今身より佛身に至まで能持兩無妙法蓮華經と。慈父妙日悲母妙蓮の御願に御經をしめて授たまふ。これ我が宗門に在いて本門受戒の始なり。父母御喜にたへ給はず。昨日は我が子。今日よりは未來永劫惡業を救ひ給はる大導師。布施の品々それかれと取揃もて供養しつ。門外に見送る老夫婦。これまで灑し愛別の。身を知雨にふりかへて。今は嬉しき歡喜の涙。心直なる一筋の。門田の畦を高聲に。御題目を唱へつゝ鎌倉として發足なし給ひけり。さても日蓮大士は。五月の中旬船の便を求つゝ相摸の國に渡海せん。名古の海邊に趣き給ひしに。此程梅雨を吹送るその北

風に浪高く。往來の船も道絶て因果給ふ所に平郡泉澤と云里に權の頭太郎といへる人有けり。もと伊勢の國の由緒ある人なるが。久しく此地に住てありしが不圖大士に相見し一樹の蔭の旅の宿その弟次郎三郎どもに大士を敬つ。其化導を蒙るに思はず。日敷を重てし大士は此頃渡海なす風の日和を待わびて。後の山に攀渉り。海上はるかにみはたし八大龍王護念の爲。霎時御經よみ揚給ひしに。龍神納受やましくけんこれより空晴風穩になりける。此地の里人その奇特を言傳へ。地名を南無妙法谷と稱す。今は略して南無谷とよびなせり泉澤權の太夫兄弟その母の爲に。法華堂をいとなむ。弘安二年日念聖人をつかはして開堂して寺となし。名付て成就山妙福寺といふ。妙福は其母の法名にして。大士自筆の本尊を授與なし給へり。斯はこれより廿六年の後の事なり。其讀經ありし古跡は。法華塚とて今に現存せり

南無谷妙福寺の開基日念師は松本坊と號し。もと天台博學の僧なり。宿縁有て眞間の日頂聖人に値て改宗し。又大士を拜して。別頭の秘法を受。命に依て此寺を草創し。大士を開山と仰ぎ。其身は二世に居又日頂聖人の舊恩を忘れず。寺をば眞間の末寺と

なせり

さて日蓮大士は。風風海平にして。船出をいとむ湊口。こゝに便船を求めつゝ。そよ吹南風に眞帆片帆。取表楫に聲かはし。船路やすらに相摸なる三浦郡深田の浦。米が濱に着船し給ひける此浦の渚は遠淺くて船を岸には寄がたし。砂にさゝはる舩に大士は法衣の裾を掲持。已に下立たまふを見て。流藻拾ふ海人が走より。我渡しまらせん御裾ぬらし給ふなどて大士を背に負奉り。片山岸の岩根まで。うつ敷波の荒磯を渡しまらせしに大士その志を喜つ。見かへりたまふに其男の踵に血しはの流るゝを驚きて。いかに爲しやと問給へば。榮螺の殻に踏つけて。其角に踵を傷はべるはと應ければ。大士憐みたまひ。持る薬もあらざれば。是好良薬の御經取出夏の日影の潮照。暑をしのぐ濱庇。巖の狭間に立よりて。しばし御經讀誦なし西をさしてぞ立去たまひける。不測やこれより此磯に生る榮螺の角折て。今の世までも米が濱角なし榮螺の奇特をば。此地を尋て知ぬべし。後年こゝに寺を建。その靈蹟をさし示す。猿海山龍本寺とぞ聞へける。大士はこれより山路にかゝり。心無の里より守殿明神を遙拜し。多古江川を渡りたまふ。こゝは三位維盛の御子。六

代御前の討れ給ひし處にて流るる川を最期川とよび傳へ。其御墓も青葉がくれに見へ渡り誠一朝の花と時めさし平家一門のなれの果いと哀れに思し出。御題目を唱へつゝ様に暗き木下闊ゆくて嶮しき名越坂洞なす山の切通し。水無月ちかき此頃の暑き日影にたへたまはず。茂る木蔭に一掬の水もがなど。求給ひしにぞ。岩の間にとくくと。音して清水の涌出たり。大士喜で御手に結び。如以甘露とれしいたいさ咽をうるはしたまひける。其味甘くして且清冷に。類ひ稀なる水なりとて其頃鎌倉五名水の第一と稱し。今に名越の隠劍に残り。いかなる早魃にも。涸ことなく日蓮水と尊稱す。大士鎌倉に入て。世の軀相を見聞なしたまふに。思へば此地に遊學せしもはや十二年の昔。去る寛元二年執權北條經時。鎌倉四代の將軍頼經公を京都に追登せ。その御子六歳にならせ給ふ頼嗣を將軍となし奉り。此幼君の補佐を名とし。北條一家我意の振舞多かりければ前將軍頼經公京都に在てこれを惡み。北條を討亡すべき御謀叛を企て給ひける。此事はやく露顯に及びければ。今の將軍頼嗣公。漸く御齡十四歳なるを。謀叛人の子なりとて。深く惡奉り相模守時頼。陸奥守重時の兩人より。京都に奏聞し。頼嗣公を退け後醍醐天皇第一の皇子。宗尊親王とて今

年十一歳なるを關東に迎へ征夷大將軍に任じさらに世の中も事あらたまりて見ぬにける。日蓮大士は鎌倉大明の南。名越の東の山際にいさゝかなる餘地ありしを。こゝに土を均し地を垣め柵木の柱ふしげく。竹搔わたして椽とし。尾花苜蓿我庵も七堂伽藍にいやまさる。久遠本果の古佛場。大士はこゝに日を送り。經文讀誦の外さらに他事なく見ぬにける。大町米町材木座傘町名越この邊の人うはさして彼處に御經よみすす道徳不思議の僧ありとて。尊き事に話つたへけるとなん。大士は鎌倉府内の諸宗門北條一門歸依の僧。天下の有様世の姿まで。心をとめ猥に言を出したまはず。身を如法堅固にまもりつゝ雄氣を養ひ在すうち。社司大伴に紹介を求め鶴が岡の經藏に入給ふ。これは去る建暦元年十月十九日。寶朝將軍。永福寺にわいて供養ありし。宋本開元の目錄五千四十八卷の藏經なり。此等の事に秋暮て。きのふの露に置かへる。大路の霜の村消に。履音しづかにねどづる者あり大士誰そといらへて對面あるに。三十あまりの氣高き法師。容貌柔和に脛膝を折。大士を三禮し奉り。我は叡山に修學なす。成辨といふ未熟の僧にはべるが。久しく彼の山に在學しこれまで年頃學びたる天台傳教。兩大師の書類をもつて。三塔の學者に論談する

に法門さらに相合す。尚弘く其義理を尋ねしに。慈覺大師は傳教の法弟にありながら。還て其法流を亂したる法敵なりと見定て。その不審を學頭に告しかば。其許は蓮長が弟子にはあらぬやと問れて。其は辨へず其蓮長とはいかなる人ぞと尋しかば。これは近き頃房州より來て此山に學問せしが。慈覺大師を佛敵法敵と罵るゆる其は傳教を知て未だ慈覺を知らぬなりと。言諭しても心解ず。そのまゝ山を退さぬ御坊の問るゝ處能其蓮長に似たるはと聞も嬉しくその人は何國にありやと尋ねしに。無動寺の尊海といへる僧。その席にありて。蓮長こそ國にかへり。近き頃は名を日蓮と改めて。鎌倉に見られたれど。風の便にさゝけるど。さし示されて嬉しくも。其師に値ば我が胸の月に隈なす雲霧も晴ばやはとて山を下り。音羽の瀑のれどにさく。其名はかりを知邊にて。漸くこゝに尋ね得しと。其真心の喜びは。いはねど色に見ぬにける大士はその始終聞終り。不測にも同道ふむ菩提の梯わらす教のなからずやと。此より御側に在て日々に疑難の條々を書もて。大士に問奉り。大士喜でこれを解釋。寢食を忘れて教化なし給ふに。成辨は坐に感涙拭ひあへず。幾日もあらず本化の宗流を識得て。晴し心のうれしさに本門の大戒を受。改て法弟となり給ふ。大士

も此鎌倉に入てかゝる學匠の法弟を得給ひし事。實に百萬の加勢を得たる心地して。其が父の名を祐昭と云よし聞召。其昭の字に我が一字をそへて。日昭とぞ召れける。これより水に薪に朝夕の炊さへまめやかに立舞て。大士に事へ給ひける一日大士御經半途に日昭を召れ。我弱年よりの志願こゝに満足し。上行所傳の妙法を四海に弘むなる。若此御經を經の如く弘るならば。三類の強敵とて當時の名僧智識第一に怒を發し。上に讒謔を搦へ。上も亦。其邪正その善惡を正さず度く島へも流しあるひは頸に及ぶべしと。今讀さしたる五の卷勸持品二十行の偽の文に見たり。御身我が弟子ながらも我よりひとつ齡たかし。今日本國中に充満たる念佛眞言禪の諸宗。この諸經中王の法華經の勅命に背き。方便下劣の分際を忘れ。法華の利益を奪はんとす。我是より忠勳を抽で。征伐に取かゝり其權門の諸宗を退治し一天四海みな妙法の民となさんとす。然はあれども敵は多勢我れは唯一人なり。身命を期とするとも。鷄子をもつて磐石にうち當るより猶危し若我討死をもなすならば。未法萬年の群類を誰かたすくる者あらん御身けふより心を決し。日蓮大敵と台戰を挑み。いかに成ゆく事ありとも。必ずこれを願見す信心有縁の味方を問め。つゝいて旗を

揚られよ。共に討死するも思。又惜からぬ身を存命て。再び家を興すこと。却て拔群の大
 忠なるを努々遺れ給ふなど。いと丁寧に宜へば。日昭師も涙に咽び。數ならぬ身も法の爲
 。難事を忍び御遺状には戻らじ。御心安かれとありければ大士は満足の色を顯し給ひ。日
 昭師も同音に勸持品をぞ讀上給ひける。此六老僧の第一位。大成辨阿闍梨。日昭聖人と
 て。大士常に辨殿と喚給ひしは此御坊にぞねはしける。抑此日昭聖人といふは。下總國
 葛飾郡平賀の郷に平賀祐昭といふ者の子なり其は福有にして田圃に富。郡郷に尊敬せられ
 輕からぬ郷民なり。兄弟三人にて姉は印東次部左衛門有國に嫁す。又一人の舍弟あり日昭
 師は承久三年をもつて生る。生質篤實にして。をさなきより禮義正しく。進退度になふ
 。殊に書籍を讀事を好で。僧に交り寺に遊ぶことを樂とす。十二歳の頃より靜なる事を愛
 し人に應對するを喜ばず父祐昭才智の人にて夙く其宿縁を察して十六歳の時出家せしむ。
 後年叡山に於て奇遇の因縁を牽。鎌倉に下て日蓮大士の上足となり。末代法華弘通の後
 と定られ。大士鎌倉府内を追出されし事二十餘度また伊豆に三年。佐渡に四年の流罪に處
 し。又龍の口死罪の大難かゝる大士の急難にも。兼ての約束。日昭師は些もこれを念とせ

す歸依の人々隨身の徒弟等。四散に落行べき味方の殘兵を圍め濱土の邊にかくれ住。大法
 將日蓮が法運遂に開くべき。時節をはかり給ひしは。これも亦六萬の副將軍。本化薩埵の
 再身とこそ思はれけれ

日昭聖人。鎌倉松葉が谷に來て。大士の法弟となりしは三十三の時にして大士より
 。齡ひとつ立超給ふ。年華といひ道學といひ智徳圓滿の法弟ゆゑ。後陣の任を命じ給
 ひしも又宜なり。我か宗運既に開け大士入滅の後鎌倉の濱土に歸り。師恩報謝の爲
 。心と喪に籠り。讀經禮讀十三年に及ぶ。こゝに比叡山の尊海。老屈して九十二歳日
 蓮大士宗門を弘め給ひしより。成辨も亦その弟子となり師匠の跡を繼て在すとき入の
 昔なつかしく正安二年の春。書通を鎌倉に贈り。本門の大戒を受ざるを悔たまふ文牒
 を見て。日昭聖人も此時七十九歳こしかたの空懸しくや思しけん。二人の弟子に扶け
 られ遙々京都に登給ひければ尊海師はれもひがけなき今生の對面を喜びひかし日蓮聖
 人いまた蓮長といひし頃。鎌倉の旅の合に初て知己となり我もひかしは男山。感なる
 身は張つよく。聖人を此比叡山に連來しも今指折算れば。六十餘年の昔なりと。老の

險に涙をうかめ。在し世の物語にとりませて。本化別頭の法門を談じ。受戒終て鎌倉へ歸たまひけり。日昭聖人五十餘年の間。法を護て在したる。由井の濱土の齋居の草庵。この程越後信濃兩國の大守風間信濃守信昭。大檀那と成て一寺を造立し。弘演山妙法華寺と名つけ。法弟日祐をもつて住持とす時に元亨三年三月廿六日。日昭聖人世壽百三歳にして示寂なし給ふ。大士入滅より四十三年の後なり。此濱土の靈地も程なく正慶建武の亂に戰場となり。妙法華寺も兵火の爲に焼失なはれ。日祐聖人は寶物わづかに襟にかけて。池上に逃去。漸く豆州雲金村に東金山妙本寺を建て。いさゝか古蹟をとむ。其後法孫十三代日包聖人。文祿年中同國山方郡賀殿村に鎌倉濱土妙法華寺の號をもつて。一寺を建立す。元和中第十六代日亮聖人。新に今の伊豆玉澤を開基し昔の寺號に倣て妙法華寺と稱し。山號は經王山と改む。第二十一代一乘院日養聖人といふは。俗姓陸山氏にして。紀府水府兩館の御母堂養珠院殿。阿萬の方の姪なり。此ゆゑをもて。常山これより美觀を盡し。諸堂魏々として。一方の大本山とはなれり。實にや開山日昭大聖人。のむかし由井の濱土に竹を編。流よる藻汐草をかき聚め。

家根と茸つゝ雨露を凌ぎわびてし五十年。艱難辛苦の護法の功德。後年こゝに顯はれけり。別て尊く思はれけり。

愚者は愚を知らず。しらざるゆゑにこれを愚といふ。賢明哉。本化の肉身。日蓮大士。去る建長五年この鎌倉に來り。今年甲寅の四月廿八日。名越松葉が谷の御草庵に天照太神。三十番神を勧請し奉り御筆を取て南無妙法蓮華經の七字と大文字に御認有て。これを法樂に捧給ひ。名越の往還間近なる處に高座を儲。説法利生の華を雨せ給ふに去年よりこゝかしこに噂の聞わたる事なれば米町辻町の邊より。遠近に語傳へ言繼て。聽聞する者いと多し。高祖大士は一代の御經に。權教あり實教あり。方便あり眞實あり。又正法あり邪法ある事を説諭し。日出ぬれば星かくれ末法の今に至ては法華經の外。諸經に利益はあらぬよし慇懃にさし示給ふこと。幼稚に乳房を與ふる母の如し。一日いかめしく太刀を佩たるひどりの武士。人目を憚る編笠深く。御菴室の外表に佇立。始終聽聞し居たりけるが。説法果て笠脱棄聖人にいさゝか不審あり。如來從來偽なし。いつはりなきゆゑ佛といふ。念佛眞言禪律の經々を方便無得道と説給ふは。その所謂なきに似たりとありければ。大士

笑を舍給ひ。さればとよ塔を建んには先その足代を組。これを方便といふ。大塔全く成就せば。足代を取捨るなりこれを眞實といふ。大聖世尊法華經の大寶塔を造立せん爲に四十餘年の間。禪念佛の諸經の足代を説たまふ。今これを切棄るを正直捨方便と。御經に見ゆるはと説示し給へば。彼の武士しばし默然としてありけるが。立て三禮し奉り此程出勤のかへるさに度々聖人の御演説をさゝまらせ何となく御徳の慕はしく。今日しも見參に入るうれしさよ。我は北條の一門江馬遠江守の近臣にて。四條金吾頼基といふ者なるが。近き頃建長寺の道隆禪師に參禪し專に坐禪工夫を凝しはべるうち。聖人の説法に心傾さふかく隨喜し奉るにこそと。疑ひある條々を問まらせ。逸々その理に感伏し。忽ち邪を捨て正法に歸したりけり。これを江馬殿の家臣にて。府内に名高く武勇の勝れたるのみならず。文學ごとに譽たかく。醫師の術にさへ達し。篤實の聞ある雄士なるが。これより深く大士を尊信し。勤仕の暇には。日夜御側に在て法をさゝ。妻も亦ともに歸依し奉り。朝夕の食物より。其折々の衣服まで心にかけて供養し奉りける。頃しも水無月晝の暑をいとひつゝ。夕日傾く酉時。日蓮大士は筋違橋より。若宮小路にかゝり。名越の方に歸らんと



思したる途中俄に白雨ふりいでたるに。かざす法衣の袖笠も。凌ぎかねたる礫雨いかは
 せんと見たまふ處に。袴の裾を高く取揚。年猶わかき侍のそれなる御僧よ此傘に入給へ
 とさし。招くにぞいと嬉しく。會釋して。其人に伴はれたまふ。他生の縁の傘やどり。我
 は名越へ歸なる御身は何地へ往給ふやと問れて。我も名越の者なりと答給へば。そはよき
 同伴なりとあらば御僧彼の地に日蓮といへる法師を知らたまふや。大士答て我は其日蓮にて
 侍るといへば。彼の侍うち驚き。さいつ頃より人の語をさしはべるに。天下の御歸依淺か
 らざる禪宗を。天魔の眷屬と宣ふよし。出家にも似ぬ雜言と。我はいはねと世間の取沙汰
 。實にさる緯もいはるゝにやと。遠く詰ればうちうなづき。出家の身は元來佛の使なり。
 世を畏れ人に媚てこれをいはずば道立す。抑禪の宗流は教外別傳と學ひ。不立文字と示す
 なり。かゝる宗旨を御經には。我入滅の後は大慈大悲をもつて文字と成て衆生を利益せん
 。もし佛教に依ずして。成佛得脱すといふ者わらば天魔の眷屬なりと説れかせ給ふ。禪宗
 の魔族外道なること御經分明なり天魔を天魔とさしていふ。我が惡言と思ひたまふはい
 かにぞやと難じかへされ半句も出ず。我は進士太郎善春とて北條家の近臣なり朋輩四條頼

基が聖人の噂して勸れども受がはず。今日はた不測の合傘に觸る袂も法の縁。笠わらため
 て教を受んと目禮し心も雨もやと晴し。辻は邪正の別路。いとまを告て歸ける。進士善春
 はこれより大士を信する心厚。明菴些の暇にも。御菴室を訪まゐらせ。こゝに在日ぞ多か
 りける夏去秋も吳竹の軒端を拂ふ音さなて。燈檠ほそき有明がた。大士は奇異なる夢を見
 そなはしけり。山も崩るゝばかりの大雷の鳴はためき此菴室の茅の疵をうちぬきて。其所
 に隨たりと見るうちに忽ち天氣朗かになりけりと測の人にその御夢を語給ふ折から。下總
 國猿島郡能手の人印東治部左衛門有國。聖人にまみぬまゐらせたまよし言出るにぞ日昭師
 案内して席に居しむ。有國恭しく額づきて。我度々此地に來り。聖人の説法を聞奉り。
 。深妙の法蔭夜に忘かたく。國に歸て妻にも語らひ一人の男子吉祥といふ唇を。徒弟に附
 んど遙々此兒を携來ぬ。此兒の母は法弟日昭の姉なれば。伯父甥といひ法兄弟。宿世奇
 特の因縁とればし。願ひに任給ひねとありければ。日蓮大士悦たまひ。雷の隨たりと夢見
 し。その席に處もかはらず吉祥磨が坐したるも。正しく此兒の法弟となるべき瑞相ならん
 と其儘御側にさし置せたまひ。天朗なりし夢に因みて。日朗とぞ名付給ふ此時齡十歳に

ありけるが。常に大士の御膝近く事へ奉り。給仕のいとま手蹟學問を勵むこと。一方ならず見込にけり

日期聖人は寛元三年乙巳四月八日の誕生にして。幼少の時より外柔和にして。内に勇猛の氣を含み。かりそめにも他の童と交り遊ばず稚なくして猶年高たる人の如くありけり。大士御一生の間よく事へて。孝行第一と喚れ給ひ。大國阿闍梨といひ。又筑後公と稱す大士滅後三十九年。元應元年庚申の正月廿一日に示寂す御遺命に依て松葉か谷に茶毗し。阿猿島の山の嶺に葬る塚の上の松を墮涙の松といふ此地は文應元年宗祖松葉が谷に燒討に値給ひ七時御身をかくしたる巖窟あり越中阿闍梨朗慶聖人こゝに寺を建て猿島山法性寺といふ。日期聖人に九人の弟子あり。世にこれを九老僧とて日像日輪日善日傳日範日印日澄日行朗慶の九人をいふ。其うち朗慶師は。荏原義宗の末子なり

茲に下總國葛飾郡。八幡の郷。若宮の里に。富木播磨守胤繼といふ諸侯ありけり清和天皇十代の後胤にして本國は因州富木の城主たりしが今は此下総國若宮に住居し。上總下總

兩國に知行を領し。世に聞ゆる名家なり。貫名の次郎重忠が妻梅菊が父は此富木氏の一族なり梅菊貫名か妻となりしより懸れば繋がる宿世の縁富木胤繼も折を得て。鎌倉殿に訴訟。貫名が無實の辜を言解て。本領安堵させんものと。久しく心に掛られたれど。天下に非分の訴のみ多く。政所の混雜に言出すべき潮もなく。そのまゝ月日を経うちに。貫名の一子善日磨が出家と成しを喜びたまひ。我もと佛法歸依なれば。何卒これを能出家に生立し大道利生の聖人ともなさば。彼の家を再興より百倍ならんと。鎌倉の遊學叡山の修行二十年の食料衣服贈る筈なる両親は世に棄られし羽拔鳥。我が子を覆翹もなく。富木の家より何くれと。皆これを恵まれしは。龍に水を施し火に風を添るが如し。かゝる大導師を發立し。富木の太功。實に佛門の柱石とも謂つべし。かくて日蓮大士は。いよく鎌倉に弘法の志をさだめ妙法の幟を一天にひるがへさんと思ものからかゝる重恩の富木殿に。一度此法門を傳へずば。須彌八萬の頂より。高かる恩を知らぬに似たりと。今年霜月初つた。武藏にかゝり下總國若宮の館にねもむき。かくと案内を請れけるに生僧に殿は今朝鎌倉に參勤の首途して。船よりかしてに趣き給ひぬと。さゝて大士は本意なくは思せども。

時今已牌の螺角にはすこしはやかり。便船もどめて御後慕ひ。御船に追付奉らんと。そこ
 く暇を告。二子の濱に立出て船場はるかに見やりたまへば。高樓造の御座船には。紅
 白吹貫の船印水色に桔梗の紋の幕打廻し。水子楫取は一様の出立に陣笠し。櫓拍子取て唄
 連。船出後し地風に沖合遠く漕出るを。日蓮大士は櫓の笠をさし揚て。富木殿の御船しば
 しと呼たまへば。富木殿耳を聳て。幕の人見よりかいまみ給ふに。まがふ方なき連長師な
 りければ。彼の僧これへと聲のした。直に小艇に迎來て。目通ちかく招入たまふに日蓮大士
 両手を支へ謹で絶て久しき挨拶の詞真中に富木胤繼。大士をはつたと睨へて。いかに其方
 天魔破旬の其身に入去年古郷安房にかへり。諸宗を惡口なすよしは。隨にそれと聞定ぬ。
 悔てかへらぬ事ながらこの年月。衣食を贈り性根の惡き道心を。養立し身の罪障。いつか
 汝を招寄言懲さんと思ひしも。繁き公務にいとまなく。今日のいまゝで過したり。我目前
 に諸宗を罵り。惡言なさば。一殺多生の慈悲なれば。細頸討て捨んすと。いさまさ給へば
 大士些も憶し給はず。富木殿しばし待たまへ。法門ひとつ語告さん。本より殿の信仰深さ
 比叡山。慈覺大師の邪流の法門妃の腹に鼻夫の種を孕たるやうに。法華と眞言とを都合せ

て。法華經を穢し。其上此法門佛の意に協ふやいかにと。佛前に七日の間祈誓を凝したる
 五日目の夜寅の時日輪を的として放箭の弦音たかく鳴ひいさ。日天子を射て落したりと夢
 に見て。さては我が法佛意に的中したりと。喜でその宗流を弘めし事これぞ邪法の證據な
 り。釋尊の御名をば日種とよぶ。それゆゑにこそ須跋多羅は日の落るを夢に見て。佛の御
 入滅近けれと知。又唐土に桀といへる國王は日を的として箭を放ちて其國を亡したり。又
 我朝は日本とて日の御神を主とす。これを射落て吉夢と思ひたる慈覺大師はよも正氣には
 在すまじ定て惡魔の入たるならんと。眞言と法華とは七段の相違ある事を問に答へ語るに
 應じ。眞言亡國の法理を説給ふに富木殿は握りし拳の張ゆるみ。宿因催す後悔懺悔。大士
 に深く鹿忍を託。たちまち眞言の珠數を切り。今身より佛身にいたるまで。能持べき妙法
 の誓の船のいと早く。武州久良岐郡六浦の濱に着船し。互ひに再會を期して立別給ひける
 日蓮大士はこれより一心決定し。名越の菴室を根城と定め。日昭聖人はまた後殿の任を身
 にひき受大士の御手を扶法弟檀越を教化して。専別頭の法門を弘通なし給ひければ。大法
 將日蓮大士は日にく辻町の東小町往還の路に立て。往來の人の足をとめ。念佛は無間

地獄の業因よ禪宗は天魔の邪法眞言は國を亡す大惡法。律は國の賊なりと。聲を限りに喚
 はり給ひ。末法當今の衆生の爲には南無妙法蓮華經の外たすかるべき正法なしと。御經を
 卷かへし線かへし。説示たまへば流る水を塞が如く眠る獅子を驚がごとく。立つだふ僧俗
 男女黒山の如く。眼を怒らし牙を咬惡口過言をするもあり氣の狂ひたる痴者なりと笑ふも
 あり。阿彌陀如来の現罰はかゝるものとて。石瓦礫古履雨あられ。御身に當るを事ども
 せず諸宗無得道墮地獄と高聲に喚はり給へば。一人の老人。あまたの群集押かけて人の願
 ぐを宥めつゝ。御身は出家にありながら心きたなくも路端に立て説法し。人に罵打るゝが
 修行ならんや。いと見苦と懇ふりに言詰るを大士はいやとよ置給へ。むかし不輕菩薩は石
 瓦を擲うたれながら法華經を弘たまひ又龍樹菩薩は赤き旗を建。王城をめぐる事七年。法
 道三藏は面に火印を當られながら佛法を弘む。今末法の一切衆生。五濁亂離に心濁海を山
 と見。西を東と心得る。天地轉倒の濁惡世。正法を弘る者怨敵なくて協ふべきやと言懲せ
 ば。首を抱て後込す。又一人の青侍。御出家に物言さん儒道佛道ともに禮義あり。往還に
 佇立て其大法を説ことは非禮の振舞心得がたしと立かゝるを。人間は座して食するが禮な



高祖大士
 鎌倉小町の
 街に立って
 説法弘通

れども。亂軍急場の兵糧は。立て食するも亦禮なるを知給はずやと。返し難じて打釘に。又立替てさればとよ。念佛禪の諸宗門御上に立置法なるを。その好悪をいふ事は片腹痛しといひ詰るを。王侯貴人は皆在家の俗衆なり在俗何ぞ法の邪正を知召さん。在家の衆に佛法の偏圓邪正を教て。それを導くが出家の本業なるぞとよ。逸々に説聞せ給へども。道理を曲る邪智愚昧。皆口々に罵りて。果は崩るゝ人の山。黄昏時に法戦はてゝ。御題目高らかに唱へつゝ御菴室に立戻り給ふ。かく日々の辻説法に諸宗悪口の塵を揚僧俗誹謗のひびきを傳へ。鎌倉殿昵近諸士の面々も。此をさゝ是を見れども。いかにとみせんすべなく。鎌倉一圓の取沙汰區々なるに建長寺の道隆禪師。光明寺の良忠上人。極樂寺の良觀。大佛殿の別當隆觀。その餘多寶寺長樂寺等みなこの頃道學の習たかく。萬人の歸依深き名僧なるが。松葉が谷の日蓮とかいふ痴迷僧が面白く諸宗を謗り往返とぞ。これも一時の流行ならんど。口には嘲弄し笑へども。心のうちには胸焦れ。腸熱し怒の劍を鍛ける。これぞ未法三類の強敵の一種にして。借聖増上慢とて後年遂に法華の大怨敵とぞなりにける。其辻説法の古蹟。小町の路傍に日蓮聖人腰懸石とて。今にその跡は残りけり。今年乙卯も歲

暮て。康元元年丙辰二月廿九日の事なりけるが。俄に大雨大風吹荒て。關東洪水ねなじ六月十四日の曉天。鶴が岡八幡宮の社震動して鎌倉中に鳴ひいく。其日の日の刻ごろ空に白鷺はどのもの飛めぐり。忽ち碎て火の車の形をなし大さ五尺ばかりにて。絹を裂が如き響して。一道の跡を曳。西の方に飛去りけり白晝の流星は前代未聞のよしかたり傳へ。すべて去る寅年より。諸國に凶變多く四年このかた五穀登らず。氣候不順にして寒中桃桜の花さき。暑中却て雪霜をふらせ。田畑次第に瘦損じ。かくては人命いかに繋ぐらんと未恐しき世の有様なりけり。執權北條時頼も。十一月飾ををろし。禪門に入覺了坊道崇入道と稱し。その子正壽曆七歳なりけるを。將軍の御前に於て元服せしめ。宗の一字を賜つて時宗と名乗。一族重時の次男武藏守長時をもつて補佐となし。大事は皆時頼入道決断せられける。此頃青砥左衛門藤綱といふ奉行あり。此人は始眞言宗の僧なりしが。佛法は偽り多しとて。廿一歳の時還俗して。廿八歳にて鎌倉殿に奉公し。天下の政道にあづかる常に細布の直垂に。布の大口を着て。問註所に出勤し。朝夕の膳部は乾たる魚と焼鹽の外とよのへず其廉直世に知處なり。上には最明寺時頼あり。下には此青砥ありて。四海の成敗。上下

の仕置。道に當らずといふ事なしこのうへ世に變災なくは。世間に物はたもはじと。萬人
ひとしく天下の靜謐をぞ祈ける。時に日蓮大士は日々十字の辻に立て。而強毒之の鼓をう
ち。諸宗権門を攻伐給ふに。珠數を切て降参するもあり。いよく怒て怨むもあり。妻の
信じて夫に迫れ。子の歸依して親に怒らるゝも亦すくなからず。折伏弘通のその中に。房
州天津の領主工藤左近之丞吉隆御所勤番のいとま。化導を受けて檀越となる。こゝに又池上
右衛門大夫宗仲といふ士あり。代々作事の奉行をもて將軍家に事へ。武州荏原郡千束の郷
を領地に賜り。池上に住居し。天下に墨蠅をもつて職とする者は。屬命をこの池上に受ざ
るはなし。こゝをもつて田園ゆたかに。家富さかへ。春秋兩度鎌倉に出勤のいとま。建長
壽福兩山に入て。禪學を修行しけるが。ちかごろ名越に諸宗を惡口する僧あるよし。かゝ
る者には近寄ぬこそよけれとて。途中にて大士の説法を見れば。耳を塞で往過ける。然る
に此池上宗仲。兼て四條金吾頼基は親しき友なりければ。頼基種々に教導して名越に伴な
ひしが。宗仲一度大士に見え奉り。涙ながらに前非を悔て受戒せり。其弟兵衛志もと
もに檀越となる。又池上の縁家に荏原左衛門義宗といふ人ありけり。八幡太郎義家の曾孫

にして。武州荏原を領して中延に住居し。世に武名の聞ありて荏原殿と稱す近き頃大士
に師檀の契を結びけるが。此家に先祖甲斐守頼信以來。頼義義家三代軍中守護の八幡の神
像あり。一夜靈夢の神勅に依て。大士に點眼を願ふ。後年に及び義宗の子徳次郎といひし
を。日朝聖人の法弟となし。九老僧のうち朝慶聖人これなり。此師中延に一寺を建立し。
祠を立て八幡宮を安置し八幡山妙法蓮寺と號す。今に中延の八幡宮とて諸人渴仰せりこゝ
に鎌倉炭賣川の邊に住賤しき者ありて。夙く父母に死別れ。世に力なき孤獨の童。とし十
六にありけるが宿世に植し種ありや。深く大士を歸依し奉り。賤の子なればかひなくて。
せめて世を早うせし両親の菩提のため御菴室に炊せばやと願ひければ。其意にまかせ。名
を熊王と呼。いと眞實に事ける此時にいたり歸依の檀越。池上。荏原富木。四條。我もく
と供養を捧げ。松葉が谷の御菴室には。朝夕の煙賑しく。法弟隨身の輩も。何一不足なく
。道心の中に衣食ありとは。かゝる事をやいふ成べし。又甲州巨摩郡波木井に住居ある。
南部六郎實長といふ人あり。新羅義光六代の血統にして當國飯野御牧波木井三が郷の領主
たり。性質篤實にして思慮明かに。深く佛法を信す初て大士に相見舊來の權宗を棄て。本

門の大戒を受。信力ことに勝れて。一宗に躍ぎ後年其領内の身延山を。大士に奇附し奉り。宋法萬年。妙經流布の基を開きたまひし。大檀那にぞ在しける。

日蓮大士眞實傳二之卷 畢

日蓮大士眞實傳三之卷

東海相摸州 小川泰堂 編述

世法はもと佛法。佛法本より世法なり。天晴ぬれば地明かに。法華を識る者豈世法にうとからん。法華の信者ふかく此理を察すべし。されば建長康元もさのみと暮。今年正嘉元年丁巳の春にいたり。四季の氣候不順にて四月の月蝕五月の日蝕。ともに恒ならず。同十八日海の潮泥に變じたる。こはいかにと思ふうちに。その夜子の刻。大地震。そのうへ三月より此方雨一滴もふらず。田島瀟乾て野に一株の青草だになし。六月加賀法印。雨晴七月鶴が岡の僧正も雨踏わりけれど。一切に驗なく。大地焼焦れて。人間さへ命つぐべしとも思はず。ありけるに八月朔日より地震ゆりはじめ。同廿三日夜の戌時。地震のありさま。地底しばらく鳴動するよと見へしが。大地を揺揚たる事大凡二丈ばかり。大名小名堂塔伽藍の差別なく。其外町家農民の住居。海郎の磯舎にいたるまで。瞬間に微塵となり。人畜ともに大半これが爲に命を喪ひたまく免れたる人も。傷つかざるは稀なりけり。其山

岳の鳴とよむこゑすさまじく。大地は三尺五尺ひびかれて。泥水を吹出し。又青き火焰。十丈二十丈所々より長空に立登り。それより百日ばかりの間。震動止す又十月十三日。一天俄に五色の雲を掻乱す。又いかなる憂目をや見るらんと思ふうち。鋒の如き電光八方に散乱し。人の眼を貫ぬくばかり。しばしして大雷鳴はためき。襖扉障子をうち外す。又同十五日にも大雷地震れりかさなり。打つて凶變は東鑑に載て詳かなり。こゝにはその大略を述るのみ。かゝれば鎌倉をはじめ。關東廿八か國。農民は鋤鋤を取らず。漁者は網を曳によしなく。米穀諸色賣買の道絶果て。よし天災を免れたるも。餓死者ぞ多かりける。日蓮大士此ありさまを見そなはして。あまた々び歎息し。近年の凶變。別て今年の有様は。時運にもあらず。天災にもあらず。全く法華經流布の時節なるを。念佛眞言の諸宗門。その大法の妨なすを。天怒り地罰し給ふに疑わらじ。此事は房州清澄。南都の薬師寺。下總土橋東漸寺。鎌倉鶴が岡と四度まで。一切經藏に入てこれを考へ置たり。今一度藏經を開て。證據となるべき諸經の要文を撰ばんと。正嘉二年正月六日。鎌倉を立て。嚴州岩本質相寺の經藏に趣きたまふ。日朗師は御側さらす。校包を背に負て。大士に従ひ奉りけ



正嘉元年
 八月廿三日
 鎌倉
 大地震

り。七日の夕月山の端にかくれ。沼津の海邊に行暮て。やどるべき方もなく。伴ひあやしき茅葺の辻堂のありければ。こゝに一夜を明しつゝ。今宵は七章の嘉辰なればとて。香を炷て御経讀誦在しけるにぞ。軒端に近き海原より。龍燈しばく往來して。夜も亦還て晝の如し。これ正しく八大龍王。護念の供養とぞ知られける。此堂はもと當地の齋藤彌三郎利安。先代妙覺禪門の爲に。營む處なるが。此龍燈の奇瑞を感じ。明の朝山本重安と共に來て大士に朝餉を奉り。この日は強てとゞめ參らせ一家。のこりなく受戒して。御題目を唱へつれ。大ひに佛事をいとなみけり

後年中老僧但馬房日實。山本重安が宅地を寺とし。龍王山妙海寺と號し。また齋藤利安も家を轉じて満松山妙覺寺といふ。兩寺とも今に毎年正月八日。法會を修して。ひかしの式法をのこすとぞ

駿州富士郡岩本實相寺といふは。比叡山横川に属する天台の寺院なり。當山の一切經は。智證大師。唐土より二部を持來り。一部三井寺に納めたるは。治承の兵亂に焼失し。一部此山に傳來す。高祖大士の經藏に入り給ひしに。當院の學頭。智海法印はじめて高祖に

値まゐらせたるに。世に咽するとは其人歟。天地雲泥の相違にして。道德たかく。智解ひろし。智海は恐れうやまひ。よき折柄なりとて。摩訶止觀の講釋を願ふ。これに依て藏經を讀給ふいとま。時々止觀を講論なし給ふに。聽聞するもの甚だ多くして。歸依の心を發すものも亦すくならず。就中當山に伯耆坊といふ所化ありて。論十四歳は美濃國司橘善根が裔孫。大井庄司の子にして。甲州巨摩郡鵜澤の人なり。母は駿州由井氏。河合入道の娘なり。その母腹に白き蓮華の生ずると夢見て懷妊し。寛元四年丙午の五月八日に出生じ頭の頂に黒子七ありて七曜破軍の星に似たり八歳の時兩親携て岩本實相寺に登り。播磨二位嚴慶律師の徒弟となす。此兒は我が一宗の豪傑にならんとて。三井寺に登す。此頃母の身まかりたるに依て其墓詣にとて歸り來て當山に居。高祖大士の容貌を拜し。しきりに隨喜の心を起せり。學頭智海はやく其意を察し。ひそかに我が寮にまねき。さて言やう我ふかく日蓮聖人の大徳を慕ひ。願くは其弟子となりて。履をも採んと思へども。いかにせん三井寺より。當山の學頭に附られし。我が身の上は爲すべなし。御身はいまだ若輩なれども。未だのもしき器量なり。熟世上を考ふるに。諸宗の佛法皆未枯たり。今出家の

本懐を遂んとれもはい。聖人の法弟となりて。一佛乘を學び給へど。懇にすゝめけるにぞ。伯耆坊よりこびの泪せきあへず在しけるが。此春の季高祖の慈父。次郎重忠逝去ありしよし。房州より告來る。大士これを聞て哀戚にたへず。聲をわけて哭慟なし給ひ。三五日の程は飲食もなし給はず。歎きに春もや暮て。涙をそよぐ竹の杖。力なき身を扶けられ。やがて鎌倉に歸り給ふ。こゝに彼の伯耆坊は。智海法印の計らひにて。ひそかに實相寺をのがれ出。漸く沼津にて大士に追つき奉り。その志願をのべて。歎きけるにぞ。これを不便に思召。ともに鎌倉に携かへり。名を日興と召れ。また其母の夢の緯をさこしめし。後年白蓮阿闍梨と稱し。六老僧第三に列り給ひけり。

日興聖人。大士入滅の後その遺命に任せ。五老僧とともに身延山に籠り。常在院を建て。こゝに喪を終り。其後輪番に此山を守護なし給ひける。茲に大檀那波木井六郎實長。ある時身延久遠寺に詣で。大士の滅後わづかに七年。椽蓋食礎石葎に埋む。實長歎息して。六老僧に談じ給ふやう。此山を輪番に守護すると。高祖の遺命なれば。これを改めがたしといへども。法の爲山の爲甚だよろしき處にあらず。その故は當山に

主職なし。當番の主はこゝに居事。旅の舎に居るが如く。疎するとはあらねども。各我が寺の修復に心取れ。本化極神の靈場も。年を追て衰ふる事のありもやせん。早く住持を定て。万年の榮へを計るはいかにとありければ。各詞を揃へ。法は出家に依て久住し。寺は檀那に因て榮ふ。波木井殿は寺の永續を專一にする任なれば。其義貴意に信すべしとありけるに。日興聖人ひとりこれを承諾たまはず。法子檀越の身として。師の遺狀に背く法やある。寺の盛衰は在家の御身等が預る處にあらずと答へ給ふ。波木井殿甚だ不興の色をあらはし。一座の老僧皆然りとす。貴師獨非禮の言を述給ふはいはれなし。今日より御身と交を絶んとありければ。日興聖人も法衣の袖を拂て立給ふ。それより時の當番日向聖人をもつて。身延山の住職となしけるにぞ。日興聖人はいよく波木井殿と中絶たれば。富木。比企。池上。も自然音信を通せず大檀那人はかくの如きゆる。日昭日朗日向日頂日持の五人も。みな疎縁になりゆき。日興聖人は唯一人背くまじくればせむ。自然と身延一山は敵の城廓のやうになりゆきけるにそ。十月の初めつた。鵜澤に在して一通の書を認め。下野坊日忍を使として。波

木井殿につかはし。和談の心ありけれども。實長一言の返事に及ばれず。こゝにねるて日興聖人も憤りを含み。房州北野郡保田村に後を隠し。門を杜て讀經なし給ふと久し。今の中谷山妙本寺その古跡なり。上野殿は法の因ふかゝりければ。後年日興聖人を迎へて。大石寺を建立し又北山に本門寺を建。正慶元年壬申の二月七日。日興聖人示寂す。時に八十八歳なりけり。此傳によく心をこめて見るべし。日興聖人は勝劣一派を立んとて。身延に背きたるにわらず身延山と中不合になりゆきしゆゑ。ねのつから一派の流義も發れり。誠に師檀の中間にいさゝか。是非を諍てより。平等一味の海は別派の波を起したる事悲むべし。願くは其末流を汲ん者我慢偏執の風を收め。相互ひに平等大慧の本誓に根つかば。眞如の法水從來許ふ處なからん。若又彼と此とは黑白の相違ある別派なりと募らば。高祖大士かねて六老僧と稱して。未頼しく御覽ありしは御目違ひか。日興聖人五老僧とよもに二十年來。高祖の御側に在て。法門を開給ひしは虚耳か。塔中別付。上行所傳の法理に。何ぞ二三の別流あらん。廣く考へ深く察して。一を二と信じ。不二摩訶衍の佛海に歸入し。現當の大願を満足せん事。佛

門の肝心ならんかし

さて高祖大士は。旅装をどよのへ給ひ。日朗師を將て房州小湊にねもむき。慈母を慰めつ。椗の青葉摘とりて。そよぐ涙を手向祖。御經讀誦いと懇に百ヶ日の佛事はて。鎌倉にかへり給ひけり。いづくも打つゝく變災に。人の心も弱りはて。年々五穀登らずして。淺ましき事のみ多かるに。今年八月朔日颶風洪水にて。非命に死するもの數をしらす。ねなじ其廿八日の夜は焚惑といふ悪星いで。一天の星みな光を奪はれ。しかのみならず。狂星長さ四丈ばかりなるが。乾より巽の方へ飛ねたる。そのいさゝ山岳に鳴轟く。これより諸國大飢饉。そのうへ疫病流行し。万民なげきの中に今年もくれて。明れば正元元年の春。歳あらたまれども壽き祝ふ聲もなく。國中民の食盡て。そのうへ疫病いよくはげしく。いさゝかも手脚の協ふ者は。病煩らひながらも。箠を提。鎌を。腰にして野山をさまよひあるき。木の皮草の根をせり。それを咬ながら倒れ死するも多かりき。また歩行協はず家に居者は。飢に苦み病に惱み泣呻吟。親子兄弟夫婦の間に。いさゝかの喰物を得れば。互ひにゆづりあひ。其大切とねもひ。最愛と思ふ人にまづすゝめて。喫しむるゆゑに

○情ふかく實ある者は。其家のうちにも人よりはやく命を喪ひける。荏原義宗。名越の御庵室に來り。高祖大士に物語やう。けふしも村岡の邊りに通行かゝり。咽喉の乾きたるまゝ水を一杓貰はばやと。或る農家に立入たるに主翁とねばしき五十ばかりの男。壁に倚かゝりいと惱ましげに見へければ。流行の病に苦しみはべるやと問は。頭をうち掉て。九旬このかた食料つきはて。糠に糞に啖つくし。壁土をさへ口に含み。今は食たへ廿日あまり。妻はその菰藟の下に死てあり。土間の曲壁の下には弟の死骸もあり。その亡骸をさへ取歛むべきすべなしと。涙を拭ふ袂さへ。手を揚かねし蟲の氣息。納戸のかたをさし覗けば。何やらん古葛籠のうちに。掻むしる物音するにぞ。おれは何ぞと尋れば。さればとよ五歳と七歳となる男子二人有て。妻は其をいたはるとて。己れは喰す二人の兒等にのみあたへつゝ。それゆる早く死したりき。五七日このかたは。二人の兒童も聲泣嘎し。悲母は何處へたはしたるぞ。爺さま早く物喰して給ひねと。此世からなる餓鬼道の。飢にくるしみたへかねてや。兄弟たがひに摺合頼先手脚に噛つきて。血しはに染るありさまの。眼も當られぬ振舞を。今は見兼て兄の方を櫃に入。弟を古葛籠に入。見給ふ如く細もてからげか

きたるは。千代もと祈る我が子さへ。早く死ねかしと願ふのみと涕をすゝりて物がたるを。聞てあはれさやるかたなく。腰につけたる一袋の乾糶をとりいだし。彼の主翁にあたへたるに。主翁はこれを押戴。御志はうれしけれど。とても生ながらふべき親子が命ならぬを。今なまじひに食物を得て。一時なりとも生延なば。又一時の憂目や見ん。許し給へとさし戻しぬ。さて恐ろしき事かなと。歸る途中の噂にも。いつぞやより京都に人を啖こどはじまりて。新に葬りし墓を發。又往倒れたる人の肉を喰ふよし。此頃鎌倉にも移り來て。昨夕巨袋坂の墓所にて死人を啖ひ居たる者ありと。取々人の語りはべるとありければ。日蓮大士も。共に哀れを催して。御法衣の袖を絞り給ひ。されば未法華經の弘まらせ給ふべき時節なるを。諸宗の邪義に障られて。正法の立ざるを。天怒り地罰し給ふなり。いでや此事譚を鎌倉殿に訴上ん。上一人此事を辨へ給ふ程ならば。下萬民の幸ならん。と。一卷の書をつゝり給ひ。正法を立て國を安くする義を取て。これを立正安國論と名づけられ。兼て前年京都にて圖らず面會ありし。比企大學三郎能本の。近き頃鎌倉に召下され。儒道に天文を兼て。御所に昵近し。大士とは師檀の契淺からざりければ。幸ひ彼の安

國論を大學三郎に見せて。文章の連續。文字の誤過をしらべ給ひけり。例せば天台に徐陵あり。妙樂に梁肅あり。傳教に眞綱ありて。其時の豪傑の儒者。佛法を扶翼たり。今高祖大士に能本ありて。此安國論を校正しけるも。みなこれ三寶諸天の所爲とぞ知られける。大學三郎能本の住居せる。比企が谷といふは。去る建仁三年九月二日。父判官能員。北條時政の爲に滅亡ありし。其舊地なるを拜領し。文章博士をもつて。世に時めさしが。先年比企落滅の時。庭前の池に入水して果たりし。姉讀岐の局の靈魂猶得脱せず。累を爲とて。御所より此地にねゐて。一日頓寫の法華經の供養をせらる。大學三郎も亦法華堂をいとなみ。高祖大士を請待して。佛事をいとなみ。姉讀岐の局の靈を蛇苦止大明神といはひ祀り給ふ。これ比企が谷法華堂の始めなり。これより妙本寺となりて二百年の後當山の檀越。佐竹常源入道。家督の事について。管領上杉憲定と合戦し。佐竹入道此山に楯籠り。應永廿九年十月三日。早天より軍始り。其夕方上杉方より燒草を積で。寺に火をかけ。既に堂塔灰とならんと見るうちに。井戸の中より。一道の白氣立昇り。忽ち震動雷電し。大雨篠を衝が如く。然へ立柴もたりに濕りて。火

は消たり。此時黒雲の内に。大象をも呑べきほどの大蛇。紅ひの舌を閃々どひらめかし。火焰を嘔と吐出し。伽藍の燒亡を護ると見へければ。兵士ども畏恐れて逃失けり。これは去ぬる弘安三年。日蓮大士認め給ひし。十界の本尊を。此時の住持日行聖人を現したるなり。これより蛇形の曼陀羅と世に言傳ふ。本尊紙中長三尺二寸。廣二尺三寸七分。今に比企が谷に現存す。此時佐竹常源も。大將の分十三騎。釋迦堂の前に切腹して相果けり。此等は祖傳に預らざる事なれども。比企靈場の兵亂また本尊蛇形の曼陀羅の利險によつて茲に附す。

今茲正元二年の春。疫病愈々止す二月十四日十五日の兩日。日輪の色赤くして。物の色皆紅ひに見ゆ。すべて去年より日蝕月蝕時ならずして度々かゝり。一天薄曇りて。日の色さへ定かならず。これは世の滅する時節にや成果けん。人々生たる心地もせざりける。こゝに駿州富士郡上野に領居する。南條兵衛七郎といふ人あり。北條時政の親族にして。駿河國を大半に支配なし。世に上野殿と稱して輕からぬ家柄なり。上野一門はもと岩本實相

寺の檀越たりしが。岩本の一山擧て。高祖大士を尊崇なすにぞ。上野殿もこれより大士に師檀の契りを結び。深く信仰し奉りけれども。國中の政事にいとまなくして。度々高祖に値奉るとかたかく。唯時々布施を捧げ。衣食を供養して。その厚志を盡されければ。高祖も又其間暇なきを察し。交通を以て節々御教導ありけるなり。又日興師は本岩本に所化たりし時より。上野殿知己なりければ。折に觸ては我が邸に請待し。高祖に見ゆる心地して。謹で教化を受給ふ。日興師も亦其信力の厚きを喜び。自高祖の御側に在て。朝夕聞つる法門を逸々に書といめ。上野殿へれくり給ふ。世に此を日興記と言傳ふるなり。時に文應元年庚申の七月十六日。高祖大士は奉行宿谷左衛門尉光則が邸に推參し。拙僧は御府内名越に住居なす。日蓮といふ者にはべり。近來つづく天地の變災。一代藏經の鏡にかけて。當世日本國をうつし見て書認たる。立正安國論といふ一巻の書なり。これいさゝか國恩に報ひ奉るのみ。願くは前執權時頼公の賢覽に備へ給れど。其書をさし出されければ。左衛門光則請取。願て御所に出仕なし。此旨披露に及びたるに。將軍の御前に在るて。北條一門をはじめ。列國の諸侍伺候し侍讀學士。比企大學三郎を召て。その書を讀しめ給ふに。そ

の趣意に曰く。國は法に依て榮ゆ法は人に依てたつ。近年うちついきたる。天變地夭は。末法應時の法華經。諸宗の惡義に利益あらはれず。其正法誹謗の罪深く。諸天善神は此國を捨て守らず。惡鬼國土に充滿するゆるるなり。金光明經には正法に背けば。其國に七難ねこると見へたり。其七難の中。五難はこれまで顯れたれど。二難いまだ起らず。其二難とは。此國に軍起ると。異國より此國を攻るとの二なり。又藥師經の三災すでに二ツ起りて。なほ一を残す。兵革とて戰の災なり。若國王百官此法華經を御信用なく。いよく念佛禪律等の御歸依ふかくは。此國の滅亡程近きにあらん。これ我が言にあらす。釋迦牟尼世尊。金口の佛説なり。とぞ書たりける。時頼はじめ。並居る諸士も一同に。顔見合互ひに詞もなかりける。北條時頼此書を見て甚だ快よからず。同廿四日。高祖大士を我が邸に召寄。東の壺に喚入てみづから對面有て宣ふやう。今度一巻の書をさし出して。天下の政事を侮り。萬人の信心を惑はす事。出家沙門の所行にあるべきやと仰ありければ。大士答て。ひかし周の世に賤き女婦あり。我が機杼を織すして。周の天下の乱れんとせしを。案じ煩ひし老婆心。左傳の昭公廿四年に見へはべりぬ。況て天下の安危は。佛法の邪正に依。

之を告さずは。出家の本意に違ふに似たり。抑法華經は正法の中の。正法にして諸經に優
 れて在すこと。一切の江河の中には。海の第一なるが如く。一切の山嶽のうちには。須彌
 山の第一なるが如く。又一切の星の中には。月を第一と仰が如く。闇に燈火。渡りに船譬
 へば高十六万八千由旬の須彌山を。剝回めて硯となし。大千世界の艸の葉を筆に結ひ。大
 海を硯水として。これをしるすとも。書つくし難きは。法華經の功德なり。然るを諸宗の
 經々に。其廣大の利益をねし塞んと。邪正混じて明白ならず。願くは公深くこれを察し給
 ひ。はやく念佛眞言禪律の諸宗を停止して。我が一乘法を御歸依あらば。四海の太平とな
 らんこと。掌を反すよりも速かならんと。有ければ。時頼面色怒りをあらはし。一人の詞
 を信じて。何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと。中啓扇取て立揚り。裾うち拂て入給ふを。高
 祖大士は御聲たかく。若我が言を御用ひなくば。自界叛逆難とて。御一門に同士討の軍は
 じまり。他國侵逼難とて。他方の國より此國を侵さるべし。其時臍を啞給はんすと。喚は
 り給ひしにぞ。近衆扈從の面々も。あな恐ろしきことをいふ日蓮かなど。面色かはつて見
 へにける。これ天下諫言のはじめなり。これより忠言耳に逆ひ。北條時頼。同重時ともに



諸宗門の悪徒等
 松葉ヶ谷の
 御菴室を焼討

高祖大士をふかく思慕み給ふことゝはなりぬ。上一人の心。下方民にたしうつり。彼の名越の日蓮坊。いまは北條殿も疎んじ給ふときく。討殺したりとも咎はあらじ。阿彌陀如来の怨敵。目に物見せんと百人ばかり。手にく得物持構々。名越の御菴室へ押寄たり。時に八月廿七日。今宵は當る庚申。帝釋天へ法樂せんと。大士はしばし御經讀誦し終り。月もや出ると。遣戸細目に押明て。東の空をうち見やり給ふ折。竹椽つたへ白き猿大士の御袖をしきりに。曳ければ。こは不審と思しめしながらも。何なる事の諭しにやと。彼にひかれて往給ふに。路いと暗き山ついき。東をさして七八町。山王堂より奥りたる。窟の洞に入奉る。大士西の方を顧み給へば。我が菴室とればしき邊り。おびたしき物音吠の聲。猛火煽々として天を焦しければ。さては我が庵室は焼失するにやと思しける。此夜御菴室には。人すくなくして進士太郎善春と。能登坊と唯二人ありけるが。念佛禪の諸門徒とも。日蓮を漏すなど。聲々に喚かはし。松火を投懸々々。焼討にぞ。進士善春刀れつとり。援はなし。無益の殺生なすまじと。當るを幸ひ。棟打に。難倒し蹂躪る。能登坊も椽の割棒はやうち折て。近倚敵を捉捕へ。目よりも高くさし揚て。丁と投たる人礫。討手の雜人

かなはじと。皆いづくへか逃散て。夜はほのぐと明にける。高祖大士は。人しらぬ岩窟のうち。御經をよみすまして在しけるに。不測や猿のうち群て。柴栗。覆盆子。樺の實など。かはるぐ手折もて。供養し奉るにぞ。ねもはずこれに飢を忘れ。こゝにかくれ給ふこと三日の間。後年此處に寺を立て。御猿畑法性寺とて。今にその靈場をといめけり。其頃鎌倉市中には日蓮名越にて焼死したりと。專一風聲せしとかや。さては富木播磨守は。伶俐たる家來をつかはし。大士の在處を探り索め。漸く山王堂の山奥にこれを尋當り。御手を取てひそかに下總の國若宮の館に伴ひ參らせ。富木殿その無事を喜び、尊敬日頃に百倍し邸構のうち。法華堂をいどなみ。茲に法苑をひらき。家門一族のこりなく。大戒を受奉り。これより日々の説法教化の外他事あらざりけり。けふしも富木の法華堂に來りて。受戒せし曾谷入道教信といふは。代々越前の國を領し。當國曾谷に居住す。此人佛縁淺からず。日を迫て大法を證得せり。二人の子あり。嫡子は四郎左衛門直秀といひ。次は女子にて芝崎と呼ぶ。生長して。千葉大隅守胤貞の室となる。兄弟ともに大士の化導に預り。清淨堅固の信心者にぞればしける。

曾谷教信後年身延山に登り剃髮して。法蓮日禮と名を賜ひ。家に歸りて法蓮寺を建立す。○正應四年辛卯五月朔日。八十歳にして示寂す。嫡子四郎左衛門直秀。家督を繼いで信力父に劣らず。妹芝崎は父存生の日。鼻和地藏堂を本化の寺とし。日期聖人を請して開堂す。長谷山本土寺といふ。夫婿大隅守逝去の後。尼と成て妙林と號し。其居宅を寺となして。禮林寺と名づく。兄四郎左衛門は後に山城入道崇と云。其子典久。末子を大士の法子とす。筑前坊日合これなり。山城入道その日合の爲に。千葉郡野呂の邸を寺となし。妙興寺と号す。又平賀六代日福も。入道の孫なり。曾谷の一族。本化の宗を信じたる事斯の如し。

高祖大士。法華堂に在て。日々の說法。夜々の講談老若男女。取交て。聽聞するものいと多かりける。中にも當國白井の住士。秋元太郎一座の說法いまだ開終らずして。珠數を切て改宗す。又柏井村に鐘阿彌といふ念佛者ありしが。念佛無間の法門を。難じ來て一言のもとに念佛を捨て。法弟となる。名を日唱と賜ふ。これまでの念佛を言滅んとて。眼を眩拳を握り強情に題目を唱ふ。其聲夜となく晝となく。一村にひびく。これに依て首題坊と

呼給ひしなり。その子も亦法弟と成て日惠といひ。父の家を轉じて寺とす。今島山唱行寺これなり。斯化導のその中に。此處より一里ばかり去て。千足といふ里あり。その地の人なりとて。年閑たる婦人。日に々々來て聽聞す。ある日我が法名と御本尊とを請。大士本尊を書て。法名を如正と與へ給ふ。婦人喜んでかへりける。其郷の人もあまた茲に居たれども。その婦人を見知らずとて。あやしんでその後をしたひ覗ひけるに。千足村の池に入て見へず。本尊は池の邊りの櫻の枝にかけたなり。これより奇異の事也とて。祠を建て。妙正大明神と崇め。今は姥神とて疱瘡の守護神と仰ぐ。かゝる不測を語りつたへ。參詣群集のその中にも。大田左衛門乗明は。人跡重く身分いやしからず。富木の内室は此太田乗明の姉なりければ。日々こゝに在て大士の化導を蒙り。粗その宗意を辨へ。師を歸依するこど大方ならず。嫡子太郎を剃髮せしめ。法弟とす。師の阿闍梨日高これなり。

太田乗明。老後にいたり夫婦別々の室に住んで。五辛を食せず。肉を啖ず。法衣を着し。袈裟を掛たり。これに依て高祖も常に。聖人と呼び給ひ。其宅をも直に本妙寺と稱せらる。弘安六年四月廿六日に寂す。

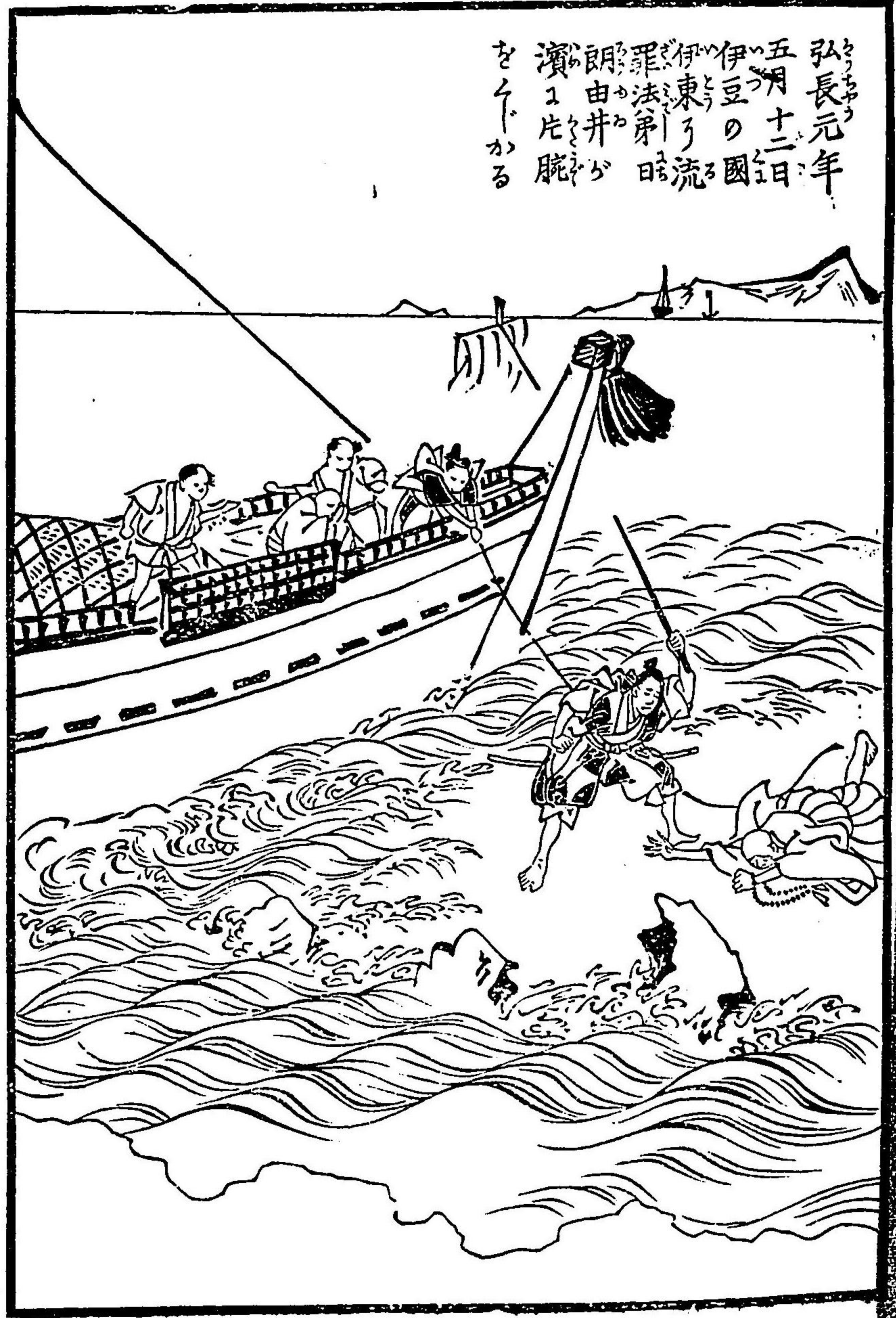
栴檀の林に毒草なく。須彌山に近づく鳥は皆金色なり。曾谷秋元太田をはじめ。此法堂に入て邪宗を捨て。正法に歸する者。其數を知らず。教化の果敢ゆくにれもはず。日敷を重ね給ひ。峯の木枯吹絶て。霜冴わたる庭傳。富木胤繼は法華堂に入來り。優曇華の花さき匂ふ千歳の一時。御說法も既に昨日は百座に滿給ひぬ。鎌倉名越の御菴室も。去ぬる八月焼討の後。番匠左官をつかはして。今は漸く成就なしたりと。今朝しも鎌倉より告げ來りぬ。どく御入在て大法弘通なし給へ。法弟も檀越も待わびたること聞はべりぬと。ありけるにぞ。高祖大士はその志意の淺からざるをよろこび。其日鎌倉にれもむきかへり。再び本化折伏の幟を颯し給ひけり

富木播磨守胤繼は。性來書を讀ことを好んで。篤く佛乘を信じ。日蓮大士いまだ蓮長たりし時より。衣食資財を見繼て。學問修行をばげまし給へり。實に末法万年宗門第一の大檀那なり。こゝをもつて日蓮もし上行の再誕ならば。富木殿は無邊行なるべし。火を盛にするものは。風なりと。遊ばしたるは此ゆゑなりけり。百座説法の道場は。寺と成て正中山妙法華經寺と名づけ。大士手づから彫刻ありし。一尊四菩薩。また

鬼子母神を建て本尊とす。大士を開山とし。富木胤繼は建治二年の夏。身延山に登り。大士の御手を勞して剃髮し名を常修院日常。又常忍と號す。大士入滅の後。初て袈裟をかけて。中山第二世を繼。大士御在世の時。かねて此人の志の堅固なるを知召て一切の書類は多く此家へ傳給ひしゆゑ。今此山に納る處。高祖の直筆一百餘通に及ぶ。需未來門外不出と定め。今猶其掟を護る。在世の時より。六老中老とも。富木殿を敬ひ見ること。大士にかはらず。正安元年己亥三月廿日。八十四歳にして示寂す。中山三代日高四代日祐聖人。此人は當國佐倉の城主。千葉大隅守貞胤の子なり。これに依て佐倉より。當山に寺領一萬石を寄附す。これより寺門盛になりゆき。關東關西末山末寺。五千七百餘ヶ寺にねよび。今に連綿として日常聖人の餘光宗門にかゝやくこと。仰で尊び俯て信すべし

國に道あり。法に傳へあり。我が神國の道の學びといふは。京都吉田殿二位兼益これが長上たり。こゝに吉田の御神領。武州都築郡恩田。御厨の代官益行といふもの。年來日昭聖人と交り厚かりければ。高祖大士これをよき紹介なりとて。益行の吹舉に依て。吉田家に

門入なし給ひしに。兼益一度詞を交へて。大ひに驚き。日蓮聖人は一代藏經の才覺を極たる異人なれば。三十二尊の神號より。神秘口訣の相承殘るところなく傳へたるよしは。二位兼益の筆記に審詳なり。これぞ法華勸請にあらざれば。諸神に利益なしといふ。日蓮所立神道の根元なり。此頃高祖大士は。折伏弘通の鋒尖するどく。愈々諸宗を攻なひけ。僧俗男女。落降て徒弟となり。檀越となるもの。日を追て盛なり。さるに北條陸奥守重時。諸人の讒言を信とし。大士を惡む事甚しけれども。いかんせん今は遁世の身の上なればとて。徒に牙を咬でればしけるが。執權時宗。幼少につき。重時の子長時。天下の政事を補佐する身となりければ。これぞ能き時節なりと。重時ひそかに。子息長時にこれを談じ。時に弘長元年辛酉五月十二日の朝琵琶小路の辻に日蓮大士を召捕へ。問註所の吟味も遂すして。情なくも由比が濱にひきもてゆき。船にうちのせ伊豆の伊東へ流罪とぞきこねける。荏原池上進士等の檀越も。我もくと驚き聚まりてありけれども。はや嚴重の囚人なれば。番の兵士棒うち振四邊へ人を近よせず。かゝる處へ日蓮聖人。この日比企が谷に在しけるが。斯とさくより徒跣にて由比が濱邊に駆來り給ふに。いまや御出船と見へければ。



弘長元年
五月十二日
伊豆の國
伊東の流
罪法弟日
朗由井が
濱一片腕
をくかる

かよはき腕に繩を引とめ。我れは流人日蓮が弟子の日朗にはべるかし。我をも共に同船させて給ひねと。聲を限りに宣へば。船人いかりの聲あらまげ。おれの青道心奴。大切の御用船に浪籍なさは。目に物見せんと持たる械を振揚て。綱に縋りし右の手を。はつしとらてば日朗聖人。なにかはしはしもこらゆべき。一聲あつと叫びつ。磯の渚に打すへられ。其儘動と倒れ給ふ。餘處の見る眼も中くにあはれ果なきありさまなり。日蓮大士は船梁に立揚り。官人の衆中よ彼は幼少より。我が弟子にて。しばしも側を離れざる。不便の者にはべるかし何條一言の暇を告させ給はれと。會釋して。此方に向ひ。日朗々々と御聲高に喚給へば。その暮はしき御聲の。耳に入てや起揚り。御船は未だ出ざりしかあら嬉しや。南無妙法蓮華經と。合す掌も。右は折れて片腕。あけて泣入血の涙。大士も險しはたふさ。いかに日朗日頃の教化を忘れたるよな。今末法に御經を弘れば。杖もて打れあるは父。遠く流罪に成べしと。法華經勸持品に。説ねかれたる其明文。二千餘年の今日唯今。汝は打擲われは流罪。如來の金言違はぬうへは。廣宣流布も疑ひなし。頓て救免の時を得て。再びめぐり値までは。法の御為その身を愛せよ。此地と伊東は西東。八重の潮路は

遠くとも。朝日東天に登り給は。日朗鎌倉に在とねもふべし月西山に傾くを見るどきは。日蓮伊東にありと知れ。さらばくと念珠を摺。此經難持。若暫持者と。寶塔品の偈文を唱給へば。御船は波にゆられつ。一聲は高く一聲は低く。一句は伸。一句は縮り。波の間に。遠ざかり。沖合はるかに漕出たり。歸依の男女隨身の法弟達。異口同音に御題目を唱へつ。あだなみならぬ磯際に。袖しばりつ。見送るうち。沙風吹たつ朝霞に。御船は見へずなりにけり。日朗はじめ法弟極越。御名残の暮はしくて。御船にさこへし。此經難持。自然に誦づく御經を。その節に唱へ覺へ。沖中節の此經難持とて。今の世までも傳へけり。斯て御船は西をさして走りけるが。程なく西風吹起り。潮と風とに立合て。逆巻波をれしきり。その日の申の頃。伊豆の岬に近きけり。船中の官人。大士に向ひ。けふは生憎風あれて。船の進退自由ならず。あれ見給へ。彼處の黒き茂りこそ。伊東の浦にはべるかし。此處の磯傳ひ。程近ければ步行給へと。船よりねろしまゐらせて。鎌倉さして走りさりぬ。大士はかゝる蒼海の。船にゆられて。御心惱しく。巖に腰をうちかけて。見やり給ふに。往べき伊東も程遠く。巖石峨々と横たはり。莓なめらかに水草生。岩に

せかれてうつ涙は。白蛇のかけり狂ふに似たり。大士は御辭しづかに題目し。しばし休ら
 ひ給ふ折から。蘆の葉のさゝ小船。竹の子笠に腰篋して。櫓拍子高く漕ぎ来り。大士を
 見て大ひに驚き。御僧は天より降てはせしか。驚に捕れて來給へるか。これは伊東が岬
 の魚俎岩とて。磯根別れし離島。今さしみつる上潮時。この黄昏は汝みちて。顔て隠るゝ
 浪間の巖石。あな危ひかなど。舌を巻ての物がたり。大士はこれに應答して。我は鎌倉の
 日蓮といふ僧にて。伊豆の伊東に流罪の身なるが。爰に追揚歸りしは。死ば死ねがし活ど
 ても。活がいもなく鎌倉に忌僧まれし者どもひ。芥のごとく棄たるならんと。語り給へ
 ば何れもひけん。漁者は小舟を岸にさしよせ。我はかしの川名といふ磯村に。彌三郎と
 て。日にく此岬に漁業して。世を渡る者なるが。今宵は亡母の十三回忌の待夜にわれど
 。佛事はさて置き。此風の荒吹に。命を的の殺生も。なさねば協はぬ業報人。御僧をたす
 け參らせなば。せめての追善いざこの船に召れよと。御手を取て舟にうちのせ奉り。人頭
 不分灯ともし頃。れのが伏屋の背戸近き。邊りの岸に舟さしよせ。妻の名を呼立れば。妻
 も戻りの遅さを案じ。紙燭ともして走りいで。船のうちに大士の在すを見て。うち愕くを

○夫彌三郎爾々なりと言さすとす。話半途に灯を吹消し。今日しも村の莊宮より。流罪の出
 家を歸依なさば。辛き目見せんと觸たるほど。耳に口よせさゝやくにぞ。彌三郎も心得て
 。人に知れてはあしかりなると。ひそかに我が家にしのばせ奉り。妻もともく遁走り。
 手水洗足何くれと。足はぬがちの瘦世帯。心ばかりの夕餉を供養し。掛て見かくす荻簾
 納戸のかたに休らはせ奉り。それより夫婦は人知れず。大士の教化にあづかり。茲にかく
 まひ供養すること。三十日餘り。高祖もふかく感じたまひ。男はさもあるべき事なれど。
 婦人の身として。共に我をあはれみ。何處も米の乏しき時節なるに。久しくはごくみ給は
 りし事。いつの世にか忘れはべらん。定めし我が父母の。伊豆の川焔に生れ來り給へるか
 。さらずばいかで鎌倉殿に。いみ悪まれ。天下の人に嫌はれたる日蓮に。かくまで信仰な
 し給はんやとて。御涙とゞもによるこび給ひけり

大士船より上陸たまひし處は。篠見が浦とて。伊東より南二里その磯を今日蓮崎とい
 ふ。小田原北條の家臣。今村若狹守。この地を領したりし時。初めて堂をいとなむ。
 萬治二年江戸大久寺の日蓮師。これを寺となして。海岸山道若寺と名づく。今は越後

本成寺の末寺なり。又川奈は篠見が浦を去事一里餘。彌三郎。姓は上原と云。大士は船守と喚給ふ。其跡寺と成て。船守山蓮慶寺といふ。慶蓮は彌三郎の法名なり。雨ならば。宿もかるべき夕暮の。霧にぞいたく袖ぬらしける。今日本國に佛法渡て七百餘年。念佛真言禪の諸宗似て非分なる如法の毒氣。いつしか上下萬人の骨髓に染徹り。今正法の法華經弘まらせ給ふべきを。惡み嫉むこと。たとへば鳥の畫を嫌ひ。蚯蚓の日の光りを畏るゝに似たり。其上鎌倉にねめても。御府内を懼りなく。名越の御菴室に火を放ち。夜中狼籍なしたる無法人には。何の詮議もなく。正法弘通の高祖大士をば。遠く此島に苦しめ奉るは。世界不測の政道なり。日蓮大士。彌三郎夫婦に語り給ふやう。傳へさく一向門徒の親鸞上人は。一流をたて。妻を妻として色欲なく。肉を食して食念なく。堅く菩提をこゝろざす。これを清淨の梵行と名つくるはとて。三衣を身に纏ひなから。肉食妻帯を表帳とす。釋尊一代の聖經に。かつて例なき魚鳥を啖ひ。妻子を養ふ。法外の僧は。却て万人の歸依をうけ。又身に一分の過失なく。唯一切衆生を救はんと勵む日蓮は。かゝる責に値へり。天は地となり。陸は海となり。子は親をうち。家臣は主君を罵り。轉倒亂離の

世なればこそ。今惡鬼國に充滿し。種々の兇變有て。五穀登らず。惡病も流行す。このうへいかに成ゆく。世なるらんとありければ。彌三郎もさしうつむき。斯れそろしき惡世には。御題目の外頼みはあらじと。夫婦愈々信心を上げましける。こゝに當國伊東の領主。莊司八郎左衛門朝高。五月の中旬より。流行の毒病に犯され。既に正氣を失ひ。見る目いふせき大病に。醫藥祈念の驗も見へず。はや命の際と見ゆるにぞ。此伊東の親族に。綾部正清といふ者あり。深く事を考ふるに。此國へ流され來りし日蓮聖人鎌倉殿の惡みはさることなれど。其弘る御經は。法華經といふ聲き御經なりとさく。そのうへ不測の名僧とて。御府内にも信する人の多しとぞいふなる。あはれ領主の病ひを救ん事を。頼まばやと。みづから大士に見へ奉り。その祈念を願ひければ。大士眉うちひそめ宣ふやう。御經女にもし正法の妨なさば。其頭七分に碎くべしと。鬼子母神。十羅刹女の誓ひあり。今其誹謗正法の罪を惡んで。諸天の怒り甚し。我祈るとも協べしとも覺へずと。辞退なし給ふを。正清強て願ひ奉りければ。六月十七日。伊東和田の邸に入給ひ。朝高の枕邊に坐して讀經なし給ふに。三日にして正氣にかへり。五日にして病ひ大半に除く。朝高正清を始め。妻

も族もその奇特に驚き。晝夜擧て題目を修行す。朝高すでに本復に及びければ。我が命は
 聖人の賜なりとて。大士を仰ぎ奉ること。大方ならず。或時朝高。聖人は何を持佛と成給
 ふやとありければ。久遠の釋尊なりとて。その法門を論し給ふ。朝高よろこんでいふやう
 茲にひとつの妙なることあり。前年よりこの伊東が崎の海上に。夜々光明を放ちたり
 し。一鉢の佛像を。漁者の網に曳揚たり。こは阿彌陀如来なりとて。近郷聚て念佛せ
 り。しかるにその頃熱病諸方に起りて。死するもの多し。彼の佛像はよく見まゐらすれば
 釋迦如来なりければ。村中の者呆れはて。熱病の流行も。此佛の所爲ならん。いまはし
 き佛かなとて。我が方に持來りぬ。我れも生氣味わろけれど。地頭の任に預りたまぬ。こ
 れを聖人にまゐらせばやとて。塵うち拂て。大士に渡し奉りけり。高祖は御法衣の袖もて
 。これを受取れしといき。拜し給ふに。相好微妙の釋尊の立像にありければ。尊ひかな
 久遠の本佛。久しく苦みの海に沈んで在したるも。今末法第五の時を得て。光を放ち。出
 現ありしは。正しく法華經の弘まらせ給ふべき時節なりと。御涙にかきくれて。しばし自
 我偈の文を唱給ひける。誠に久成の釋尊肉身の上行菩薩にめぐり値。本地の世界に御對面

ありし。其師弟の御喜びは。本結大縁の現證にやあらんといとも尊く思はれける

伊東が崎。海中出現の釋尊は。大士一代の隨身佛にして。いま京都本國寺に安置す。

八郎朝高その出現近き海邊に。海光山佛現寺を建立す。今は總堂と號し。大行寺妙照

寺蓮昌寺龍仙寺廣仙寺いづれも伊東山と號して。其靈場を護る。又朝高の邸は寺と成

て。佛光寺といふ

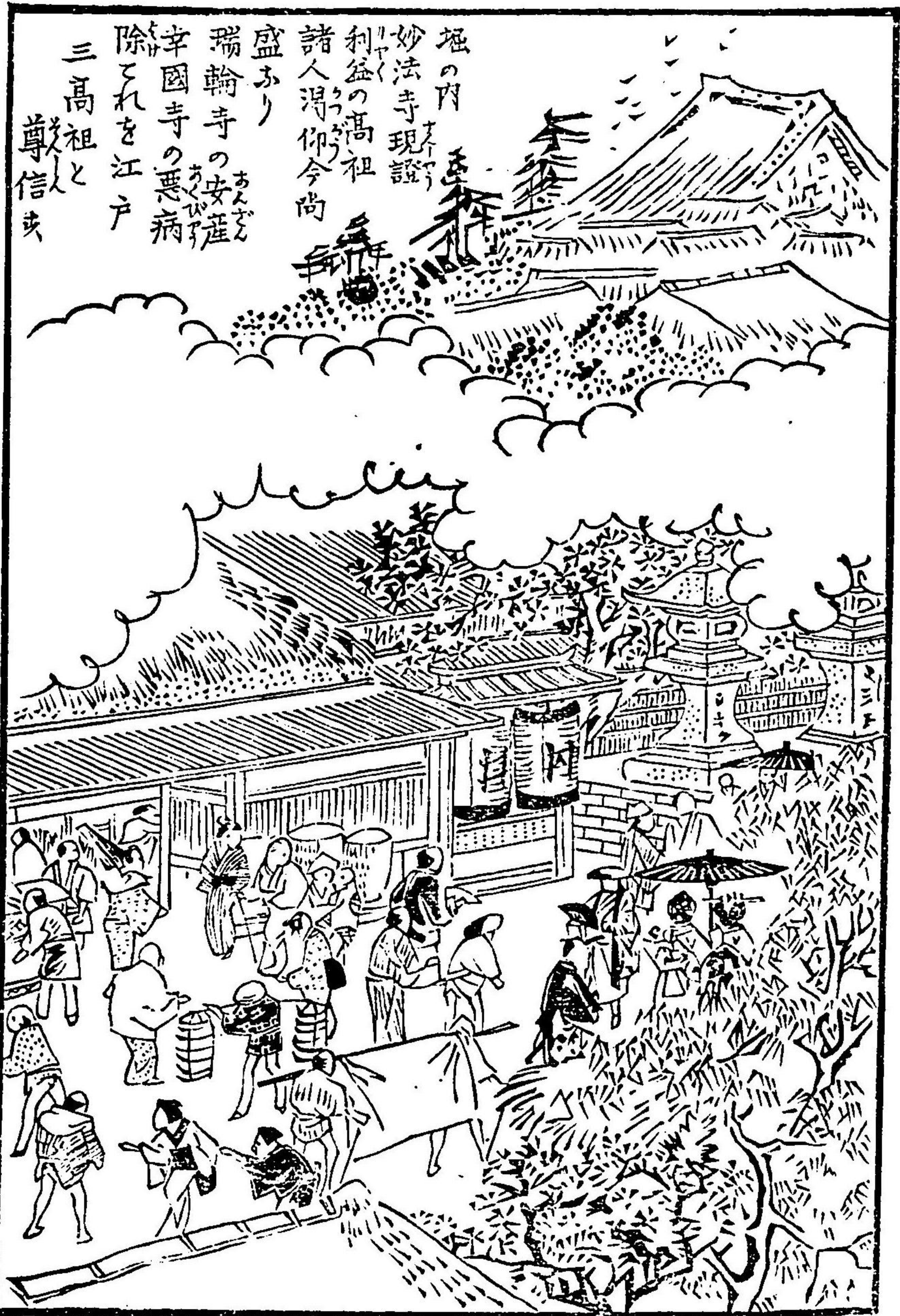
今日將暮る夏の日。樹の葉にそよ風もなき。茅の軒端にはし近く。大士は夕涼して在し
 けるが。庭の切戸に音づる人あり。誰なるにやと見かへり給へば。去つとし清泉にて。
 ゆくりなく因みたる。江川太郎左衛門吉久。種々の布施物もたらして尋ね來つ。絶て久し
 き面會をよるこび。我は近きころゆかりありて此韭山といふ處に住はべりぬ。近來聖人の
 こゝに在すとさ。むかし戀しく訪たてまつりぬときこへければ。大士もよろこび年來の
 修行路より。今は弘むる妙法の。深き法門をかたり給ふにぞ。吉久謹んで御經を頂戴し。
 これより深く佛乘を信じ。一門のこりなく改宗し。時々此配所におどづれて。供養を捧げ
 給ひけり。さても鎌倉に在ては。工藤吉隆をはじめ。四條進士。池上等伊豆の伊東へ人を

馳。衣服品々を送り奉つることひきもきらず。日朗日興も。折々かしこに安否を訪。大士の恙なきを言續で。共に喜びあへりけり。時に天台の僧大乘坊松葉が谷に来て。日蓮聖人の法弟とならん事を願へども。いかんせん伊東に流罪とあれば力なし。一の徒弟日昭聖人は。大士に代て法弟檀越を教育ありければ。大乘坊も。日昭師の法弟となして給はれども。望めども。日昭師は兼て思召す事有て。元より弟子を取給はず。茲に聖人の法弟またわれば。何れなりとも御身撰みて。師匠と頼み給へとありければ。大乘坊しばし御庵室にといまり。其弟子衆の立振舞。またその學力を見るたりしが。心に感ずる處ありて。一日日朗聖人に向ひ。我この程こゝに在て。本化の宗流を見もし聞もし。いよく末法の要行は。法華經に限る事を。組辨へはべりぬ。されば玉をつらね。錦を緋が如く。僧俗どもに。あまた御弟子は在せども。我宿縁あるにや。頻りに御師を慕しく。ねもひはべる。何卒我を徒弟となして給はれとありけるに。日朗聖人笑て宣ふやう。御身は廿一歳。我は十八歳。師匠の若くて弟子の年長たるも。似つかはしからずとて。辭退なし給ふを。大乘坊これと聞き。こは淺ましき仰かな。百歳の翁も迷へば小兒なり。背に負し兒に淺瀬を教へら

れたる例もあり。齡の多少に優劣はあらじと。理をせめて願ふにぞ。これをゆるして授戒させ。師弟の契約を成給ひける。大乘坊日澄とさこへしは此人なり。弱輩の日朗聖人を師と頼みたる日澄師。凡人ならず。又齡高き日澄より。師と撰ばれたる。日朗聖人の智徳人品。五百年のひかしを。今に察して。いと尊く思はれけり

日朗聖人は。大士に別れ奉りてより。猶その御名残の忘れがたく。朝夕由比が波にいで。伊東の方をふし拜み。御讀經ありけるが。或夜波間に光明かゝやき。靈木の流れ倚ければ。日朗聖人これを得て。手づから高祖の尊像を彫刻し奉り。これを尊敬すること。生身の居士に事ふるが如く。御飯を供じ。茶を獻じ。丁蘭が親につかへし無二の孝心。たろそかならず在けるが。諸天感應の時いたり。御赦免有て。大士鎌倉へかへり給ひ。此像を御覽有て。汝が至心の誠にて。我精神の此像にや入ぬらん。伊豆の配所に在て。目どろむ夢に。日朗を見し事いく度ぞやと。悦び感じ給ひける。これ高祖大士の尊像を彫刻の始めなり。この尊像もとは武州碑文谷法華寺に。安置ありしが。元禄年中故有て同國堀の内村。日圓山妙法寺日性聖人の時。此寺にうつし奉る。

しかしてより此かな。現證救護の利益いちじるしく。世上に被ひれり。又大士伊豆に
 れいて。伊東八郎朝高が病ひを加持するどて。御したよめの護符を。日朗聖人へ御相
 傳ありしを。此尋條に因みて。今にこの妙法寺に傳へ。世に御張護符と稱して。信心
 歸依の聲。奇特をいのるもの多し。こゝに又日朗聖人の徒弟となりし。大乘坊日澄と
 いふは。相州小田原の人にして。濱名豊後守時成の子なり。三歳にして父母を失ひ。
 祖母の妙珍といへるに育てられ。乱國の世のならひ。さしもの大家も。人に押領せら
 れ。程なく家も亡びければ。自髪を切て天台の僧となりて。今本化の宗に歸す。後元
 享辛酉年。父母の邸跡を小田原にたづねて。妙珍山蓮昌寺といふ一寺を建立せり。
 又尾州名古屋妙光山本遠寺も。此師の草創なり
 むかし前漢の世に。于定國といへる官吏。誤て孝行の婦女を刑罪ければ天下三年雨ふらず
 。又燕の恵王。人の讒奏を信として。忠臣鄒衍を獄舎に繋ければ。六月霜をふらす。一人
 の非道すらかくの如し。いかにいはんや。國のため世のために。正法を弘通する僧を。流
 罪に處して。いかで其現報のなかるべき。弘長元年の五月。高祖を伊豆に流してより。い



極の内
 妙法寺現證
 利益の高祖
 諸人渴仰今尚
 盛ふり
 瑞輪寺の安産
 幸國寺の悪病
 除これを江戸
 三高祖と
 尊信人

くほどもなく。陸奥守重時たゞならぬ病ひに犯されて。氣狂はしくなり。其年十一月三日。あへなく逝去し。其子長時また執權時宗も。毎夜あしき夢にのみ魔れ。重時炎の車に乗て。泣苦しむ形状も。長時の幻現に見へ。病ひならねど五臓麻痺。胸うちさわぎて何となく。物恐ろしく覺へければ。僧をわまた請待して。一日五部の法華經を書しめ。其追善を營。猶日蓮を赦しかへさずば。悪しかりなんと心に悔み。今年弘長二年十一月十一日。赦免の狀を認めさせてありけれど。其彼と障る事ありて。その年もくれ今夏五月廿二日。高祖伊東の海邊に立て。日天子を拜し讀經ありしに。異相の人來て。この地もはや御名残りとして。禮拜して去りぬ。大士あやしみ思しけるに。其日鎌倉より知文をつたへて。伊東に來る。其狀に日蓮法師赦免あるべきよし。仰出さる。早々召返さるべし。家教。久家承るとぞ書たりける。これによつて大士。彼の地の人々に別れを告て。鎌倉にかへり給ひければ。歸依の信者みなく御庵室に馳聚り。かはるく喜びをのべ。徒弟達はいづれも嬉し涙にくれたりける。其夜人々皆燈檠のもとに聚り。三年このかた當地のありさまをかたり。大法すでに關東に躍さ。聖人の御本懐も稍満足の色現れたり。此上は折伏を御

罷あつて。宗門の御教化のみあらまほしと。口々に諫めけれども。大士さらに聞入給はず。今末法強毒のはじめなり。折伏を捨て。病に藥を止るが如く。慈悲に似て慈悲にあらす。猶このうへに他宗權門を征伐せば。三類の強敵いよく烈しかるべし。其時こそ御經の利驗も現るべしとて。ますく説相募りけり。此秋八月廿四日。朝より雨風烈しく。人家を吹潰し。山崩れて谷を埋め大雷八方に鳴はためき。由比の湊には。大船八十餘艘微塵に碎けるとぞ。同十一月廿二日には。さしも賢君のさこへありし。最明寺殿ことし三十七歳にして。逝去ありしかば。上下の諸人親に別れし幼稚に等く。世に力なく見へにけり。爰に駿州庵原郡。松野の邑主。松野六郎左衛門といふ人あり。同國上野なる南條兵衛の通家なるを以て。高祖大士の檀越となり。夫婦ともに歸依淺からずありけるが。松千代といふ一子あり。はじめその母夢に。蓮華の咲を見て懷妊せり。八歳の時四書を誦じ。生長に隨て。十三經。十七史。諸史百家の書をよみ。よく文章をつり生質凡人ならず。名利を物の數とせず。出家とならん事をねがひ比叡山に登て。剃髮しけれども。彼の山の宗法心に協はずとて。本國に歸り或時岩本實相寺に遊んで。學頭智海法印に此事を語る。智海聲を

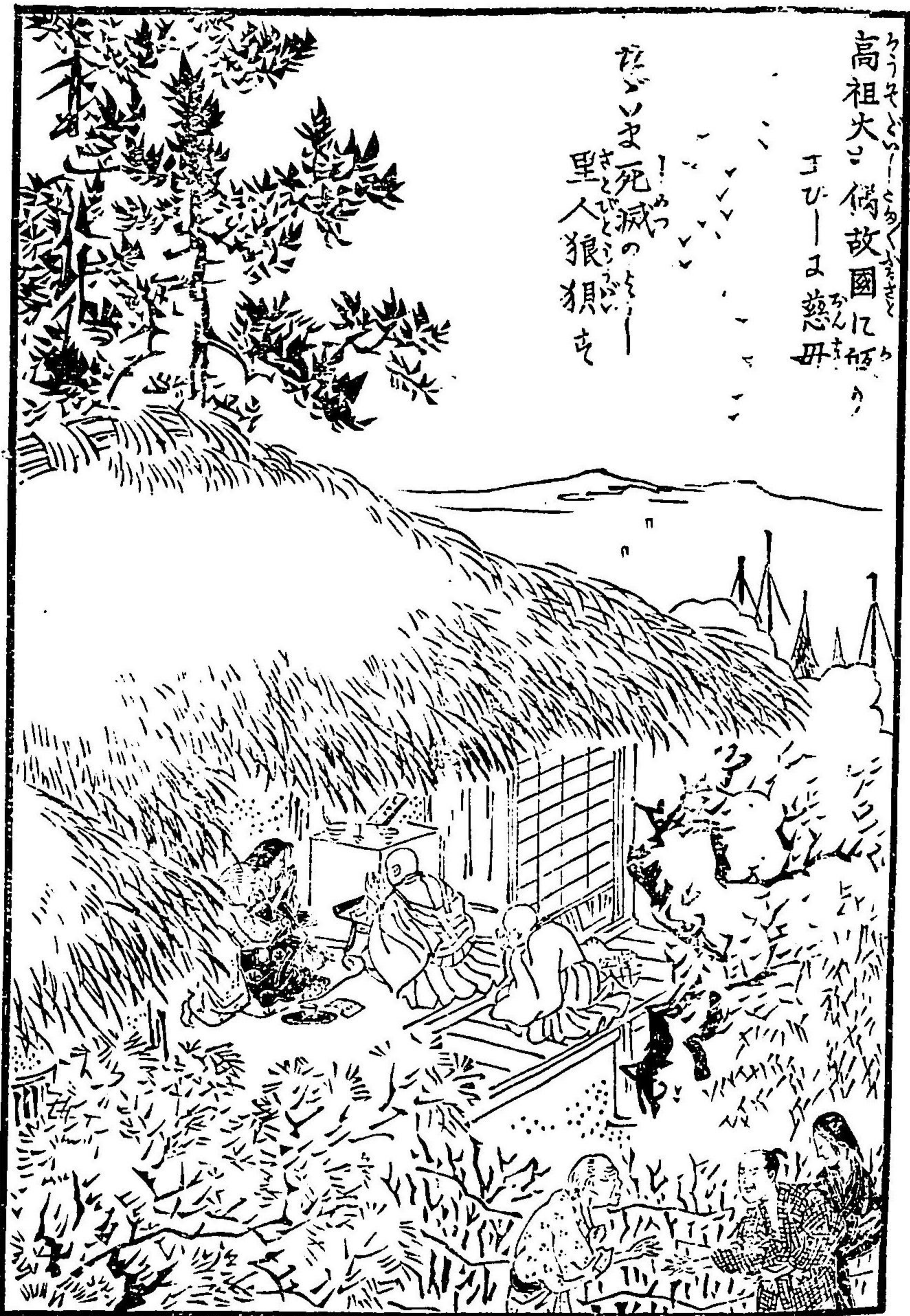
ひそめて。今鎌倉に日蓮といふ名僧あり。實に當今の英雄なり。我前頃この山の沙彌伯耆坊をすゝめて。其法弟となしぬ。今は日照と改名して。隨身するよしきりぬ。御身も佛敎の根元をさばめんとればさば。鎌倉へゆき給へどありけるにぞ。夫こそ近き頃我が両親の歸依ある僧なれば。因縁淺からずとて。弘葉が谷に來り。事の轉末を物がたりけるにぞ。大士も別て喜び給ひ。蓮華院日持と名を賜ひき。此時廿一歳。後年六老僧の一人に加へられ。能登阿闍梨。日持聖人と稱したる英傑なり。

松野六郎左衛門。本願として其地に一寺を建立し。日持聖人を開山とす。その徒弟日教日圓等。その闕を繼でありけるが。後年兵乱の爲に。寺院頽廢し。元和四年。紀伊の宣室。養珠院殿松野の地理狭小とて。同國有度郡沓が谷に移し。伽藍を再營なし給へり。今の貞松山蓮永寺これなり。日持聖人は。高祖大士入滅の後つらく思召やう。我が師本化の再誕として此日本國宿縁厚く。こゝに垂跡なし給ひ大法今大半國中に弘まつたり。此國の弘通は。日昭日朗等にてはや事たりぬべし。閩浮提廣宣流布とあるからは。日本一國は物の數ならず。願くは我れこれより外國異朝に渡り。佛縁うす

き蠻夷の諸國を弘通せんと。大願を發し給ひ。今茲永仁二年甲午九月十三日。高祖の十三回忌を我が山に營み。十月十三日御正當。身延山に登て。大士の御廟を拜して。御暇を告奉り。明れば永仁三年正月元日。齡加て四十六歳。元朝の喜びに益を擧。法を法子に譲り。寺を檀越に任せ。唯一人法衣を振て旅立たまひ。奥州津輕より。弘前にかゝり。路の傍の大石に題目を書いて。これを日本の名殘として。松前より靺鞨に渡りて。行衛知られず成給ひける。こゝをもつて日持聖人は。今に正月元日旅立の日をもつて。命日正當と仰奉るなり。それより年歴五百年。その教化利益の跡。一切知るべからずといへども。和漢ともに泰平入しく。彼國々より渡る書籍いと多き中に。日持聖人化導の跡と覺ゆる事尤も多し。行唐懸志地理の部に。分轄阜平の西に。法華の五社といふ祠あり。又法華村あり。題目ばかりを唱へて。諸宗の僧の入事を許さず。又蓮華寺といふ寺あり。東國輿地勝覽といふ書に。朝鮮の開城府に題目を唱ふる妙蓮寺あり。長瑞府に蓮華院。慶山縣に法華寺。靈元縣の蓮華寺。みな法華をもつて。その宗旨を立るよし其書に記す。又文祿年中。朝鮮征伐の時大明より加勢の軍中に題目

の旗見へたる事。清正紀事といふ書に記せり。近年相州浦賀の船。難風に流されて。唐土にいたる。船中十六人。船長勘右衛門。日蓮宗の信者にありければ。十界の本尊を。檣に掛けて。十六人高聲に題目を唱ふ。彼の國の人々これを見て。小船をもつて迎へたりけれども。言語一切に譯らず。彼のもの勘右衛門の袖を曳て。多く寺々に参詣せしむ。寺院凡十八ヶ寺。みな當宗門にて。その内の大寺を日蓮山法華經寺とする。此寺に日持聖人の墓あり。石碣に五月十八日とあり。年號は唐國の年號にして。見馴ざる文字ゆる。船子には讀ずして歸りぬと。年譜異攷に見へたり。これみな日持聖人。艱難弘通の跡にして。これを見聞こと雨夜の星の心地して。床しくも亦。尋くぞれもはれける

此秋の最中の月もや、虧て。初鴈が音ぞ渡るなる。古郷の空なつかしく。日蓮大士。しきりに悲母の事案じわび。日朝その弟徒日澄の兩人を將て。旅立つ。安房の國にねもむさ給ひ。絶て久しき我が宿をそれと音信たまひしに。鍼よ薬と取交て。家内に人の立願ぐにぞ。何事にやと尋ねたまへば。御母公此程病にふして在せしが。今朝しも秋の真寒に。俄



高祖大。偶故國に。エビ。又慈母

なんま死滅の。里人狼狽を

に瘡のさしつめて。唯今相はて給ひぬと。きくより大士は走りより。日蓮にはべるほど。喚べどさげべと亡魂の。消て果なき今はの訣れ。大士は心取直し。其機威の厚きは。定業も又かへし轉する法華の利益。今一度我が母を蘇生させて給はれと。本尊を書したため。檐牙の松にこれを掛け。御経讀誦ありけるに。病即消滅の文にいたり。緯切れたりし悲母の。氣息次第に立かへり御眼を見ひらさ。手を舉て。南無妙法蓮華經と唱へ給へば。大士は嬉しく傍側に寄。厚き御介保に日を経て。次第に快復なし給ひ。涙ながらに御物語り。かぎりしられぬうれしさに。思はずこゝに日敷をかさねたまひけり。この頃安房上總の兩國に。疫病大ひに流行し。死するもの多かりければ。彼の御母をいのり活し給ひたる。其奇特を言傳へかたりつぎて。大士を尊信し。此悪病を攘除さ給はれと。願ふにぞ。大士は白布に御題目をしたため。其端を船の艦に結びつけて。これを海に流し曳つ。浦々海上を消めぐらし。又小湊ちかき澳津の村なる。井戸の中に。護符を御認めありし石を沈め。この水を諸人に飲しめ給ふ程に。忽ち疫病退散して萬人の喜悅はいはんかたなかりき。今その井の邊りに寺を建て。殿長山釋迦本寺と稱しける。こゝに當國男金村に。小林民部實

信といふものあり。一子藤十郎齡四歳にして。性質凡ならず。常に寺に遊ぶを喜び。出家を見て嬉しむ。戯にも帛紗を結んで袈裟とし。木の實をつらねて。珠數を造る。父實信もこれ前生の約束ならんとて。貫名は舊き朋友といひ。幸ひ其兒の出家となり。道學たかき日蓮聖人。心れかれぬ昔の好みをもて。此兒十一歳なりけるを。高祖に奉りければ。いと愛み給ひ。御側さらす出家の學行満足して。後年六老僧の其一人として。大士入滅の後身延山第二世。民部卿日向聖人は。此兒にぞ在ける

日向聖人は。佐渡阿闍梨と號す。博學智辨にして。問答に長じたり。高祖の滅後十九年。正安二年の秋。中老師天目。鎌倉圓成寺に在いて。本迹勝劣といふ義流を立。圓極實義抄を造て。大ひに門派を募る。日向聖人名越に在して。これを聞召。天目を召給ふて。御身は大士の御側に在の日短し。在世の時曾谷教信。誤て其義を立しも。大士丁寧に教へ給ひし。これは御身等も知事ならずやと。法理を説て曉し給ひしに。尚心解す。又七ヶ條を問。聖人猶また其邪義を折く。天目も懺悔して退きたり。其餘宗門に興れ多し。後年藻原兼綱。本願として。上總國垣生郡藻原に。一寺を建立し。師